

るが、併し勝れたものである。解釋も哲學的根據を持つてゐる。叙述も明晰で、冷靜である。併し評價は極めて不充分である、常に移民文學の打ち越え得なかつた境界に依つて、制限せられてゐる。新時代を舊時代と分離せしめる、前世紀に對するこの決算は、決して究竟的のものではなく、かつ全く公平といふ譯には行かない。蓋しバラントは、公平に判断せむとの誠意を持つてゐたのであらうが、彼の能力がそれを許さなかつたのであらう。彼の全説明は、彼には意識されなかつたのであらうが、觀照家として思索家として、彼が闡明せむとせる、前世紀に對する反動に依つて、著く影響せられてゐる。

バラントの立脚地は暗示的であるし、かつ當時にあつては獨創的であつた。彼は、十八世紀の文學者は、佛國を震撼せしめたる大革命に責任を持つてるといふ、確定的になつてゐる意見をば、根據なきものと考へた。彼の説く所に據れば、その意見は、かの文學者達を正當に判断したものではない。何者、そは彼等に、餘りに大いなる意味を附與するからである。大厦が將に倒れむとしてゐなかつたなら、文學の力も能くこれを覆すことは出來なかつたであらう。ノディエー及びスタール夫人

と同時に、彼は、文學は社會狀態の表現であつて、その根源ではないといふ原則を主張し、かつこれを解説してゐる。彼の解釋に従へば、佛國に於ける權威を弱める上には、七年戦争は百科辭彙Encyclopédie Diderot及び D'Alembert に依つて編纂せられ、出版せられて、當時 sonné des sciences, des arts et des métiers の思想界に甚大なる影響を與へたる、Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers よりも、更に大いなる關與をなしたし、宗教に對する尊敬の念を破壊した上に於いては、新教徒及びジャンゼニステン(Jansenisten)、和蘭の加特力教の派(譯者)に對して、殘酷なる迫害を行へる老ルイ十四世の、宮廷に支配してゐた不信心の方が、哲學者の攻撃及び嘲罵よりも、遙かにひどい影響を持つてゐたのである。彼は、前世紀の文學に對して、何等の特別なる功績を歸しようとしなす。彼はそれをたゞ、普遍的疾患の徴候として見てゐる。哲學的の鋭眼を以て彼は、王政衰微の主要原因を探究してゐる。彼はそれを已に、マザラン(Mazarin)、有名なる佛國の宰相(譯者)とフロンド黨(譯者)の宮廷反對黨(譯者)との葛藤の結果に於いて見出してゐる。リシェリュ(Richelieu)、有名なる佛國の宰相(譯者)の鐵腕に壓制せらるゝの餘り、貴族も高官も、代るゝ民衆の後援を求めたので、彼等の威望は、漸次失墜するに至つた。獨り王權のみは嚴然として居つた。併し幾何もなくして、反抗の波浪は玉座にも壓迫するやうに

なつたが、これを侵す迄には至らなかつた。ルイ十四世の治世の前半に於いては、玉座のみは、一般の水準よりも遙かに高められてゐた。リシェリューの事業が、功を奏したのである。かくて今や、この獨り殘存せる王權をさへ覆せば、總ての社會的權威より、牽制力を奪取することが出來たのである。而してこの舉は、ルイ十四世の悲惨なる晩年と、攝政々治及びルイ十五世の紊亂せる治世との下に、充分に行はれたのである。

かくして十八世紀の哲學は、バラントに従へば、個人の有意的製作物ではなくして、國民精神の一般的傾向を表現したもので、言はゞ、國民の言ふ所を書き取つたやうなものである。併しこの事は、その哲學の價値を増した譯ではない。この哲學の事業はたゞ、輕佻にしてかつ不公平なる社會制度を、輕佻にしてかつ不公平なる方法に於いて、覆したに過ぎなかつたのだ。併しこの現象は、避く可からざる必然的の事であつた。歴史的法則に對する、確固たる信仰は、バラントの著書の根柢をなすものである。彼は恚う言つてゐる、人間の精神は、星と丁度同じやうに、ある軌道を経過すべく、不可抗的に決定されてゐる。」彼は、總ての時代に於いて、文學と社

會との間には、必然的關聯が存してゐることを知つてゐる。而してこの關聯は時に極めて不分明であつて、これを闡明するには、極めて周匝なる注意を要することがあるのに、かの時代に於けるその關聯は、それを識別するに、何等微細なる觀察を要しないくらい、彼には明白であつた。

これに對する第一の理由を、彼は讀者に對する著述家の關係に於いて發見する。往時にあつては、著述家の數は極めて少かつた。且つ彼等は、死語に於いて書いてゐた。當時は社會的生活もなく、従つて會話も、何等の勢力を持つてゐなかつた。著述家は社會の爲にはなく、たゞ彼等相互の爲に書いた。かくて彼等は社會からは、面白くもない術學者とのみ見られてゐた。然るに漸次、教化と啓蒙とが上流社會の間に弘がるに従つて、文學者はその社會のものとして實際するに至つた。かくて彼等は王公、貴族、即ち働く必要のない小範圍の爲に、書くやうになつた。ルイ十四世の時代に於いては、彼等は、上流社會に賞讃せられることをのみ努力した。然るに文化は漸進して、文學に對する眞の讀者ゾリアリヤムが出來るやうになり、而してこの讀者は文學者を權勢ある階級から、獨立せしめるに至つた。普魯西王國の國威を高め

むが爲に、ザルテイルをその朝廷に招聘したフリードリッヒ大王は、彼をば、ルイ十四世がモリエールに對したやうな優越的態度を以て、決して待遇しなかつた。寧ろ彼を自分と同格に見做してゐるやうであつた。當時の最高の政治的權力と最高の精神的勢力とは、一時同一の水準にあつた——尤もこの二大勢力が互ひに戦を宣告しなければならぬ時の近づくのを、何人も感じてはゐなかつた。而して十八世紀の後半に於いても、文學者は、一般社會と相互的關係を持續してゐた。

古代にあつては哲學者は、少しも民衆の趣味に迎合せざる、嚴格なる、かつ體系を重んずる思索家であつた。今やその言葉は、意味を變ずるに至つた。哲學者はもはや孤獨なる思索家ではなくして、世間人であつた。彼は書いたり教へたりするよりは、より多く談じ、絶えずその周圍に歓迎せられむことを努める世間人であつた。バラントは、時代精神が個々の文學者の上に及ぼせる、大いなる勢力の證據として、長老ド・マブリー(Abbe Maubry、佛國の著述家、哲學者、コンディヤックの如き、當時流行の哲學に對して、強烈なる反感を抱いてゐた人が、その反對派の哲學と同様なる結果に他の方法に依つて到達したことを舉げてゐる。而して民衆が文學者に先立つて

自ら案出せる理想の爲に、總ての歴史的傳習及び國民的記憶を、輕侮し得たことに對する説明を、バラントは、上流社會の非國民的古典的教育に於いて發見する。小學校に於いて學童は、バイヤール(Bayard、佛國の武將、一四七六—一四九五、譯者。)やデュゲスクラン(Duguesclin、佛國の將軍、一三八〇、譯者。)の名を知らぬうちに、エバミノンダスやレオニダス王の名を綴ることを教はつた。彼等は、トロヤ戰爭に深き興味を持つことを鼓吹されたが、十字軍に就いて殆ど教へられなかつた。絶對的權力の所産なる羅馬法典は、自由なる國民の生活から生れ出た、日耳曼法典をば、漸次排斥するに至つた。かくして古代より題材を取り來り、希臘羅馬に憧憬した文學者が、佛蘭西の社會に歓迎されたことも、文學に於いても國民的傳説が輕視されたことも、極めて自然な成行きであつた。

バラントはかくの如く、十八世紀に於ける文學の錯誤を、全社會の罪に歸した後に、——而して社會の行動は、彼には、悉く錯誤と想はれた——個々の卓越せる文學者を冷靜に評價し尊重す可き、確實なる根據に論及してゐる。彼の判斷は、移民文學の中に分散せる各種の思想を、焦點に集注せしめた趣きがある。

その死後に於いて、恰もバトロクルス(アヒルスの女に於いて、トロヤの圍みの際し)の死骸に就いての如く、その名聲に就いて争論せられたるヴォルテイルをば、彼は冷かに、併し憎惡の念をも交へずに、批判してゐる。彼はヴォルテイルの天賦の才能動かされ易き暴風的の感情生活、懸河の辯及び機智、文章の輕快優雅なることを賞讃してゐる。併し彼は、ヴォルテイルが時代精神に適合するやうに、その才能を操縦したことを、晩年までも彼に付き纏つてゐた皮肉、嘲弄に對する傾向と共に、惜んでゐる。而してヴォルテイルの争鬪的生活の價値に就いては、彼は少しも論及してゐない。彼はヴォルテイルを公平に批判すると公言してゐながら、而も彼の生活の眞諦とも稱す可き公憤を無視してゐる。彼はヴォルテイルに對する迫害をば、愚かしき事だとは言つてゐるが、卑劣なる行爲だとはしてゐない。終りに彼は、ヴォルテイルの缺陷ではなく、その美點をば辯疏してゐる。確かに彼は、辯疏することは、公平な態度であると信じてゐるのである。

前世紀の大いなる著述家の中で、バラントが熱烈なる嘆美を拂つてゐるのは、獨りモンテスキュー(Montesquie)のみである。而してこれは極めて自然的である。何

者、バラントは彼に於いて、自己の性情のあるものを見出したからである。モンテスキューは、普通の著述家ではなくして、バラント自身の如く高級官吏であり、また自己の品威と言行とを慮らねばならぬ、著名なる法律學者であつた。バラントは慙う言つてゐる、議長モンテスキューは、文學者が非常に尊重する、而も恐らく彼等の才能及び性格を妨害する獨立を持つてゐなかつた。吾人はこの巧膾なる逆語に於いて、帝政派であつて、而も那翁を敵視せる官吏の、要心深い自己辯護を感じない譯には行かない。併し予は、バラントがモンテスキューを嘆美するが、不當だと言ふのではない。蓋し當時の文學者は、才能に於いては、モンテスキューよりも勝つてゐたらう。併し彼の實際生活、行政及び政治に對する確實なる知識は、他人に缺けてゐた見解と、新世紀の初葉に於いては、大いなる價値を持つてゐた節度とを、バラントに與へた。かくしてバラントは、他人に於いては、神經質的に非難する多くの點を、モンテスキューに於いては、黙許し、もしくは賛成してゐる。彼はモンテスキューの著「法の精神」(„De l'Esprit des Loix")を、同題目の「ドナール」(Jean Donat. 佛國の法律學者。)の古き著述と比較することに依つて、前者に於いて、學の進歩の認められることを證明し

てゐる。何者、モンテスキューは宗教に對して適當なる尊敬を拂ひつゝ、而もこれを從屬的事項と見做してゐるからである。(Alors on pourra distinguer, comment la religion, respectée par Montesquieu, était pourtant jugée par lui, tandis que Domat l'avait seulement adorée, et en avait fait tout découler, au lieu de la considérer comme accessoire.)

ディデロー (Diderot) は、バラントが最も多くの偏見を以て批判したる文學者である。彼に對するバラントの判断は、全く偏狹である。彼はディデローの焦躁と激烈なる性質との爲に、彼の天才的な點を無視してゐる。殆ど自然力を想起せしめる程の、ディデローの放膽は、恐怖と失望との時代の兒なる彼には、少しも理解せられなかつた。ディデローは當時の表面的に道德的なる同國人よりは、思想上に於いて偏見なき獨逸人に依つて、好愛されるやうな人物であつた。ゲーテも彼の「ラモアの甥」(Le Neveu de Rameau) を翻譯し、「ハーゲルもその「精神の現象論」(Phänomenologie des Geistes) に於いて、彼を論評してゐる。而してバラントは、宗教に對する彼の不斷の過激なる攻撃を烈しく非難し、彼の特質をば、次の言葉で約説してゐる、彼は火の如く熱烈なる、而して不秩序なる内面生活を持つてゐた。併し彼の精神は、燃料

なき火であつた。多少の光輝を發揮せる彼の才能は、少しも組織的活用に用ゐられなかつた。十八世紀の最も自然主義的なる文學者が、新興の理想家に依つて、最も低く評價されたのは、さもありぬべき事である。

ルソーは十九世紀の柵内に引き出されたる、十八世紀の文學者の最後の者であるが、彼はバラントの心を牽き付けなければならぬ、特質を持つてゐた。彼等の中で、彼一人は感傷的であつた。而して新世紀もまた、感傷的にならむとしつゝあつた。彼は彼等の中で、最も孤獨なる人であつた。而して新世紀は、かゝる孤獨なる人格を尊重した。彼は哲學者及びエンチクロペディスト(エンチクロペデーに執筆せる、德國の學者の一派、譯者)の集團から全く離れて居つた。彼の性格は、不幸なる落寞たる生活に依つて形成された。彼は社會及び輿論に對して、何等の關係を持つてゐなかつた。家族なく、友人なく、位階なく、祖國なく、彼は歐洲を遍歴した。而して彼が文學者として立つた時には、彼は社會に阿諛する代りに、それを呪咀した。總てのそれらの點は、確かにバラントの心に訴へた。而も前世紀の精神に對する反動が、いかに進んだかを見むが爲には、吾人はたゞ彼のルソーに對する批評と、彼の友人なるスタール夫人

に依つて、二十年以前に書かれたるルソー論とを比較すれば、足りるのである。彼がルソーの生活に於ける、不純な分子や汚點を縷説してゐるのは、それだけ取つて見れば、正當といふことが出来る。而してこの點に於いて、彼の批評は、スタール夫人の熱烈なる辯護に對する好個の對照である。ルソーの政治上の議論に對する彼の批判は、流石に、スタール夫人の女らしき、偏狹なる辯護と比しては、頗る峻烈であり、かつ老巧であるが、ルソーの宗教上の改革に對する企圖を、尊重する點に於いては、彼は遙かに彼女に劣つてゐる。ルソーの有名なる信仰告白及び自然宗教に對する、彼の主要なる反駁は、それは禮拜なき宗教だといふのである。彼は尙かう言つてゐる、それも然し、ルソーに於いては怪むに足りない。實行を伴はざる道德は、禮拜を伴はざる宗教に相應してゐるからである。かくの如く、宗教上に於いては自由思想を有せる、この批評家も、保守的傾向を徹底せしめむが爲に、ルソーに對して、現存の教會的儀式を辯護するやうになつた。

バラントの偏狹と不公平との根柢には、次の二十餘年間に輩出せる自由主義の文學者をも、迷路に引き入れた思想が横はつて居つた。その思想とは、今や佛蘭西

に入り來り、漸くその勢力を扶植し、グザン(Cousin, 佛蘭西の哲學者。一七九二—一八六七、譯者。)及びその學派の下に、國家的哲學に高められたる、唯心論的哲學であつた。この哲學が、その原理と思想とを、出来るだけ明瞭に證明することを以て満足したならば、それは他の哲學と同じく、反對論を惹き起す丈で、反感と嫌惡とを誘起しなかつたであらう。然るにこの哲學に於いては、かつこの哲學の流行した殆ど總ての國に於いては、當初から非科學的なる、かつ惡兆候を有せる傾向が現はれた。この派の哲學者は、この哲學の原理を論證せずして、たゞその倫理的宗教的方面をのみ力説した。彼等は、その論敵を、義務的感情、靈感及び高尚なる理想に缺乏せる者として、責めることは努力したが、論敵の説を反證することには、餘り力を注がなかつた。

スタール夫人の感覺論に對する恐怖は、その思想そのものに對する者ではなくして、その結果に對する恐怖であつた。眞理に對する熱烈なる愛を持ち乍ら、哲學に對しては單なるディレクタント(素人的愛好者)に過ぎなかつたこの夫人は、極めて素朴に、感覺論的心理學は、人々の心を那翁の壓制に對する、受動的屈服に導くであらうといふことを恐れた。自由に對する愛からして彼女は、その思想に對して、武

器を向けたのである。男子たるバラントに對しては、吾人はかゝる辯疏をなす可
き限りではない。彼に對しても、デ・カルト(Descartes. 佛國の哲學者。一五九六—一六五〇。譯者。)やライブニッツ(Leibniz. 獨逸の哲學者。一六四六—一七一六。譯者。)は偉大なる思想家であるのみではなく、形而上學に於ける善き原理の代表者であつた——恰も道德的概念が、形而上學に對しても用ゐられるかのやうに。彼は恚う述べてゐる、恐らく彼等は、時々朦朧たる領土に没入した。併し彼等は少くとも、高尚なる方面に突き進んだ。彼等の思想は、深き自己考察の際に吾人を感動せしめる、思想と一致してゐる。而して彼等の方向は自然的に、高尚なる學に、宗教及び道德に、吾人を導くものである。次に彼の説く所に從へば、人々は彼等の思想に飽きて、今やロダグ(Rodag. 英國の哲學者。一六三二—一七〇四。譯者。)やヒューム(Hume. 英國の哲學者。一七七六。譯者。)の徑路に追從してゐる。而して彼は、これらの人々の思想をば、デ・カルト等の説と反對ではあるが、同權なるものとせずして、人生を墮落せしめ、學問を讀すものだとなしてゐる。彼は、スピノーザ——彼はこの哲學者をホッブス(Hobbes)と同じ組に入れてゐる——の哲學は、當然反對されねばならぬ、それも推理を以てではなく、公憤を以て反對されねばならぬと言つてゐる(バラント著「十八

世紀の佛蘭西文學。」二一三頁參照。

彼は經驗論者に反對するに、悟性の形式は、吾々の精神にその根源を有してゐるといふ、カントの有名なる説を以てしてゐる、而して宗教的素質といふものは、言はゞ總ての時代、總ての國民に、先天的に存在してゐるものであると述べてゐる。彼は死後の生活に對する信仰、死人に對する畏敬の念、生活は死人に對して終つてゐないといふ確信に基ける、死人の埋葬、及び世界は嘗て創造されたもので、いつかはまた滅亡しなければならぬといふ信仰が、常に到る處に存するといふことを述べてゐる。この事は、コンスタンに於けるが如く、彼に於いても、一切宗教の確固たる根柢を形成する、心理的要素である。これらの要素が、宗教的感情以外にも見出される、一層簡短なる要素に還元される者であるといふ事に對しては、彼は何等の理解を持つてゐない。何者、彼は自由研究を知らない、而して、高尚なる哲學の光輝ある遺産(「le glorieux héritage de la haute philosophie」)を繼承することを、名譽としてゐるからである。

全く同様なる論法で、彼は、道德を、經驗的根據に依つて説明せむとする企圖に反

對してゐる。彼は恚う言つてゐる、萬人の心情に生きつゝある、正義及び同情の感情から出發する代りに、人々は道德をば、自己保存及び利己の衝動の上に築き上げむとした。彼は明かに、反對派の思索家をして、正義の觀念をその根本要素に分解し、その起源と發展とを證示せしめむとしたる、深遠なる哲學的衝動を、全く理解しなかつたのである。彼はたゞ、人々はかゝる過程に於いては、決して天啓的宗教に到達することは出來ないと言つて憤慨してゐる、天啓に對する神聖なる證據を、不信仰が排斥したのである。」(On arriva bientôt à tout nier ; déjà l'incrédulité avait rejeté les preuves divines de la révélation et avait abjuré les devoirs et les souvenirs chrétiens.)

モンテスキューの「波斯人の書翰」(Lettres Persanes)を賞讃し、彼が宗教を附屬事項としてゐるのを是認せる、バラントは、その時代の不徹底なる風潮に捲き込まれて、正義の觀念を形成する根本要素を、發見せむとする經驗論者の企圖を恐怖してゐる。かくして吾人は、バラントが感覺論なる言葉の二重意義を濫用してゐたことを發見する。この二重意義たるや、全世紀を通して、卑屈なる學者の武器となつてゐたのだ。即ち彼等は感覺論を、時には一定の認識論の名稱として用ゐ、時として

はそれを、肉感性、肉慾、或は肉慾が人生の目的であるといふ説と、同意義に解してゐたのだ。吾人は已にバラントに於いて、後にはクザンの一派に於いての如く、佛國に於いて十九世紀の初めの十數年間に發展せる、淺薄なる非科學的なる唯心論が、徳及び善良なる風俗習慣を鼓吹する哲學として、力説されてゐるのを發見する。

スタール夫人は、*„Mercure de France”* と云ふ當時の新聞の爲に、バラントの著書に對する批評を書いた。尤もこの批評は、檢閲の結果、印刷に附することを禁じられたが、後にその儘の形式に於いて出版された。その批評は、僅かに三葉ほどのものであるが、これを見ただけでも吾人は、それを書いた人が天才的であつたといふ事を、認めることが出来る。彼女は初めに、少壯なる著者の圓熟と中庸とを、大いに賞讃してゐる、而してたゞ、彼が數々彼自身の印象を重んじない事と、かつ抑制の爲に力感が減殺されてゐることを、惜んでゐる。それから彼女は直覺的に、この著書の偶然的及び個人的の長處と缺點との背後に動ける、新世紀の精神的特質を認めてゐる。この書の考察は、活氣ある、改革的精神を有せる彼女が、進歩思想の支配してゐた前世紀の所産であつたことを、彼女に感ぜしめた。而してこの書は彼女には、

過渡期の終結を暗示するものゝ如くに思はれた。彼女は、この書に表はれたる、因襲に對する屈服運命論、完成されたる事柄 (fait accompli) に對する尊敬の爲に、驚かさずにはゐなかつた。彼女は、境遇の壓迫に對する降服は、新時代の一つの特質であるといふことを豫感した。彼女は、新時代の哲學は主として、現實的は合理的であるといふ、論證であらうといふことを、豫め推察した。而して彼女は天才者の透視眼を以て、現實的といふ言葉が極めて曖昧なものであるといふ事と、その思想は明かに、生氣なき因循主義に導くものであるといふ事とを、認めたりである。彼女は、その批評を、次の豫言者の言葉を以て結んでゐる。

「十八世紀は原理をば、餘りに無制限なる方法で唱道した。而して十九世紀は恐らく、餘りに屈從的な態度を以て、事實を闡明しようとするだらう。前者は、事物の自然性を信じてゐた。後者は、恐らく、境遇を信ずるやうにならう。前者は、未來を支配せむと冀望した。後者は、單に人間を理解する事に努力するだらう。而してこの書の著者は、恐らく、明かに新世紀の色調を帯びたる最初の人であらう。」
この表白は、極めて意味深くかつ的確である。スターン夫人が知つてゐた人々

の中に、最初に輩出せるパラントぐらゐ、前世紀と截然として、自己を分離せしめたものはなかつた。他の人々は各自に、十八世紀といふ、沈み行く船を見捨て、十九世紀の甲板に乗り込み、その船に搭載す可き貨物や穀類を、段々にそれへ積み込んだ。然しその船は尙、前の難破船と相接して並んでゐた。而してその大索を斷ち切つて、船を大洋に向つて進ましめたものは、パラントその人であつたのだ。

結 論

これまで吾人が、その展開發展を追究したる文學的集團は、織り組まれたる全體といふやうな印象を、吾人に與へる。互ひに交錯する無數の絲が、一の著作から他の著作へ連なつてゐる。而して以上の叙述は、たゞその内面的脈絡をば明瞭にしたもので、個々別々のものを、縦まに織り合せたものではない。而して一言注意して置きたい事は、これらの著作の全體と、これらの文學者の團隊は、一つの集團を成してゐるのであつて、派を形成してゐるものではないといふ事である。何者、集團とは、共通の傾向を有する人々及び著作の、自然的無意的結合であり、派とは、文學者が、ある多少の明瞭なる確信の指導の下に、意識的に集合する時に、形成されるものだからである。

移民文學は、佛蘭西のものであるが、佛蘭西以外にも發展した。その文學を理解

する爲には、吾人は常に、秩序は分解せられ、合法的精神は放棄せられ、權力階級は壓倒せられ、歴史的宗教は無視せられたる、短くはあるが、激甚なる動亂に満ちたる期間を、念頭に置いてゐなければならぬ。而して宗教の羈絆より離れたる人々は、純科學的立脚地からさうしたのではなくて、寧ろ、抗論的の哲學の力を藉りたのである。さればそれらの人々の顧慮なき、往々にして公正ならざる攻撃は、舊時代に對して擧げられたる告訴を是認し得ず、かつ新状態に於いて精神的、道德的欲望及び全感情生活の満足を見出し得ざる、人々を苛立たした。人道及び進歩の思想が、何等の實際的効果を擧げ得ざるを見るに及んで、人心は益々切實に、一轉換を冀求するに至つた。轉換は來つた、反動は始まつた。而して予は、その反動は、最初は部分的反動であつたこと、革命的思想が絶えず、ヴァルテイルに反對する思想と混淆して居つたことを述べた。而して吾人は、この集團の文學者の著名なるものは、皆十八世紀に、彼等の精神的出發點を有し、兎もすれば、追憶や回歸やに傾きつゝあつたことを見出した。彼等は言はゞ皆、ルソーから出發してゐる。彼等の第一歩は、たゞルソーの武器を擱んで、それを彼等の敵なるヴァルテイルに差し向けるといふ事で

あつた。獨り彼等の中の年少者、バランツのみが、眞實にルソーとの血縁から、離れ得たのである。

これらの文學者に次いで、佛國に起こつたものは、保守的傾向を持つた文學者の一團であつた。彼等はまた大抵、移住者であつた、而して無條件的の根本的の反動の爲に、力を盡した。彼等の著作は、シャトリアンの如き、藝術的には進歩しても國家及び宗教に對する態度に於いては、反動的である文學者の著作や、ラマルタイヌ及びユーゴーの如き、後には自由主義なり、急進主義なりに變つた作家の、青年期の反動的の著作やと共に、全然舊に即し、權威に對する服従を主唱する一集團を形成してゐる。彼等の中には、ジセフ・ド・メイトル、ボナール (Bonald)、ラムネーの如き人々がゐる。

乍併、移民文學の名稱の下には、予は、より健全なる文學的作品を集收した。それらの作品に於いては、反動は未だ權威に對する盲目的の屈服ではなくして、冷かなる悟性、精細なる打算及び法則と傳習とで縛られた文學に對する、感情、靈情熱及び詩の、自然的にしてかつ正常なる主張であつた。これに次いで起こつた集團は、一の

主宰的の原則の下に、緊密に結合してゐるからして、必然的に、より明確なる輪廓を持つてはゐる。反之、移民文學の方には、より多くの生命、情調及び波打てる力が存してゐる。

移民文學の文學者及び著作は、言はゞ、明滅定めなき光の中に立つてゐる。これらの人々は、新世紀の黎明に立つてゐる。十九世紀の曙光が、彼等の上に落ちて、オシアンシアンの霧及びヴェルテルヴェルテルの憂鬱の面衣ヴェルをば、徐ろに劈いて行つた。人々は、醜惡と悽慘とに満ちた夜が、自分等の背後に横はつてゐたことを感ずる。彼等の顔色は青白く、かつ沈痛に見える。然し、彼等の悲哀は詩的であり、彼等の憂鬱は同情を誘起する。而して吾人は、情熱的發憤の裡に、酸酔するやうな力の籠もつてゐることを發見する。その發憤たるや、前の日の仕事を繼續することが出來ずに、寧ろその日に設置された基礎を、懷疑の眼を以て眺め、而して深夜の暴風に荒らされなかつたものを、苦心して拾集せねばならぬ悲哀を示してゐるのだ。

移民文學はかくして、深き感動の籠もれる文學である。

シャトリアンは、その激烈なる情熱と、雄麗にして色彩に富める自然描寫とを

以て、形式主義を打破せる第一の人である。彼に於いては總てのものが、加特力教的忘我と惡魔的情慾とで燃えてゐる。併しその火焰の裡には、唯我的にして孤獨なる近代的天才、ルネが一の石像のやうに屹立してゐる。

セナンクールの著作は、近代的自由主義をば、浪漫的憧憬と結合せしめ、日耳曼民族的感傷性及び現實避忌をば、羅甸民族的の纖細なる官能及び一切の問題を自殺と面接せる、絶望的氣分を以て闡明せむとする叛逆的傾向と、融合せしめてゐる。

ノディーエーがこの合唱の中に、彼の聲音を交へてゐる。巧妙に、圓滑に、空想的に、反抗慾に満ちて、彼は那翁及び社會制度を攻撃し、クロップシュトック及び僧庵生活を讚美する。幼兒の如く素朴にして、而も老人の如く學識深き彼は、迫害の妙悦と、心靜かに孤獨の裡に研究をなし得る喜悅とを、享受せむがために、殉教を冀求してゐる。不斷の進歩を保ちつゝ、彼は進歩に對する信仰を、彼の絶間なき嘲笑の標的としてゐる。

コンスタンは、政治家として、また専門家をも後に瞠若たらしめる程の、素人小説家として、立ち現れる。彼の精神は、二つの時代の精神生活の間を、振子の如く動い

てゐる。天性に於いては彼は、十八世紀の子である。併し彼の教養と目的とに於いては、彼は綜合及び憲法の時代に屬する。彼はその唯一の文學的作物に於いて、その時代に、心理的描寫の模範と、いかに多くの勝れたる感情及び力が、近代社會の祭壇の犠牲に供せられたかの暗示とを、示してゐる。

而して移民文學が、その努力及び精神的傾向とを、眞に意識し得たのは、實にスタール夫人の力に據るのである。この婦人の姿は、全集團を統率してゐる。移民文學の堅實なる傾向は、悉く彼女の著書の中に、蒐集されてゐる。革命的傾向と革命に對する反動とは、移民文學の他の文學者に於いては、不調和を惹き起してゐるが、彼女に於いては、反動的でも革命的でもない、改革的の努力として、合一されてゐる。他の人々と同じく、彼女もルソーを出發點としてゐる、また革命の過激なる點に於いて嘆じてゐる。而も、何人よりも、より深く、彼女は、個人的及び政治的自由を愛してゐる。彼女は國家の專制力及び社會の偽善、國民的自負及び宗教的偏見に抗爭し、近隣國民の國民的精神及び文學の知識を佛國に輸入し、赤手を以て、勝ち誇れる佛國を圍繞せる、自負の城壁を打ち崩してゐる。バラントは、たゞ十八世紀に於け

る佛國の遠望的叙述を以て、彼女の業を繼承し、而してそれを終結せしめてゐる。

スタール夫人に、その活動の最終期に於いて影響を及ぼし、バラントにも多少の波動を及ぼしたる、獨逸の浪漫的文學は、言ふ迄もなく、移民文學と關聯を持つてゐる。予が移民文學といふ共通的名稱を與へたる、著書の全體は、佛國に於ける浪漫派に先んずる、一種の浪漫派とも言はれ得るのである。併し移民文學は、日耳曼的精神及び自分と同時代の獨逸浪漫派と、幾多の點に於いて、自然的の同感と接觸とを持つてゐる。かくしてスタール夫人は、その「獨逸論」に於いて、ルソー、ベルナルダンド・ドゥ・サン・ピエール及びシャトーブリアンを、無意識ではあるが、獨逸人と呼んでゐる。

かつ吾人は移民文學の文學者の誰彼に於いて、屢々浪漫的 (das Romantische) に對する傾向を見出し、彼等がこの言葉と概念とに興味を注いでゐるのを發見するが、これも如上の理由に因るのである。

彼等は、十九世紀に於いて、自分等に續いて起つた文學者の先驅をなしてゐるのみではなく、またそれらの人々の好原型をなしてゐる。シャトーブリアンは、浪漫的色彩家としてユーゴーに、厭世的憂鬱に於いては、バイロンに相當してゐる。セ

ナンクールの打つたる絃は已に、その後セントブウヅに依つて奏でられた調べを出してゐる。ノディエーは、その哲學的及び考古學的學識と、その純正なる言語と、その荒唐無稽なる題材とを以て、メリメー (Mérimée) の先驅である。コンスタンは、佛國に於いて、小説文學が盛になつた以前に已に、バルザックの女主人公を描いてゐる。政治家としての彼は、自由主義と反教會主義とを持つてゐるが、獨逸の特に浪漫的なる政治家、ゲンツ (Er. v. Gentz) と相通する所を持つてゐる。バラントは、その唯心論的にして運命論的なる文學論を以て、ヴィクトル・クザンの時代に絶頂に達したる、文學批評と美學との準備をなしてゐる。終りにスタール夫人は、この世紀の最も大いなる閨秀作家、ジルヂサンドの前驅をなしてゐるやうに思はれる。サンドはスタール夫人ほどの高邁なる精神を持つてはゐなかつたが、彼女よりも一層天才的にして、獨創的なる女詩人であり、思想家である。

半世紀間の全大陸の文學史は、勿論、單なる一點から出發してゐるものではない。歴史家に依つて選ばれたる出發點は、常に偶發的にして任意的なものである。彼はその本能と批評的眼識とに信賴しなければならぬ。然らずんば彼は、何處か

ら始めて宜いか分らないであらう。予には、移民文學は、歴史そのものに依つて與へられたる自然的出發點のやうに思はれる。この集團は、一面から見ると、佛蘭西文學に於ける後の宗教的及び政治的反動を準備し、他面から見ると、佛蘭西浪漫派の路を開拓してゐる。それはまた總ての點に於いて、獨逸浪漫派の研究及び理解を人に促してゐる。その上この文學は、バイロン及びバルザックの如き、遠距離の現象とも、幾多の接觸點を持つてゐる。

要之、移民文學は、十九世紀の大いなる文學的戯曲の、序曲をなせる者である。

第二卷 獨逸の浪漫派

第二卷 目次

序論	文學の心理學的考察	獨逸及び丁抹の浪漫派	
一	浪漫主義の準備		一
	開拓者 主觀主義 情念の不羈奔放		三
二	ヘルデルリン		六
三	ヴァイルヘルム・シュレーゲル		六
四	テイク及びジャン・パウル		一〇
五	浪漫家の社會的努力		一三
	シュレーゲルの「ルチンデ」		一三
六	浪漫派の無目的		一四
七	「ルチンデ」に相應する現實		一四

Allen Gewalten
 Zum Trutz sich erhalten,
 Nimmer sich beugen.....
 Goethe.
 Philosophieren ist dephlegmatisieren, vivificieren.
 Novalis.

八 「ルチンデ」に關するシュライエルマッヒェルの書翰……………一七七

附、ゾルヂ・サンド及びシエリイの結婚論

九 ヴッケンローデル 浪漫派と音楽との關係……………一九七

一〇 藝術及び自然に對する浪漫派の態度……………二〇六

テイクの「シュテルンバルド」

一一 浪漫派の反射及び心理學……………二七四

テイクの諷刺劇 ホッフマン シヤミツツ

一二 浪漫派のゲミュート……………三三六

ノゾーリスとシエリイ

一三 浪漫派の憧憬「青い花」……………三七六

ノゾーリスの「ハインリッヒ・フォン・オフトエルディンゲン」

アイヒェンドルフの「タウゲニヒツ」 丁抹の浪漫家

一四 アルニム及びブレンダノ……………四三三

一五 浪漫派の戯曲に於ける神秘……………四七〇

テイク ハイニンリッヒ・フォン・クライスト ツァッハリア

ス・ヴェルネル

一六 浪漫派の文學と政治との關係……………五三七

テイク ファヒテ アルント ヤアン フーケー

一七 浪漫派の政治家……………五八六

ヨゼフ・ギョルレス フリードリッヒ・フォン・ゲンツ ジョセ

フ・ド・メートル

序論

文學の心理學的考察 獨逸及び丁抹の浪漫派

獨逸の浪漫派に關する系統的敘述を與へることは、丁抹人にとつては、極めて困難な且つ勇氣を殺ぐやうな仕事である。この問題は第一、非常に廣汎である。次にそれは、獨逸の著述家に依つて、屢々かつ各方面に渡つて、詳細に論じられた者である。それ故に材料を手に入れ難い外國人が、それを論じて彼等と拮抗しようといふのは、殆ど不可能な事である。彼等は幼時から自國の文學に親昵してゐるの

に、外國人は同化力の乏しくなる時代に於いて、始めてそれを學ばねばならぬからである。外國の批評家はかくして、一つには彼の個人的立脚地を斷乎直截に主張する點と、一つには出来るならば、本國の批評家に於いて餘り現れざる特質をば發揮する點とに、彼の強味を置かなければなるまい。その特質とは、この場合に於いては藝術的能力である、即ち外面化の能力である。獨逸人の性質は、この能力を持ち得ないほど、内面的であり、かつ深遠である。それから外國人は、人種的特徴——獨逸の文學者の獨逸人たる點——を本國人よりも一層容易に認め得るといふ點に於いて、本國人よりも有利の地位に居る。本國の批評家には、獨逸人である、人間であるとは、同義語のやうに思はれがちである。何者、彼等の論ずる人間は、殆ど常に獨逸人だからである。本國人が、自分が常にそれを目撃してゐるとか、或は自分がそれを所有してゐるとかいふ理由で、不問に附する特質は、大いに吾々外國人の耳目を聳てしめるのである。

予は檢覈す可き多くの作物と、論評す可き多くの人物とを持つてゐる。これらの人物に、出来る丈け明瞭なる輪廓を與へようといふのが、予の企圖する處である。

何人も總てを盡すといふことは、出来ないものだ。全體を力強く、かつその主要なる特徴を明かにするやうに、描寫しようといふのが、予の主義である。予は一方に於いては、文學史を出来る丈け心理學的に取扱ひ、出来る丈け深く探究して、種々の文學的現象を準備しかつ生起せしめる、感情生活の機微を闡明するやうに努めようと思ふ。また他方に於いては、その結果をば出来る丈け彫塑的な、明晰な形式において表現することを試みようと思ふ。文學的運動の根柢に横はる幽微なる感情及び抽象的觀念を、明瞭に表示することが出来たならば、予の任務は達せられたのである。而して予は出来るならば、抽象的原理をば個人に即して、具象的に示さうと思ふのである。

かくして先づ第一に予は、いかなる場合に於いても、文學を人生と關聯せしめて論ずる。讀者はこの事情を、この著の第一巻がわが國に於いては、宗教的社會的及び道德的方面において、幾多の反對論を誘起したことに依つても、認め得るであらう。かくも議論を沸騰せしめたのは、一つには論敵が予の著を理解しなかつたのにも因るが、主として予の批評的態度に原因してゐるのである。丁抹文學に於け

る往時の論戰、例へば Heiberg と Hanch (一七九〇—) のそれ、Baggesen (一七六四—) と Ohlenschläger とのそれの如きは、専ら文學的範圍にのみ限られ、文學上の主義原則をのみ云々したのである。予が今や叙述し檢覈せむとしつゝある反動と近似せる、わが國の反動は、それに反抗することを目的とした運動をば、剷滅せむと試みた。然しそれは恐らく成効しないであらう。佛蘭西人は恁ういふ格言を有してゐる、「いかなるプリンスも、彼の繼承者を殺さなかつた。」(“Nul prince n'a tué son successeur.”) 文學と人生との關係に對する予の解釋からして、當然に生ずる結果は、予の文學史は決して、所謂接客室的文學史でないといふ事である。予は深く實人生に立ち入つて、文學に表現せられたる感情は、いかにして人間の心情に生起するかを闡明する。而して人間の心情は、決して靜かな池でもなければ、閑寂なる山上の湖でもない。そは一つの太洋で、その底には種々の植物や、怪奇なる動物やが住んでゐる。接客室的文學史は接客室的文學の如く、人生をば、光澤ある家具が並べられた、文雅な人々の集れる接客室、裝飾されたる舞踏室——そこには燈光燦として暗き隅々をも照らしてゐる——と考へる。事物をかゝる方面から觀察せむとする人々を

して爾くなさしめよ、それは斷じて予の見地ではない。植物學者は刺草の類をも、薔薇と同様に取扱はねばならぬ如く、文學を研究せむとする者は、自然科学者や醫師の何ものをも恐れざる底の眼光を以て、人間の性情の形式を、その種々相と諸々の關係とに於いて、注意することを心掛けねばならない。植物が刺すか或は香氣を放つかは、何等の關する處ではない。然し植物學者の冷靜なる研究心は、兎もすれば、花の美を賞づる純人情的の喜びに、伴はれがちのものである。予は各國の重要な文學的運動を、心理的に考察するに當つて、流動的の材料をば凝縮せしむるやうに努める、即ちそれらの材料は折々これこれの明確なる、一目瞭然たる典型に結晶するといふ事を、證示しようと思ふ。この努力に對して、獨逸文學のこの時期は、非常なる困難を提供する。何者、明瞭なる典型的形式のなき事が、實にこの文學の特徴だからである。この文學は彫塑的ではなく、音樂的である。佛蘭西の浪漫主義は、明確なる形像を作り出してゐるが、獨逸の浪漫主義の理想は、形像ではなくして、旋律である、一定の形式ではなくして、無限の憧憬である。而して獨逸の浪漫派がその憧憬の對象に命名すべく強ひられる時は、たゞ、一の深秘な

言葉「青い花」^{ヴァルト}、森林静寂の愚惑^{ブルクホルツ}の如き言葉を選ぶに過ぎない。尤もこれらの名稱は、情調の表現である。而して各々の情調は、それに相應する一定の心理的狀態を持つてゐる。予の企圖する處は、各々の情調、感情、憧憬を、それらの情調の集團に導き入れる事である。この結束された集團は、一の心靈を形成してゐる。而してかゝる心靈は、彼等自身の實體を自ら描き出すことは出來ないが、それが描き出された時に、始めてそれを認識した多くの文學者の、明確なる代表者となつてゐる。かくして詩人が獨特なる人物を描寫する代りに風景をのみ描いてゐても、彼が詩の表題に單に「急進曲」或は「輪舞曲」等の名稱を與へる位に、詩と音樂とを混淆して居つても、その詩人の特質がいかなる典型に屬するかを見通すことなく、この風景の特徵なり、この言葉の音樂の性質なりは、より精確に規定せられ得べき心理狀態の獨特なる兆候であるといふ證據を與へることは、恐らく予に成効するであらう。

この著の第一卷の讀者は、予の論旨の那邊に存するかを知つてゐよう。予は十九世紀の前半の、大いなる文學的運動を叙述しつゝあるのだ。即ちこの世紀の初めに生起した反動の性質、經過及び最高點を論じ、次に、いかにこの反動が十八世紀か

ら吹き來る自由主義の、漸次烈しくなる暴風のために、壓服せられたかを示さむとするのが、予の企圖する處である。尤も予は、十九世紀の自由主義が十八世紀のそれと同一義であるといふのではない、また文學上の形式或は科學的思想が、前世紀の刻印を持つてゐるといふのではない。ヴォルテイルもルソーも、ディドロも、レッシングも、シルレルも、ヒュームも、ゴトキン(William Godwin)も復活して來たのではなからう。たゞ彼等の敵が復讐されたのである。

全體として觀察すれば、獨逸の浪漫派は反動である。然しそれにも拘らず、精神的反動、詩的哲學的反動としての同派は、新しき發展の多くの萌芽を有し、かつ、新を創造して絶えず眼界を擴張する進歩的精神の、明白に認められる製作物を持つてゐる。

初期の浪漫家は、始めはみな啓蒙思潮の使徒であつた。彼等は獨逸の詩に新しき調子を輸入し、彼等の作物に新しき色彩を與へ、かつ民謡、國民童話及び國民傳説の精神及び材料に對する興味を、新たに誘起してゐる。彼等は當初より獨逸の學術には、非常なる好影響を與へてゐる。獨逸の文献學、希臘雜句及び印度の言語學、

歴史、人類學、法學等の研究や、自然哲學の系統及び夢想やは、總て初めは浪漫家に依つて、鼓吹し唱道されたものである。批評的方面に於いては彼等は、初めは成效を以て、精神的眼界を擴げること努力した。社會生活の方面に於いては、彼等は初めから、兩性間の關係に於ける總ての生命なき因襲に對して、執念深き憎惡を向け、宗教上に於いては、彼等の中の俊秀なる人々は、その青年時代に於いて、超感覺的なるものを對象とする感情生活を、一層深めることに努力した。政治的には、彼等は、彼等が無關心でない限りは、通例理論上の共和主義者であつた。然し彼等は、その世界同胞主義にも拘らず、獨逸の國民的感情を鼓舞しかつ強固にすることを、努力した。

惜しいかな、これらの立派なる目的に對する彼等の追求は、悲む可き結果に終つた。獨逸の浪漫家の事業にして不滅なる價值を有せる者は、餘り多くない——ヴィルヘルム・シュレーゲルの翻譯の數篇、ティークの作品のあるもの、ノヴォリス及びアイヒンドルフの叙情詩のあるもの、フリードリッヒ・シュレーゲルの若干の論文、アルニム及びブレンタノーの短篇のあるもの、ホッフマンの小説の若干、終りに獨異なる天才

ハインリッヒ・フォン・クライストの戯曲及び物語中の名作ぐらゐるものである。その他の浪漫家の作物は、現代人の記憶から消え去つたやうに思はれる。時代の距離を隔て、眺めるとき、彼等の努力は言はゞ、雲煙の中に消え失せて了つたやうである。言語の方面に於いては、浪漫派は、官能的明確を持つてゐない比喩に依つて、怪奇、濛朧、深秘に對する言葉の濫用に依つて、雅言の使用及び古風なる表現に依つて、普通の讀者には理解せられまいとする目的に依つて、言語及び文體を豊富にしたよりは、寧ろ貧弱ならしめ、退化せしめた。詩の範圍に於いては、浪漫派は、ヒステリカルの歸依禮拜の感情と朦朧とに墮在した。社會的方面に於いては、同派は、兩性間の關係をのみ力説した。而もこの問題に關する彼等の觀念は、多くは病的にして不健全なる者であつた。この點に於いて、彼等は、人類を眼中に置かずして、貴族的特惠を有せる少數の藝術家をのみ認めてゐた。彼等の宗教的態度は何うかといふに、文學に於いては大いに革命的なる浪漫家も、羈絆を認めるや否や、おとなしくもそれに頭を下げて了つた。而して政治上に於いては、何うかといふに、維也納會議を主導し、聖シテファン寺院の盛儀と アン・ヘンケラ Fanny Elster (維也納の舞踊女。一八八四。譯者) の家に於

ける牡蠣の饗應 (Anstehner) との間に、思想の自由を撤回すべき、同會議の宣言書を草したものは、彼等、浪漫家であつた。

予はこれからの論述に際して、たゞ機會を利用して、それも極めて稀に、丁抹文學に觸れるであらう。即ち予は、これから予が開展し行く繪卷物に於いて、丁抹の事情を覗き得る穴をば、折々穿たうと思ふのである。予は丁抹文學を無視するがために、爾うするのではない。それどころか、予は絶えずそれを眼中に置いてゐる。予は外國文學の内の歴史を興へることに依つて、丁抹文學に對する間接の寄與をなさむと考へてゐる。予は、わが國の文學の特質を明瞭ならしめるに必要な背景を描かむとしてゐるのである。予は、予が近代丁抹文學の歴史が建設せられねばならぬと考へる基礎をば、築かうとしてゐるのである。予の方法は間接的であるかも知れないが、而もそれだけ一層根本的な方法であらうと考へられる。然し予は茲に、この時代に於ける丁抹文學と獨逸文學との比較が、予をいかなる結論に導いたかを、概略述べて見たいと思ふ。

獨逸及び丁抹の關係は、この場合次の如くである。獨逸文學はこの時期に於い

ては、その傾向と作品とに於いて比較的獨創的であるのに、丁抹文學は一面に於いては北方民族的血管を持續してゐるが、一面に於いては獨逸文學の基礎に建設されてゐる。丁抹の文學者は十中の八九は、獨逸文學を翫賞しかつ同化した。之に反して獨逸の文學者は決して丁抹文學を讀まず従つてそれから何等の影響も受けなかつた。吾々丁抹人に獨逸文學を鼓吹した Schlegels は、Sherrings の熱心なる學徒であつた。この事は シュテップフェンス が シェリング に宛てた書翰の、次の言葉を見ても明かである、私はあなたの學徒である、全然あなたの學徒である。私が製作する總ての物は、元來はあなたのものである。それは決して一時的感情ではない、私の確固たる信念である。而して私はそれが私の價值を低めるものとは考へない。かくして私がいつか、私のものと名けたい眞に價值ある著述をなしたならば、而してそれが世間から認められたならば、私は私の師をば熱心に世間に紹介し、かつあなたに私の月桂冠を差し出さうと考へてゐる。(G. L. Piltz 著 シェリングの生活より、第一卷、三〇九頁)

獨逸文學に對するかゝる關係からして、多くの結果が生じて來る。第一に獨逸

の文學には、より多くの生命があり、同時代の丁抹の文學にはより多くの Kunst がある。材料を發掘するのは獨逸である。獨逸浪漫派は深遠なる情調に於いて生き、感情に惑溺し、問題に焦慮し、而してある形式を創造しては、絶えずそれを破壊する。丁抹文學は生命から湧き出づる材料と想念とを受納する、而してそれらのものに、屢々本國の獨逸に於けるよりも、一層確實なる形式と明瞭なる表現とを附與する。(例へば、テイクに對するハイベルグの關係を見よ。) 丁抹文學はそれらのものを應用し、或は類似の思想をば、北歐の神話傳説の如き、一層都合好き一層彫塑的なる題材に體現せしめる。

かくして予が他の著述(„Kritiken und Porträts“)に於いて述べたやうに、浪漫主義は丁抹の國土に於いては、明快さと形式とに於いて大いに得る處があつた。浪漫主義は幽暗の度を減じて、面被に蔽はれたる儘ながら、白日の光の下に現れ出た。浪漫主義は、月光に於いて不自然と感傷性とを未だ確かに認め得なかつたほど、眞面目な冷靜な國民の間に移り來つたことを感じた。浪漫主義は、ノヴーリスが彼の「礦夫の歌」の力に依つて始めて抜け出ることの出來た礦坑より出て、オエレンシュ

レーゲルの „Wandlung“ を以て山の中腹を槌打した、かくして巖石は破碎せられ、總ての寶石は日光の下に曝露せしめられた。浪漫主義は、今までは別様なる、溫雅なる、牧歌的の自然の中來つたことを感じた、そして自己の怪奇なる點を悉く振ひ落した。浪漫主義は、形體なき濃霧が嬋妍たる妖女に凝固したのを見出した、而して妖魔の訪るゝてふハルツ山やブロッケン山を忘れて、美しき聖ヨハネ祭の前夜に、コーベンハーゲンに近き公園の小丘に、その住居を定めた。

オエレンシュレーゲルの „Aladdin“ は、テイクの „Kaiser Oktavianus“ よりも一層纖細なる、具體化に富める作品である。然しオエレンシュレーゲルは、オクタヴィアヌスがなかつたならば、アラッディンは決して書かれなかつたであらうことを、否定し得まい。ハイベルグの „Julespög og Nytaarsløjer“ („Weihnachtspäpse und Neujahrsspiel“) は、テイクのアリストファネス風の諷刺劇と同じやうに、豐富なる諧謔を有する作物である。然し總ての形式——劇中の劇、文學的諷刺、感傷性と皮肉との混淆——は、テイクから暗示された者で、かつテイクの立脚地よりのみ理解され得べき者である。要之、これまで述べられたる丁抹の文學者は、ノヴーリス、テイク、フリードリッヒ・

シュレーゲル等よりも形式に於いて卓越して居るが、内容に於いて劣つてゐる、即ち實人生との接觸に於いて遜色を持つてゐる。丁抹の浪漫家は、規則正しき文學上の形式を重んじて、それが爲に餘りに屢々、意味深き人生問題を文學から驅逐した。

次に心理的に言へば、丁抹の浪漫家は一般に藝術家としては獨逸の浪漫家に勝り、人間としては、或は精神的方面に於いては、彼等に劣つてゐた。獨逸の文學者は、彼の作物に於いて、それがいかに小著作であれ、いかに非彫塑的であれ、また失敗の作であれ、必ず一の人生觀を現してゐる。而してその人生觀たるや、決して空靈捕ふべからざる者ではなく、人生の經驗及び省察から生れ出た者であり、かつ獨逸人に特有なる多方面の教養を示してゐる者である。テイクやホップマンの小説、ノヴーリスの詩、クライストの戯曲は、人生の詩的哲學的觀察を含有してゐる。而してその觀察たるや、一人の詩人の觀察でないことはあつても、一人の人間のそれである。之に反してオーレンシュレーゲルの悲劇、アルデルゼンの童話、ホストルップ (Hostrup, 一八一八—一八九二。譯者) の歌劇 (Vandeville) は、空想、氣分、可笑味、潑刺たる新味等の如き藝術的性質に於いては豊富であるが、その根本思想たるや、詩的であるにしる、要するに

小兒のそれに過ぎない。哲學的基礎を有せる、かつ實生活から獲得されたる世界觀は、僅かにハイベルグに於いて認められる位である。個人の真正なる發展は、跡づけられぬ場合が多い。オーレンシュレーゲル、ギンテル (Christian Winler, 叙情詩人。一八一八—一八七六。譯者)、アルデルゼンの如き文學者の青年期の作物は、成熟期のそれと等しく完全である。ある文學者、例へばホルストルップやリヒャルト (Richard, 詩人。一八一八—一八九二。譯者) に於いては、詩才が、これから本當に發展しさうだと想はれる時期に涸竭する。時には才能が、オーレンシュレーゲルの場合に於けるが如く、年々肥滿して來るものもある。時には、例へば Paludan-Müller (詩人。一八七六—一九〇九。譯者) に於けるが如く、理想が漸次瘦せ細るものもある。發展の起る場合でも、人々が漸次に自らある人生觀を創造して行くといふ意味ではない。然しそれらの發展は、暫く文學といふ狭い道を進んで行つた者が、二つの大なる公道、即ち中庸なる市民の道及び教會への道の何れか一つを取る、といふやうな變化である。

わが國の文學者は、少壯者すら、時代精神を閑却視する。例へばわが國の Berg-
zoo (丁抹の文學者にして科學者) を、獨逸近代の文學者の一人なる Spielhagen と比較する

に、後者の方が明かに傑出せる素質を有してゐる。即ちシュビールハーゲンは時代精神を理解するベルグゾーエである。シュビールハーゲンは時代の總ての問題に動かされてゐるのに、ベルグゾーエは、たゞ貴族主義や加特力教を、その作物に於いて攻撃してゐる。然しかくの如き問題は、已に過去のそれであつて、それらを攻撃するのは恰も死屍を鞭つのと同然である。かくの如く獨逸の文學者は、丁抹の文學者よりも、一層獨特なる人生觀を有し、かつ人格としてもより多く傑出してゐる。

第三に、丁抹の文學者は全體に於いて、獨逸の文學者の屢々陥り易き趣味及び空想の放逸を避ける特長を持つてゐる。彼等は折々進行を止める。彼等はバラドックスを避け、或はそれを徹底的に遂行しない。彼等は彼等の粘液質的性質から生ずる、堅實な處を持つてゐる。彼等は殆どいかなる場合に於いても、鄙猥な事を描かない、また傍若無人にも、瀆神的にも、叛逆的にも、荒唐無稽にも、全く感傷的にも、純抽象的にも、或は純官能的にもならない。天馬パガズは稀に彼等に乗せて疾驅する。彼等は決して天上にも舞ひ上がらなければ、井中にも陥らない。彼等が國民に廣く讀まれるのも、一にかゝる點に原因を持つてゐる。ハイベルグの詩や *Childe* 作家 一八〇一

九七〇—一八〇一の音樂に見られるやうな堅實なる趣味及び優雅、オーレンシュレーゲルや Hartmann 作曲家 一八〇〇—一八〇五 の傑作に見られるやうな雄健なる自然感情は、丁抹

人には常に、高貴なるかつ常規を逸せざる藝術の特色として、認められるであらう。この對照として、獨逸の浪漫的病院には、いかに奇異なる獨特なる人物が宿泊してゐるであらう！肺病患者の肉感性及び超世的憧憬を有せる四海同胞派の信徒——ノヴーリス。病的な加特力教的傾向を有せる、皮肉なる憂鬱病患者——ティ

ク。天才の叛逆的傾向を有せる、而も外的權威に無氣力にも屈服する、文學的には無氣力なる天才——フリードリッヒ・シュレーゲル。阿片愛好者の半狂人的の幻想を有する、放蕩なる空想家——ホフマン。ヴェルネルの如き、痴愚に似たる神秘家。クライストの如き天才的自殺者。アルデルゼンはホフマンから出發した人であるが、彼はその最初の師に比して、いかに健全で、冷靜で、かつ平和的なのであらう。

かくして丁抹の文學はより多くの調和を有してゐることも、了解され得よう。而して調和をば、それがいかに貧弱なるものであれ、藝術に於ける最高のもものと考へる人々が、十九世紀の前半に於ける丁抹文學を、獨逸文學よりもより以上に尊重

する事も理解され得よう。而して予には、その調和たるや、大抵の場合に於いて、臆病もしくは勇氣の缺乏から生じた者のやうに想はれる。丁抹の文學者は、墜落の危険ある高所に攀ぢ登らなかつたので、墜落しなかつたのだ。彼等はモンブランへ登る事を、他者に委ねたのだ。彼等は身を減さなかつた、その代りに、最高の山頂もしくは斷崖の縁にのみ咲き匂ふ、アルペン山の草花を摘み取り得なかつた。予が文學に於いて尊重せざるを得ない點は、大膽といふことである。そは、自己の藝術的理想を顧慮なく表現する、文學者の能力を意味するのである。文學者が彼の文學的傾向に於ける典型的なるものを、大膽に發揮することは、多くの場合に於いて、その作品に美を附與する所以である。尙予をして詳説せしむれば、浪漫派の如き一の文學的傾向が、その空想を發揮する場合には、ホッフマンの如く、それを極端に遂行する文學者が、予には最も興味深く思はれる。彼が狂的に空想的になればなるほど、彼は愈々美を發揮する——恰も白揚が高ければ高い程、山毛櫨が枝を擴げれば擴げる程、愈々美しくなるやうに。文學者が自己の典型的なる點を發揮する大膽と力とにこそ、美は存するのである。新國土を發見せむとする人は、波浪のた

めに絶壁に打ち揚げられる事もあらう。絶壁を避けることは何でも無い。然し爾うすれば新國土は決して發見されないのである。丁抹の浪漫家は決して、ホッフマンの如く狂的にも惡魔的にもならなかつた。かくして彼等は明瞭であり、かつ廣く讀まれるのであるが、人を牽き付ける生命と力とに關しては、大いにこれを缺いてゐる。彼等は全然讀者を魅することは出来ない。力の充實せる獨創性は、多くの人々を恐怖せしむるが、強い牽引力を持つてゐる。丁抹の浪漫家にはフリードリッヒ・シュレーゲルの臆面なき猥褻もなければ、彼の天才的反抗心もない。然し彼等は、彼がその情熱に依つて流動せしめ、その大膽に依つて新しき奇怪なる鑄型に注入せしめるものをば、固定的な不變的なものと考へてゐる。わが國の浪漫派には、加特力教的傾向がない。然し大いに硬化せる正統的信仰、超自然論、虔信主義及び Grundtvigianismus (丁抹の神學者にして詩人なるグレント) が彼等の間に支配してゐるが、この點に於いても彼等は決して徹底的ではない。かくしてわが國の反動は、大いに潜行的であり、隱密である。その反動は、罪人のごとく身を包みて、昔からあらゆる種類の罪人の避難所であつた、教會の神壇に縋り寄る。而して反動はこ

れを理論的に徹底せしむる時は、何うしても信仰の抑壓、宗教裁判及び専制政治に至らねばならぬのであるが、わが國の反動にそれを確信せしめることは、到底不可能である。例へばキアケゴールは、宗教に於いては正統派に屬し、政治に於いては専制主義者であり、晩年においては狂熱的信仰家である。併し彼は一生、彼の主義からして實際的結論を抽出す事をしなかつた——これ正に純浪漫的傾向である。かつ吾人は、彼の説の外被の爲に、その核心を充分に捕へ得ない。

彼に對する好對照として予は、佛國に於ける正統的信徒であり、専制主義者である Joseph de Maistre を舉げて見よう。彼はキアケゴールの如く、純正なる信仰家であり、博愛家であり、また勝れたる才能を有せる人である。然しキアケゴールが實際問題をば成る可く逃避し、外界の騷擾に對しては老嬢の如き恐怖を持つてゐるのに反して、ド・メーロトルは彼の主義より極めて大膽に、總ての實際的結論を抽出する。彼の「聖波得堡の夕會 (Soirées de Saint-Petersbourg)」なる第六の對話に於ける死刑執行人論の如きは、旗幟の鮮明なる點に於いて、比ひ稀なる者である。死刑執行人は、彼に従へば、崇高なる實體であり、人間社會の隅石である。この者が世に跡を斷た

ば、總ての社會的秩序も消滅するだらう。彼の説に従へば、近代の國家に於ける革命的精神を抑壓し、不信仰と反抗心とを覆す爲には、二つの力が必要である。その一は法王であり、一は死刑執行人である。この二者は正に社會の柱石である。前者は破門狀を以て、後者は手斧を以て叛逆者を壓迫する。かゝる議論を讀むことは、極めて痛快である。そこに力感と徹底とがあり、明瞭なる思想の充分なる表白があり、強烈なる直截なる反動がある。而してド・メーロトルは總ての方面に於いて、その所信を貫徹せしむる。例へば彼は、わが丁抹の自ら自由主義者と號する反動家の如く、政治的には自由主義者であつて、社會的には反動的であつたり、宗教上に於いては反動的であつて、政治的には自由主義者もしくは半自由主義者であつたりしない。彼は政治上の自由を嫌惡する、婦人の解放を嘲弄する彼の書翰を見よ。またある論文に於いては、彼は西班牙の宗教裁判を極力辯護する。彼はまた異端者の火刑 (Auto-da-fé) の再興を、熱心に主張する。彼は自己の所信を表白することを少しも恥としない。彼はまた彼の蛇蝎視せる革命或は那翁に對して、極めて僅かの讓歩でもなすよりは、寧ろ彼の全財産を犠牲にするほどの人である。かくの如

く、政治家としても文學者としても非凡なるこの人物は、反動派の最も強烈なる、徹底的なる、矜持に富める代表者であつた。かゝる個性が丁抹文學に於いて出現せざる事は、實際的方面から言へば、吾人の幸福であるかも知れない。然しわが國の文學史に、明快なる彫刻的の性質が缺乏してゐる事も、またその事情に原因してゐるのである。

何は兎もあれ、吾々丁抹人は浪漫主義の善良にして健全なる要素をのみ、自家のものとしたのだ、といふ人があるかも知れない。然しそれは決して信用すべき説ではない。かゝる論者は先づ、獨逸の浪漫家はいかに終つたかを觀察せよ。而して浪漫主義には當初から、その發展の徑路を曲線に強ひたる、ある反動的原理が隠れてゐた事を理解すべきである。

「ルチンデ」の著者にして、フィヒテの崇拜家なるフリードリッヒ・シュレーゲルは、彼の「共和政治の概念に関する研究」に於いて、民主的共和制を唯一の理性的なる國家の形式なりとし、その上婦人の選舉權をも主張した程の人であるが、後には加特力教に改宗し、神秘家となり、教會の忠實なる奴僕となり、ある論文に於いて反動的專制政

治に是認を與へる事を努めた。ノグーリス及びシュライエルマッヒェルは、二人とも元來は汎神論及び虔信主義、スピノーザ及びチンツェンドルフ（Zinzendorf、ヘルンフェー）の派の開祖。の混淆を示してゐたが、漸次スピノーザより離れて、段々正統的信仰に接近した。シュライエルマッヒェルは彼の晩年に於いて、純乎たる青年の情熱を以て書かれたる、ルチンデに関する書翰の著者たることを否定してゐる。ノグーリスは青年時代の書翰に於いては、自ら有らゆる種類の啓蒙に適し得ると稱し、專制と牢獄とを破壊せむがための、新しき聖バルトロモイスの夜の虐殺を経験せむことを冀ひ、フィヒテを以て無神論者とする批評に關しては、勇敢なるフィヒテは實に吾々總てに代つて戦つて呉れたのであるとさへ言つてゐたのに、終には王を以て地上の神として讚美し、新教を革命的として彈劾し、法王の政治的權力及びエズイット教の精神を謳歌するに至つた。その他フーケー（Fouqué）は封建制の再生を冀望し、初めは文學に於ける、實人生に於ける總ての因襲に反抗したクレメンス・ブレンタノーも、終にはヒステリカルな、夢遊病的のニアナ・カタリーナ・エンメリッヒの忠實なる秘書となり、五年間の長き年月を、この尼の幻想を書くのに費した。ツァッハリアス・ヴェルネルも、

同じ浪漫的典型に屬する變種である。初めは彼は啓蒙主義の信徒であつたが、その後間もなく道徳的弛緩に陥つた。初めは彼はルーテルを讚美したが、後には加特力教徒となつて、前の讚美を撤回した。後には僧侶となり、その實生活に於いても、感傷的なる鄙猥なる詩や説教に於いても、粗野なる肉感性と僧侶的情熱とを結合せしめるに至つた。

而して獨逸の浪漫的の天空から聖火を丁抹に運び來り、遂に故國を去るべく強ひられたほど人心を激動せしめたる、かのシュテップェンスは、いかなる人物であつたらうか。彼は激情と混亂とを有する、卒直にして心優しき人物である。彼は渾身これ感情と空想とでも言ふ可き人で、思想の明確とか、文章の簡勁とかを少しも持つてゐない。吾人は彼の後年に書いた所謂科學的著述を、何うしても通讀することは出来ない。それはたゞ、感傷的な、退屈な叙述に満ちてゐるからである。

Julian Schmidt は、^{Julian Schmidt} 恚う言つてゐる、彼が講壇から間違ひだらけの獨逸語で、^{Julian Schmidt} 物理學を講義した時には、數學上の計算は合はず、實驗は失敗のみであつた。然し彼の講義から物語つてゐた敬虔と眞摯と子供のやうな素朴とは、聽衆の心を拉し去らずに

はゐなかつた。素朴は當時の北歐人に通有なる點であつた。彼はその得意時代に於いて、人間の心靈の諸々の力を礦物に於いて發見したり、地質學や植物學やを人間化したりすることに、無邪氣なる喜びを感じてゐた。然し七月革命は彼の頭を振り向かしめた。最後の十三年間彼の心を牽き付けてゐた、無味乾燥な老婦人の如き虔信主義の精神に驅られて、彼は革命的なる獨逸少壯派の人々及び彼等の著述に對して、力なき攻撃をさし向けた。而してこれ、彼の文學的徑路は終るのである。

彼はこの點に於いて、たゞ彼の師シリングの蹈んだ道を通つたのである。フィヒテの純乎たる自我説に對して精神の神秘的性質を力説し、哲學をも藝術及び宗教のごとく空想的に取り扱ひ、謂はゆる知的直觀の説を唱道したるシリングは、彼の原理に於いても、その方法に於いても、自由なる放恣——浪漫主義の核心ともいふ可き放恣を持つて居つた。已に彼の、^{Bruno} (一八〇二年)に於いて彼は、後に著明なる標語となつた、^{Bruno} 基督教的哲學といふ言葉を用ゐた。彼は當時はなほ、聖書は眞の宗教的實質に於いて印度の聖典と比せらる可くもない、と主張してゐただけ

ども。彼は、ノヴォリクスと同じく、テイクに薦められて、Jakob Köhne及びその他の神
秘家の説に心酔した時に、神に於ける自然——この言葉は、後に瞑想的獨斷論者に
依つて受納された者である——に就いて、深秘的に研究し始めた。然し彼がその
後間もなく、ミュンヘン大學の教授として貴族に列せられ、純加特力教的なバイエル
ン王國の樞密顧問官及び學士會院(die Akademie der Wissenschaften)の院長に任ぜられ
た時に、已に後年屢々論述されたる「天啓哲學」(die Offenbarungsphilosophie)の萌芽が、彼
の心に表れそめた。間もなく變化が完成された。往年の情熱家は廷臣と化し、豫
言者は野師に墮在した。彼は、自分の説を決して印刷せしめないといふ條件を以
て、これまで不可能と考へられたる神秘學を、至極勿體を附けて口授した。ヘー
ゲルの死後、彼はバイエルンより伯林に招聘せられて、そこに暫く基督教的日耳
曼的警察國なる普魯西の國家的宗教の爲に力を盡し、かつ一種の國家哲學を教授
した。その哲學は、彼自身の言つてゐる如く、要するに基督學である。ヘーゲル學派
の急進的なる少壯派が彼を攻撃し、その神秘説を粉碎したのは、丁度この時である。

併しシェリングは、浪漫派の哲學者の中には、まだしも理性的な方である。それ
は、彼がキアケゴールの讚美の對象であつて、ヤコブ・ベームの再生とも言はる可き
Franz Bader(哲學者にして神學者。譯者一)の爲に、激烈に異端視せられたのを見ても分
かるであらう。バアデルは、シェリングは三位一體説を論理的に追究し、かつ人格的
惡魔としての惡靈の存在を否定する自由思想家だと言つて、彼を非難したのであ
る。他の浪漫派の哲學者の説も、バアデルのそれと規を一にしてゐる。Schubert(一
六〇——一八)は、「Die Symbolik des Traumes」を書き、夢占ひ——夢は浪漫派文學の理想
だ——に就いて熱心に研究してゐる、その上夢遊(Somnambulismus)及び視幻(Geister-
seherei)をば、認識の最高の根源として漢美してゐる。シュトラウス(著名なる「基督傳」
一八——一八七)に依つて看破せられたるブレヴアルストの透視女(Erleuchtete Hande)のこと
を(譯者)は、當時は非常なる勢力を持つてゐた。大革命の時には、羅馬及び神聖羅馬帝國
の滅亡に就いての凱歌を作り、後に獨立戰爭に際しては、獨逸の國民精神の覺醒を
絶叫した Göttes も、後にはキアケゴールが聖なる戰慄を以て讀んだといふ「基督教
的神秘説」の著者となり、殉教者の血を喜び、拷問に於ける聖者の苦悶と忘我陶醉と

を讚美するに至つた。終には彼は、往年のヤコビン黨員なる彼は、神聖同盟を謳歌し、加特力教々會の前にひれ伏すやうになつた。その他の浪漫派の政治家も同様である。Adam Müller (一七九—) は (Fotsehill) が適切に批評したやうに、政治に於いてノヴォリスの「青い花」を追求し、國家、科學、教會及び劇場を、一の奇怪なる統一體に融合せしめようとした。Hallar (一七六—) は、その官職を失はむことを恐れ、加特力教への改宗をば公にしなかつたが、その著「國家學の再興」(„Restauration der Staatswissenschaften“) に於いて、神政を主唱した。Ruge (一八〇—) の爲に痛撃されたる Leo (九—) は、當時の人道主義に逆つて、急進黨員の死刑を主張し、Stahl (一八〇—) は、その法理學に於いて、結婚をば基督と教會との關係に比し、家族を三位一體に、相續權を天國の相續分に對する權利に比した。これらの事を綜合すれば、吾人は浪漫派の末路が、宛然たる妖魔の安息日であることを感じない譯には行かない。このもの狂ほしき祝日に於いて、哲學は正に老妖婆の役目を演じ、その周圍には非開化主義者や神秘家の叫喚が雷鳴の如くに鳴り渡り、警察國家、僧侶崇拜及び神政を主張する政治家の絶叫が響いてゐる。而して科學は神學

や接神術に慰撫されつ、聲を潜めてゐるのである。

浪漫主義の準備

開拓者 主觀主義 情念の不羈奔放

書籍に依つて或は旅行に依つて、現今の獨逸を知るものは、十九世紀の初めに於いて、同國がいかなる状態にあつたかを回想するとき、その差異の餘りに大いなるに驚かずにはゐられなからう。當時と現今との何たる對照よ！この現實的の獨逸國が嘗ては浪漫的の獨逸國であつたかを、何人か信じ得よう！

公的の言辭も私的の會話も都市の風貌すらも、今日に於いては、現實主義の截然たる刻印を持つてゐる。一度伯林の市街を逍遙すれば、吾人は到る處に制服を着し、勳章を帯びたる、嚴めしい士官に出會する。書肆の展覽室には主として、實用的の書籍が並んでゐる。家具や裝飾品に至るまでも、新精神の影響を受けてゐる。伯林の裝飾品店ほど、殺伐な軍國的なものは世にあるまい。嘗ては甲冑を着たる

騎士が跪坐したまふ、彼の愛人の指頭を接吻して居つた置時計の上には、今や軍服委いかめしき槍騎兵や胴甲騎兵が立てゐる。懷中時計の飾りには圓錐彈が用ゐられ、燈架は又銃の形をなしてゐる。流行の金屬は鐵だ。流行の言葉も、矢張り鐵だ。多くの詩人や哲學者を持つた國民は、今や詩作や冥想とは全然別様の事に熱注してゐる。彼等の中の教養あるものすら、今日では哲學を知らぬものが多い。——二十人の學生の中で、ヘーゲルを少しでも讀んだといふものが一人もゐない。韻律的形式を持つた詩に對する興味は、殆ど消滅した。政治上及び社會上の問題が、人文の問題及び精神上の疑問よりも、百倍もより多くの注意を喚起してゐる。

而してこの國民は、嘗ては浪漫的の考察や夢想に耽溺し、その代表者をハムレットに於いて見出した國民なのである。ハムレットとビスマルク！ビスマルクと浪漫派！疑ひもなくこの大政治家は、全獨逸を全然風靡し去つた。何者、彼は彼の人格に於いて、國民が永く渴望してゐた總ての特質を、彼等に齎したからである。彼と共に、政治が美學に取つて代つた。獨逸國は聯合された。尙武的王国普魯西は、小聯邦と、それらの國々の封建的特色とをも、併呑して了つた。普魯西は獨逸の

ビエモント(一八六〇年にEzioと共、伊多利王國を組織したる伊太利の國譯者)となり、而して自己の規律的なる實際的なる精神を、新帝國に強制した。これと同時に、自然科學は哲學を抑壓し、或は改革した。また國民的觀念は、人道の理想を壓迫し或は變形せしめた。一八一三年の獨立戰爭は、主として情熱の結果であつた。然るに一八七〇年の勝利は、主として慎重なる打算の產物であつた。

新獨逸國を主宰せる觀念は、一の全體に併列すべしとの觀念である。この觀念は實生活にも文學にも瀰漫してゐる。"In Reih und Glied"〔隊伍を整へよ〕——シビ
ーハーゲン(有名なる社會主義者)の小説の題といふ言葉は、普汎的の標語と考へられてゐる。この國の目的とする處は、撒布せられたものを集收して、餘りに少數者の所有であつた人文を普及せしめようといふのである。この國は一大國家と一大社會とを建設して、全體の勢力のためには、個人の犠牲をば要求するのである。全體の勢力！この觀念は、今日の獨逸に於けるいかなる著しき現象に於いても跡付けられる。ビスマルクの組織、ラッサー(有名なる社會主義者)の煽動、モルトケの兵法及びヴグネルの音樂の根柢に存するものは、全體の勢力に對する信仰である。今日の散文

家の文學的活動は、國民を教育して、それを公共的目的に集注せしめる事を標的としてゐる。この時代を最も忠實に表してゐる、總ての作物の共通點は、それらの作物が悉く事物に即してゐる、即ち客觀的寫實的であるといふ事だ。而して全體の勢力といふ觀念は、文學においても認められる。國家に對する個人の關係、國家の爲の個人的欲望及び獨創性の犠牲——これが今日の文學を支配してゐる思想である。浪漫派に於ける、獨特なる俊秀なる個性の崇拜、總ての歴史的、政治的なる事に對する無頓着と、何たる對照であらう。浪漫派文學は主として接客室的文學であつた。その理想は、知識ある社會と文藝的の喫茶會とであつた。(例へば「*Phantasus*」に於ける對話を見よ。)

而して昔時は今日とは、總てがいかに異つてゐたらう！實生活に於いても文學に於いても、到る處に吾人は、放恣なる故郷なき自我を認めるのである。自由なる非歴史的なる自我が、當時における北極星である。全國士は、三百人の君主と千五百人の半君主との下に支配せられたる、小聯邦の集團であつた。これらの聯邦に於いて、十八世紀の謂はゆる「開化せる專制主義が支配してゐた。貴族は奴隸の君

主であり、家父は家族の君主である——到る處に嚴格なる法規があつて、一視同仁といふ事がない。個人の爲す可き大いなる任務はなく、天才に對する何等の餘地も存在しない。劇場は貴族の家に生れざる人々が、人生のあらゆる場面を経験し得る唯一の場所となり、従つて演劇熱は盛となつた。力を盡す可きいかなる社會も存しないので、總ての活動は必然的に現實に對する争闘か、現實からの逃避の形式を取るやうになつた。逃避は、再び發見せられたる古典藝術及びザインケルマンの著書によつて準備せられた。争闘は、Young^{ヤン}及びStearns^{スチーンズ}の如き感傷的なる憂鬱なる英國の詩人及びシルレルの評したやうに、基督教徒から人間を徵集せむとする「自然の使徒、ルソーの影響に依つて準備せられた。

吾人は先づこの主導星の生起、即ち自由なる浪漫的なる自我の發生を探究しなければならぬ。獨逸の偉大なる文豪及び哲人は總て、この自我の出生に際して、名付親として立ち合つたのである。

近代の獨逸の精神生活は、レッシングによつて創立せられたものである。明晰なる思想、剛健なる意志及び潑刺たる活動慾を以て、彼は彼が交渉したる總ての範圍

に於いて改革者となつた。充實せる意識を以て、彼は獨逸の社會の啓蒙者及び教育者となつた。彼は男性的獨立及び不斷の反抗の體現であつた。彼の生活及び著述に於いて表現されたる、彼の個人的理想は、總ての宗派的差別を克服す可き、矜持ある獨立と公明なる博愛心とであつた。かくて彼の自我は、光明の源泉となつた、たとへ生活においては、彼は孤立的であつたとは言へ。彼は「獨逸散文のプロメトイース」となつた。彼の偉業は、來る可き時代の爲に、獨逸の人文を神學の制縛から解放した點にある、丁度ルーテルが神學を羅馬教の抑壓から自由にしたやうに。彼の生活及び批評は行爲であつた。文學の本質も、彼においては言はゞ行爲であつた。彼の描ける人物は總て、戲曲的情熱を有つて居た。天罰及び報償といふが如き神學上の教義に反對して、彼は、善のために善をなす事を以て、最高の道徳とした。而して世界の歴史は、彼にとつては、人類の教育の歴史となつた。勿論彼は、教育といふ言葉をば、神的教育者なくしてはいかなる發展も考へられないといふ、讀者の根本思想を豫想して、幾分か教育的學に用ゐてゐるのであつた。然しそれにして、自然的發展の觀念は、彼の頭腦には未だ染み込んでゐなかつたのである。

歴史は彼に對しては、啓蒙の記録を意味する。自我は彼に従へば、自然てはなくて、純粹なる精神であつた。

レッシングに於ける最上のものは、よく調べてみると、新興の浪漫派にとつては全く縁遠いものである、いかなる他の文豪よりも、シルレルすらよりも、浪漫派に縁遠いものである。然しニコライ(Nicolai)エンゲル(Engel)ガルフ(Garve)ハタタ(Schütz)の如き彼の學徒が、啓蒙の立脚地からして、新興の浪漫家の忌憚なき迫害者であつたのに、彼等浪漫家がそれらの人々と偉大なるレッシングとを識別したのは、さもありぬべき事柄である。そのことは、フリードリッヒ・シュレーゲルの一論文に於いて論じてゐる。即ち彼は、レッシングの博大なる眼識を讚美し、かつこの文豪に於ける無規律なる部分、例へば革命的、非組織的、反語的傾向に非常に重きを置き、彼の批評的機智を強調し、彼に於ける犬儒主義と解せらる可き總ての點を殊更に力説してゐる。恐らく浪漫家は、この純粹にして簡素なる悟性的人物を、彼等の先驅者とする事は出来なかつた。かくして彼等は彼の著作の滋養分をば、腐敗を防ぐ純なる藥味、もしくは鹽と解釋せむと試みたのである。

彼よりも遙かにより多くを、浪漫家は Herder に負うてゐる。彼等は狂飈勃起時代の彼等の繼承によつて、並びに世界各國の詩を理解する彼等の能力によつて、ヘルデルの苗裔たる事を證してゐる。レッシングに於いて舊世紀が終結を付けられ、だが、ヘルデルに於いては、新世紀が萌芽を出した。彼は變成及び生長を思惟及び行爲の上位に置いてゐる。彼に取つては眞の人間は、思惟する道德的の實體である許りてなく、自然の一部分である。彼はいかなる場合に於いても、獨創的を受し、これに最高の價值を置く。彼は悟性よりも直觀を重んじ、狹量なる見解を克服するに、悟性を以てせずして獨創性を以てする。直觀の人は、彼に従へば、最も人間らしき人である。彼は元來、感受性に富める天才肌の人であつた。彼は總ての獨創的なるものを理解する爲に、その自我を擴張した。然し彼が總てを理解したのは、感情によつてであつた。彼は感情の力によつて、人類及び國民の有する寶物を、自己の心に攝取したのである。

浪漫家は、彼等の文學上の批評に於ける最も價值あるもの、即ち翻譯及び解釋に對する衝動に於いて表現されたる、普遍的感受性をば、ヘルデルから、受納してゐる。

彼から彼等は、歐洲及び亞細亞の言語の、科學的探究に對する最初の刺激を受けてゐる。自國及び外國の文學に於ける國民性、西班牙及び沙翁の戯曲に對する彼等の愛着も、彼から出てゐるのである。ヘルデルは、彼の後にゲーテがなしたやうに、事物を全體において捕握する事を知つて居つた。各國民の特質に對する彼の深邃なる理解は、ゲーテにあつては、自然に於ける「典型的なるもの」の天才的考察となり、シリングに於いては、知的直觀となつて表はれた。目的の觀念に對する浪漫家の反感も、またヘルデルから出てゐる。彼の歴史觀は、目的の觀念を歴史から排拒した。勿論すべての現象は、原因を有し、法則に従屬してゐるのだが、尙未だ顯現しなかつたもの、即ち一の目的によつて説明せられ得るものではない、と云ふのである。而して浪漫家はこの理論をば、個人的心理的範圍に輸入し來つた。彼等にとつては、無目的といふ事は、浪漫的天才の別名であつた。天才的人間は、意識される目的なくして生きてゐる。無目的は懶惰である、而して懶惰は優越者の表徴にしてかつ特權である——この滑稽なる世界觀は、ヘルデルの主張とは非常に遠ざかつてゐる。乍併、天才的自我の新解釋、即ち天才は直觀的であつて、いかなる抽象

的概念にも依らずして、感得し觀照しうる能力を有する者であるといふ解釋は、彼から出てゐるのである。浪漫家が學に於ける總ての經驗的方法を輕侮し、藝術に於ける極端なる移り氣を讚美するに至つたのも、天才に對するこの解釋から發出してゐるのだ。

ゲーテは、ヘルデルから與へられたる、總ての約束の履行者であつた。彼に取つては人間は、單に理論的に、自然の鎖に於ける最後の環である許りてなく、彼の作物における人間は、要するに自然であつた。而して科學的探究に於いて、彼はその天才的眼光を以て、普汎的なる進化の法則を發見した。彼自身の自我は小宇宙であつた。而して彼の少壯なる同時代人の具眼者も、それを認めて居つた。彼女の友の Rahel はかう言つてゐる、「ゲーテは人生そのものと一つである」。而して彼は、彼の自叙傳なる「詩と眞」に於いて、彼自身の天才、即ち同時代の最も深遠なるかつ博大な天才をば、境遇を通して發展し來れる自然的產物であるとする事によつて、天才を理解せられない、反理性的のものとする思想に極力反對したほど、それほど自然に對して深い理解を有する人であつたし、かつ天啓の信仰に對する熾烈なる反

對者であつた。而してゲーテのこの議論は、浪漫家の渴望した文學的批評の典範をなすに至つた。

ゲーテから當時の青年は、偉大にして自由なる人格の權利及び價値の觀念を受け取つた。彼は常に彼自身の生活を、充實的に自由に生活した。彼は現存の社會状態を少しも攻撃する事なくして、而も彼の生息する境遇をば、彼自身の個人的要求に従つて變化せしめた。彼はヴィマールに於ける若々しい和氣に満ちたる宮廷の首腦となつた。而して青春の霸氣を以て彼は、周圍の人々を、饗宴行樂、競走、假面舞踏會の如き悅樂の渦中に、往々もの狂ほしき放逸の裡に、自己と共に拉し去つた。それで彼のこれらの愉樂は、多少浮氣なる戀愛事件によつて、或は快明にせられ、或は暗鬱にせられたりした。ジャン・パウルは、ヴィマールの風俗習慣は、たゞ口によつて述べるより外はないと、ある友人に書いてゐる。當時この地に行はれた氷滑りのごときは、男女の猥らな戯れに外ならなかつた。この事に就いて老ヴィラントの憤慨したのも、無理はない。才色双美の稱ある男たらし、シュタイン夫人は、十年間もゲーテの愛人であり、ミューズの神であつた。彼女は彼のイフイゲニエ及び、タッ

ナーの女主人公レオノーレの原型である。彼はその後、星の如く輝き、眼の如く美しき若き少女、クリスティーネ・ゼルピウスを戀して内へ引き入れた、そして彼女を正式の妻とするまで、十八年も彼女と同棲した。これは當時大いなる物議を醸した事柄である。

獨逸人の謂はゆる情念の「不羈奔放」(「Freigeisterei」)即ち情念の自由及び叛逆に對する衝動は、ゲーテ及びシルレルの、青年期の作物の出發點であつた。兩詩人は、同様なる反抗的精神を持つて居た。ゲーテの戯曲「兄妹」(「Geschwister」)は、兄妹間の戀愛を取扱つてゐる。彼の「Stella」は、その原形に於ては、「二重結婚の辯護のやうに終つてゐる。ジャン・パウルも同様にその「Siebenkais」に於て、「二重結婚をば、最初の結婚に苦痛を感じ來れる場合には、天才には許容せられたる者として、取扱つてゐる。ゲーテの「Götter」は、腐敗せる情弱なる社會に對する抗爭に於ける、天才的個人の悲劇的最後を描いたものである。In Tyrannos」(「專制君主に」)といふ標語と「Hypokrites」の醫藥の治し能はざる者は、これを鐵を以て治す、鐵の治し能はざる者は、これを火を以て治すといふ序辭とをもつたシルレルの「群盜は、いふまでもなく社會

に對する宣戰である。「群盜の主人公カール・モーアは高潔なる理想家ではあるが、去勢された人達の世紀に於いては、犯罪者として、終るべき運命を持つてゐた。シルレルの群盜は賊徒ではなくして、革命家である。彼等は、社會が彼等に行ひたる兇惡に對して復讐せむが爲に、社會から分離したのだ。シルレルの猛烈なる反抗心は、フォン・カルプ夫人(Frau von Kalb)との關係の感化の下に書かれた、彼の初期の詩において、一層個人的に表はれてゐる。それらの詩は普通の全集においては改作されて、原詩の精氣を失つてゐる。吾人は Kurz 或は Goedeke によつて出版されたる詩集において、それらの詩の原形を見出しうる。後に「争闘」(Der Kampf)と題されたが、元來は「Freigeisterei [der Leidenschaft]」といふ表題をもつた詩に於いて、彼は恁う言つてゐる。

Woher dies Zittern, dies unnenbare Entsetzen,

Wenn mich dein liebevoller Arm umschlang?

Woll dich ein Eid, den auch schon Wallungen verletzen,

In fremde Fesseln zwang?

Woll ein Gebrauch, den die Gesetze heilig prägen,
Des Zufalls schwere Missethat geweiht?

Nein—unerschrocken trotz' ich einem Bund entgegen,

Den die erröthende Natur bereut.

O zitterträcht—du hast als Sünderin geschworen,

Ein|Meinid ist-der Rene fromme Pflicht,

Das Herz war mein, das du vor dem Altar verloren,

Mit Menschentrenden spielt der Himmel nicht.

何が故の戦慄ぞや、何が故にかくも恐るゝや、汝の愛に満ちたる腕がわれを抱く時。血の沸き立ちによつてすら破られ得べき誓言が、汝を仇し縛めに結び付けたるが爲なりや。法律に依つて神聖の刻印を打たれたる儀式が、偶然の重き罪を聖めたるが爲なりや。何をか關せむ—恐るゝ事なく我は、自然をして後悔せしめ、顔赧らしむる盟約を否まむ。あはれ、戦く勿れ—汝の誓言は罪なりき。偽誓は罪を悔いたる人の敬虔なる義務ならずや。汝が神壇の前に捧げたる心情は、わが物なりき。天は人間の喜びを弄ぶことなし。」

この素朴なる詭辯は、少しく滑稽に響くけれども、天が折々人間の喜びを弄ぶことを敢てしないか、何うかは、疑はしい事ではあるが、この詩に於ける傾向は極めて

明確である。而して Hethner が適切に言つてゐるやうに、ドン・カルロスもそれと殆ど同じ意味の事を言つてゐる。わが愛の権利は、神壇に於ける儀式よりもより古いものである。シルレルの感情に従つて三度書き改められた「ドン・カルロス」は、第二の草稿に於いては、結婚に對する攻撃を、主要なる思想として持つてゐたのである。

シルレルの描ける若きエリザベート女王「マリア・スチュアルト」中の人物の原型は「シャルロット・フォン・カルブ」であつた。シルレルの青年時代の戀人であつたこの少女は、彼女の兩親に依つて、他に嫁する事を強制されたのである。一七八四年に於いて、シルレルは彼女を知つた。一七八八年に於いて尙、彼等は階老の契りを結び得る事と思つてゐた。シルレルが彼女を見捨てた後、間もなく彼女は、ジャン・パウルの戀人となつた（カロリー・ネ・シュレーゲルは彼女を戯れに「ジャンネット・パウリーネ」と呼んでゐる）。ジャン・パウルは彼女に就いて、「彼女は二つの大きなものを持つてゐる、私がまだ見たことのないやうな大きな眼と大いなる心靈とを」といつてゐる。彼の告白に従へば、彼が「Titan」（巨人）に於いて、「Titanide」なるリンドダとして描いたのは彼女である。「タイターン」第一一八章に於いて作者は、リンドダは「その繊細なる感情の爲に

かりてはなく、その極端な結婚嫌ひの爲に、柔しく取扱はれなければならない」と言つてゐる。彼女は結婚の祭壇に、自分の女友と同伴する事さへ出來ない。彼女は、その祭壇を、婦人の自由の刑場、最も美しき最も自由なる戀愛の火刑柱だと言つてゐる。戀愛の英雄詩も、人が結婚すれば、皆く行つて結婚の牧歌となるに過ぎない。世間の事理に通じた彼女の女友は、彼女の結婚嫌ひはたゞ、彼女の僧侶に對する嫌惡から來るのだらう、結婚は戀愛とは別なものであるかもしれないが、結婚が必ずしも不幸に終るとは云へない、不幸な戀愛も可なり多いなどと説き聽かしても、彼女は中々聽き入れない。フォン・カルブ夫人は自らジャン・パウルにかう書いてゐる、何うぞ女を誘惑を以て唆かして、彼女等の心情と良心とを苦めることを御止め下さい！私の結婚に就いての考は、今も前の通りです。私はこの女の道を理解しません、その爲に何人か幸福になつたと言ふ事も出來ません。この世の宗教は、吾々に附與せられた力と能力とを、發展させ、維持するといふ事より外の、何事でもありません。人間は抑壓にも、不正な斷念にも屈服してはなりません。大膽な力強い、成熟した、自分の力を意識的に用ゐる事の出來る人間に、自分の道を進ませて御やり

なさい。然し現代の人間は、不幸なみじめなものです。總ての人間界の法律は、淺ましい、憐むべき欲望の結果であつて、叡智の結果である場合は、極めて稀で御座います。戀愛は何等の法律を要しません。」

この書翰には、強烈なる精神が表れてゐる。この書翰から、ルチンデの想念への距離は、さう遠くはない。然しそれに比すると、ルチンデは甚だ精氣を缺いてゐる。而して當時の社會状態を注視し、それに對する詩的性情を持つてた人物の態度を觀察する時に始めて、吾人はこの書翰に表れてるやうな激烈なる感情の、決して偶然的な孤立的なものでない事を、充分に理解し得る。

グイマールは當時獨逸の古典派の文學者の本營であり、集合地であつた。小公爵領地のかゝる小都市が、いかにしてそんな重要な地點となつたかは、理解するに難くはない。獨逸の二人の雄偉なる王の中で、ヨゼフ二世は獨逸の文學に對して注意を拂ひ得るには餘りに熱心に、改革と啓蒙とに對する努力に捕はれてゐた。ヴォルテイルの學徒なるフリードリッヒ大王は、獨逸の詩人に對して何らかの興味を持ち得る爲には、その趣味と傾向とにおいて、餘りに佛蘭西的であつた。たゞ小宮

廷が彼等を優遇した。かくてシルレルはマンハイムに、ジャン・パウルはゴータに、グーテはグイマールに住んだ。獨逸に於ける文學は、永くその中心點を見出さなかつた、而して今やグイマールはそれとなつた。グーテはヘルデルを、この地に呼び迎へた。グイランドは已に一七七二年以來、こゝに居つた。シルレルはこゝに近きイエーナに一地位を得た。かくてグイマールは、詩的情熱が理論的にも實際的にも、社會の散文的因習に對して遺憾なく尊敬せられ、神聖とせられた土地であつた。「あゝ此處にこそ女がある！」とジャン・パウルは、彼がグイマールに來た時に言つてゐる。「此處では總てが革命的であり、奔放である。そして人妻は何等の意味を認められてゐない。」グイランドは「復活する爲に」彼の以前の戀人なる Sophie von La Roche を呼び寄せた。シルレルは巴里への旅行に同伴すべく、フォン・カルプ夫人を招いた。かくて吾人はこのグイマールに於いて、フォン・カルプ夫人の人格から深い印象を與へられたジャン・パウルが、これだけの事は確かである。政治的革命よりもより精神的なる、より大いなる革命、而して政治的のそれと同じやうに破壊的な革命が、世界の心臓に於いて鼓動してゐると叫んだ理由を理解し得る。

それはいかなる革命であるか。社會の因襲からの感情の解放、法律に對して、心情の法律を對抗せしめる事、風俗習慣を道義に従つて、折々は單に好惡に従つて改革せむとの主張——これ以外にグイマールの人々は何物をも欲求せず、思惟しなかつた。實際的社會的改革は彼等の眼中になかつた。人々は内心少しも重じてゐない法律に對して、外面的には從順を表して居つたと云ふ點において、純獨逸的傾向が表れてゐる。例へば成熟期に於けるゲーテは、兩性の關係を齊整する現存の形式は、文明に取つては絶對的に必要であると、常に主張して居つた。然し一般に當時の文學者は、彼等の著書に於いて、革命的感情を表現した。尤もその結末に於いては、彼等は、大抵それを取り消してゐる。即ち主人公は結末に於いて、或は彼の行動の不當であつた事を告白し、或は自殺し、或は彼の反抗の爲に罰せられ、或は斷念を以て終つてゐる(カール・モーア、ヴェルテル、タッソー、リンダの如く)。恰も中世に於ける異端的の著述家が、彼等の著書に於ける總ての事は、勿論神聖なる母教會の教義と一致す可きものであるといふ注意を、結末に書き添へたのと同じ徹である。グイマールに於ける才高き婦人達の社會へ、婦人フレイムの下着シュルツを着た暴風雨ストームと呼ばれ

たスタール夫人が、獨逸を旅行した途次に、仲間入りをした。彼女は彼等の間に於いては、見馴れぬ荒々しい鳥のやうに見える。彼女の傾向と彼等のそれとは何たる對照であらう！彼等に於いては總てが個人的であり、彼女に於いては總てが社會的である。彼女は社會的改革に就いての思想を、公衆の前に披瀝した。彼女の行動と比較しては、啓蒙期の獨逸の婦人の、最も極端な者でさへ餘りに溫和である。スタール夫人は、人生を政治的に改革しようとしてゐた。然るに彼等は、人生を詩的にする事を念頭に置いてゐた。ナポレオンの如き人間に、挑戦しようといふやうな考へは、彼等の夢想だにせざる處であつた。彼等が理解して居たのは、人權でなくして、心情の權利であつた。彼等は人生の不正に對して戦はずして、人生の散文に對して反抗した。社會と天才的個人との間の關係は、佛國に於けるが如く、個人の自由と社會の因襲との争闘といふ如き形式を取らずして、個人の願望の「詩」と政治的社會的法則の「散文」との争闘といふ形式を取つた。かくして浪漫派の文學は、欲求願望の能力を常に讚美してゐる。これはフリードリッヒ・シレーゲルに於いて、特に認められる。それは實に人々の有した、唯一の外面に向けられたる力

であつた。要之、無氣力そのものが、力と認められてゐたのである。

吾人はキアケゴールの「Eulen=Eller」に於いて、願望に對する同様の讚美を認める。「オエーレンシュレーゲルのアラッディンは、天才的な素朴なる大膽さを以て、最も空想的なる願望を描いたものであるが故に、かく清新なのである。現代に於いて、眞に願望する勇氣を持てるもの、果して幾人かあらう、云々」。それから尙、子供らしい事が書き列ねてある。併し諸宗教の母であり、無活動の表現である願望が、浪漫派の標語となつた事を、誰か怪み得ようか。彼等に於いては、願望は「詩」であり、社會は「散文」である。この立脚地に立つて始めて吾人は、大いなる獨逸の詩人の、最も多く純化せられた作品をも、眞に理解し得る。ゲーテの「タッソー」は、政治家と詩人、即ち現實と詩との間の相剋を描き、この相補はねばならない兩者、然し、自然が二つの者から一人の人を作らなかつたといふ譯で、たゞ相異してゐる兩者の間の反對を寫したものであるが、形式の明透なるにも拘らず、斷念といふことがその中に強調せられてあるにも拘らず、浪漫派にその總ての釀母を附與したると同一なる、長期間の醗酵の産物に外ならない。「ヴェルヘルム・マイステル」も、それと同様なる傾向を持つて

ゐる。この作は、詩的理想と現實との緩慢なる、漸次的の調和及び融合を描いたものである。乍併、最も大いなる人物のみ、この高みに到達することが出来た。有爲なる、而も不明瞭に努力する人々の集團は、内面的不調和から、到底脱け出る事は出来なかつた。詩が力として自己を意識すればするほど、詩人がその品威を感ずれば感ずるほど、文學が獨特なる一小世界となればなるほど、現實に對する争闘は、いよ／＼俗人主義（フィリステイム）に對する反抗といふ第二義的の形式を取るに至つた（例へば、アイヒンドルフの戯曲「Krieg den Philistern」を見よ）。かくして外的境遇の暴虐に對する、自由の永久的權利を主張する事は、詩の任務とならなかつた。詩は人生の「散文」に對して、詩として自己を主張するに過ぎなかつた。これは、詩は人間を解放する能力を持つてゐるといふ事に對する、日耳曼民族的なる、獨逸的スカンディナヴィヤ的なる、即ち文學的のみ考へられたる解釋である。

キアケゴールはその「イロニーの概念」(Begrabet Ironi)に於いて、恁う言つてゐる、「吾人は、テイク及び總ての浪漫派の詩人は、人間が有限的なる社會的境遇の中に、言はずと全く化石して了つた時代に出現した、或は出現したと信じてゐたといふ事を記

慥せねばならない。理性的なる憧憬或は願望は、一として満足せしめられない筈はないといふ、神聖なる支那人的樂天觀の見地から言つて、總てが完全であり、完成して居つた。風俗習慣及び因襲に關する、莊重なる原則や格言やが、敬虔なる禮拜の對象であつた。總ての事柄が、絶對それ自身も、絶對的であつた。人々は多妻主義を強ひて排斥したり、尖つた帽子を被つて歩行した。何事にもそれ／＼の意味があつた。いかなる人も各々の身分相應な得意さを以て、自分はいかなる功績を擧げつゝあるか、自分の撓まざる努力は、自己なり社會なりに對して、どの位の意味を持つてゐるかを感じてゐた。人々は時間や時計をも顧慮せず、浮き／＼して暮らしてはゐなかつた。かゝることは、誠に恐れ多い事と考へられてゐた。萬事が頗る平穩に、規則正しく進行した——女の許へ求婚に行く人も、自分は法律に協つた、非常に眞面目な行動を取つてゐるのだと思つてゐた。萬事が時計の音に従つて行はれた。人々は聖ヨハネの祭日には自然の美に酔ひ、懺悔祈禱日には自分等の罪を悔い、滿二十歳になると戀愛を始め、十時を打つと床に就いた。彼等は結婚して、家族や官職のために精を出した、子供を養育した、而して男盛りといふ時分に

は、當局者からその功勞を認められた。彼等は牧師とも親交を結んだ、そして牧師の眼の下で色々の慈善的な行爲を示した——彼等は、その行爲をば、自分達が死ぬと、牧師が情の迫つたやうな聲を以て、追悼の説教の中ですら／＼と述べ立つて呉れるだらう、と心得てゐるのだ。彼等は言葉の純正なる意味に於いて朋友であつた、眞正なる控訴院判事であつた、やうに、眞正なる朋友であつた。

この叙述は予には、歴史的であるとは思へない。人々は今日では尖つた帽子を被らずに、圓い帽子を被るといふ事を除いては、一語一語悉く今日の人間にも當て拵められる。即ちその叙述は一時代をば、それを他の時代と區別し得るほど明快に、特質づけてゐない。予をして言はしめれば、その時代の特異相は、かゝる俗人主義小市民主義に對する、才能ある文學者即ち浪漫家の解釋にのみ存する。彼等は俗人主義を哲學的には、有、限、的、と解し、精神的には偏狹と解した、併し吾人の見る如く、道德的見地から賤陋なるものとは見なかつた。彼等はその主義に對して、彼等自身無限の憧憬を主張した。彼等はその主義の「散文」に對して、彼等自身の「詩」を對立せしめた、吾々がその主義の貧弱に對して、吾々の男子的意志を對立せ

しめるやうに。斯くして、その憧憬と思想とを以て、社會及び現實から逃避する事が、彼等の通則となつた。尤も彼等のあるものは、前にも述べたやうに、彼等の思想を、人生に於いて實現しようとはしなかつたが、彼等が謎の解釋をいかに考へてゐるか、現實はそれが殘滓なく詩の中に溶解する爲には、いかに變形せしめらるべきであらうかを概説した事があつた。而してこの場合、彼等は、例へばジュール・サントの如き佛國の閨秀文學者がなしたやうに、公憤に驅られて、民衆を鼓舞するのではなく、たゞ革命的或は少くとも煽動的思想を云々する事を、楽しんでゐたのだ。

ゲーテは自ら自己の周圍の私的及び社會的事情を、自己の個人的欲望に應じて變形せしめる事に成功したが、これは少壯文學者の出發點となつた。人々は已に青年時代から、世界をゲーテの立脚地より觀察した。かくして人々は、彼等が獲得したる、ある程度の自由と、彼等が自己の力及び能力の發展に要したる條件とを、多少の才能を有する人に必要な平均度、一層適切に言へば極少量となした。人々は彼等の性情の要求をば一の主義に變形せしめ、彼等が苦惱の結果たる斷念と、彼等が齎したる犠牲とを顧みなかつた、而して情念の絶對的權利の説を強調したの

みならず、冗漫に、輕浮に、術學的に官能の解放を説教した。ゲーテの強烈なる自己主張の外に、これとは全く別種の要素が、彼等に影響を及ぼした。この要素とは即ち、伯林の雰圍氣であつた。ゲーテの自由なる人道主義は、伯林に於いて、フリードリヒ大王の宮廷から發生したる嘲世的非基督教的^{リヒ}精神と、またこの王の繼承者の宮廷を風靡したる、放恣不規律なる精神との、豊富なる附加物を添へられた。

而してシルレル及びゲーテは、積極的には情念の放逸によつて浪漫派の進路を開拓したのみならず、消極的にも、彼等がその晩年に於いて、當時の時代に對して取つた、意識的の無關心的な態度によつて、彼等に影響した。浪漫家の現實逃避は、已にこの二人の文豪に、他の形式に於いて存して居つた。予は、ゲーテがいかに政治に對して無關心であつたかを證示する、二三の逸話を茲に掲げよう。彼に於いては、科學に對する興味が、政治に對するそれに代らねばならなかつた。革命時代の佛國遠征には、彼も參加してゐたのであるが、彼は、彼の言ふ處に従へば、その期間を、「色彩論」と個人的勇氣とに關する諸現象を研究することに利用した。イェーナの戦の後に、^{Knebel}は彼及び自身に就いて恚う書いてゐる、ゲーテは始終、彼の光學に

熱注して居つた。吾々は此處で彼の指導の下に、骨學を研究してゐる。それには、何處の原野にも標本が撒き散らされてゐるので、最も都合の好い時である。」彼の戦死したる同國人の死骸は彼をして、頌歌もしくは哀歌を歌はしめなかつた。彼はそれを骨にして、研究の對象となした。また八十一歳のゲーテが、七月革命が起つて間もなく、エッセルマンにあつて、君は今度の大事件を何う思ふ。火山がとうとう爆發したねといつた時、彼は王族の追放に就いて、慨嘆の言葉を洩らした。そのときゲーテは、大事件とは革命の事を指してゐるのではなくて、*Currier* と *Geoffroy de Saint-Hilaire* との間の學士院に於ける科學上の爭論を意味してゐたのだと答へた(エッセルマン著「ゲーテ清話」第三卷、一八三〇年八月二日の條參照)。

かゝる逸話は、ゲーテが詩人として、時代の運動にいかにか冷淡であつたかを明かにする。彼が那翁に對する戦争の間、一の愛國的の軍歌を作らなかつた事は、勿論無視することの出来ない美點を有つてゐる(ゴットシャル著「國民文學」第一卷、五八頁參照)。「書齋に籠もつて軍歌を書くことは、予にふさはしい事であつたらうか。敵の前哨の馬の嘶きが聞こえる、夜の露營にゐたならば、予は好んで軍歌を賦したて

あらう。併しそれは予の生活ではなかつた、また予の任務でもなかつた。それはテオドール・キルネルのそれであつた。彼の軍歌は彼には全くふさはしなかつた。併し武人的でもない、戦争嫌ひな予においては、軍歌は少しも似合はぬ假面であつたであらう。予はこれまで決して、心にもない詩作をしなかつた。(エッセルマン著「ゲーテ清話」第三卷、一八三〇年三月十四日の條參照)。ゲーテは彼の門人のハイベルグの如く、彼自身が體驗したことをのみ書かうといふ、強烈なる衝動のために、かゝる抑制を自己に加へたのである。彼は、彼の言に従へば、歴史的問題を取扱ふことをも、甚だ面白からぬ、甚だ險呑なことと考へてゐた。

彼の理想従つて彼の時代の理想は、純粹なる人道主義である。私的生活が人間の總てなのである。十八世紀及び啓蒙時代の激烈なる葛藤は、獨逸人の理想的性情に折り合つて、個人の教養の過程にのみ限定せられた。併し純粹なる人道主義は、單に歴史的なる題材からの回避である許りでなく、題材そのものに對する無關心であつた。ゲーテに與へた書翰の一つに於いて、シルレルは、詩人及び藝術家から二つの事が要求されなければならぬ、第一は彼が現實を超越すること、第二は彼

が官能的であるべきことであると言つてゐる。而して彼はこの言の意味を次のやうに説明してゐる。即ち藝術家が不調和なる亂雜なる境遇の真中に生活して、それが爲に現實を無視する時は、同時に官能の世界をも忘却し、抽象的になり、かつ彼の悟性の貧弱なる場合には、荒唐無稽に墮在しがちのものである。或は彼が反對に官能の世界に終始する時は、單に現實的なことにのみ執着するやうになり、かつ彼の空想が乏しい場合には、卑俗庸劣に陥り易いと云ふのである。この言葉の裡に言はゞ、當時の獨逸文學を分離する、分水界が含まれてゐる。吾人は一方には、ゲーテ及びシルレルの非民庶的の藝術と、空想的なる浪漫家によつて形成された同系統の藝術とを有し、他方に於いては、現實の基礎の上に立つてはゐるが、單に世話物的通俗的題材をのみ取り扱へる所謂娛樂文學を有する。後者の代表作は、*Lafontaine* (一七五八—一)の感傷的なる世話小説 *Schneider & Iffland* 及び *Kotzebue* の通俗的な散文的な家庭劇である。かゝる分離が出来た事は、獨逸文學に取つての不幸であつた。高級文學の現實よりの驚くべき背離は、浪漫派に於いて本當に現れたのであるが、その背離は已にその以前に胚胎して居たことを忘れてはならない。

コッツェプーは、彼が浪漫家の對蹠人であつた以前に、已にゲーテ及びシルレルに對する對蹠人であつた。議長フォン・コッツェプーが露國より故郷のヴィマールに歸つた時に、野心満々たる彼は、ゲーテ及びシルレルの仲間入りをしようと考へたが、彼の性格を看破したゲーテは、自分の交際社會に彼を入れることを拒んだ。コッツェプーは深くこの事を含み、ゲーテに不快の念を與へむがために、一八〇二年の三月、シルレルの名譽のために、市の議事堂に於いて、彼の鐘の歌を演劇的に上場せむと企て、盛に前景氣を付けた。然るにゲーテもシルレルもこの事を非常に不快に感じ、ゲーテの指金によつて、その上演に必要な、シルレルの半身像及び議事堂の貸與を拒絶せしめた爲に、この面白き企ては遂に行はれなかつた。併しこの事件の爲に、今迄ゲーテを崇拜して止まなかつた貴婦人達の心は、ゲーテから離れて、彼等の多くはコッツェプー派になつたといふ事である。(ゲーテ著 *Tag- und Jahreshefte*, 1802. — |ゴットシャル著 *國民文學*。第一卷、三三頁。— エッケルマン著 *ゲーテ清話*。一八二七年十月七日の條參照。) この事件や小なりといへども、才高き貴婦人達も古典的趣味にいかにかに親しみえなかつたか、かつその作物の題材を卑近なる實人生から取

り來つた文學者が、この時代にもいかに勢力をもつてゐたか示して餘りある。

乍併、ゲーテ及びシルレルが自然主義者であつた時代がなかつたらうか。それは確かにあつた、彼等は不安動搖の初期に於いては、強烈なる現實感を持つて居た。この二人は彼等の初期の製作に於いては、自然及び感情に自由なる活動を與へた

——ゲーテは「ゲッツ」と「ヴェルテル」とに於いて、シルレルは「群盜」に於いて。然し「ゲッツ」が騎士小説山賊小説の流行を促し、「ヴェルテル」が事實上及び文學上の自殺を誘起し、「群盜」が「大盜賊アベルリノ」(Abellino, der grobe Bandit)の如き作物を流行せしめ、而して讀書界は原型と模倣物との間に、餘り大した區別を認めなくなつた時に、この兩文豪は競争場裡から引き退いた。彼等は題材に對する興味を、形式に對する興味の爲に失つて了つた。古典藝術の研究は彼等をして、藝術的完成の上に、専ら心を注がしめるに至つた。彼等は彼等を理解する讀書界を、况んや彼等に題材を提供し、彼等に何らかの要求なり、注文なりをなし得る國民を見出さなかつた。その程度まで獨逸國民は、未だ中々發達してゐなかつたのである。ゲーテがグイマールからシルレルのために、何らかの盡力をなさむとした時に、シルレルは青年時代

には、マンハイムに於いては不羈放逸な生活を送つたとか、政治上の亡命客であるとか、極貧な、不幸な閱歴を持つた文學者であるとかいふ評判を、至る處で耳にした。一七九七年にゲーテとシルレルとは協力して「Xenien」といふ雜誌を出し、短詩を以て當時の文學に對する辛辣なる批評をなしたが、この頃は兩人は世間では、疑はしい才能を持つた二文學者と認められて居た。彼等を攻撃する爲に書かれたる小冊子は、グイマール及びグイマールに於ける二人の拙劣な料理人に獻げられたのである。那翁がゲーテと會見せむと欲した事、彼がこの文豪の風格に打たれて、この人こそ人間だ、Voilà un homme! と言つた事は、獨逸に於けるゲーテの威望を高める上に、著しく力があつた。當時詩人の家に宿泊して居つた、普魯西の一佐官は、それまで決してゲーテの名を知らなかつたといふ事である。彼の著作集が出版せられるや、その出版者は一書翰に於いて、その集に對する需要の極めて少いことを嘆じた。賣れ行きに於いては、詩人の義兄弟なる Vulpus の「Rinaldo Rinaldini」などの方が遙かに勝つてゐたのである。「イフゲニエ」や「タッソー」も、コッツェブーの人間嫌ひと後悔の如き、歐洲的名聲を博した戯曲と拮抗することが出来なかつた。ゲー

テ自身も、この兩作はヴィマールに於いて、三四年目に一遍位上演されるに過ぎなかつたと言つてゐる。この兩文豪をして通俗的傾向に行かしめずして、永久の光榮の道に向上せしめたのは、明かに理解なき讀書界であつた。然しその反對に、彼等の取つた復古的方向が、彼等を益々不人望に陥れた原因であつたことも確かである。ゲーテの著書の中で眞に成效を博したものは「ヴェルテル」と「ヘルマンとドロテア」の二作である。後者は、不道德と結婚に對する攻撃とを持つてるといふ廉で攻撃された「親和力」(Die Wahlverwandtschaften)の不評判を救つて餘りあるものであつた。

この大いなる兩詩人は、その周圍から背き去ると共に、いかなる進路を取つたであらうか。ゲーテは、彼自身の精神的發展の葛藤を、詩的製作の對象となすに至つた。併し、彼が近代的個人主義の中に没頭してゐる間は、到底古希臘の簡素と典雅とに到達する事が出来なかつたので、彼は個人的要素をその作品より排斥し去つて、専ら象徴と諷譬^{アレゴリ}とを用ゐるに至つた。かくして彼は、「Die natürliche Tochter」を書いた。この作に於いては人物は、王とか牧師とかいふ、階級の名を持つてゐるに過ぎ

ない。彼はまた「アヒレイオス」^{「バンドラ」}、「パレオフロンとネオテルベ」^{「エビメニードス」}及び「ファウスト」第二部を書いた。彼は希臘神話をば、それが佛蘭西の古典派文學に於いて取扱はれたと殆ど同様に、即ち普遍的に理解さるべき寓意譚として取扱ひ始めた。彼は「ファウスト」第一部に於けるが如く、最早個人を類型として取扱はなくなつた併し個人と想像せらるべき類型を描くに至つた。彼自身の「イフィゲニエ」も、今や彼には餘りに近代的に思はれて來た。諷譬に對する傾向は、トルザルドゼンの藝術をも生活から遠ざからしめた者であるが、ゲーテに於いては益々伸長して來た。美術の批評に於いても、彼は常に自然的眞理よりも藝術的眞理に重きを置き、非藝術的ながら潑刺たる生氣を有せる自然主義よりも、理想派的マンネリズム(フランクフルトの彼の家に保存された、彼の圖書に見られる如き)を尊重するに至つた。劇場監督としても彼は、同様の主義を發揮した。莊重と品威とが、彼には總てあつた。彼はカルデロン、アルフィエリ^{Alfieri}、伊多利^{Idroli}の悲劇作者^{譯者一}、ラシニス及びヴェルテイルの傳習的様式を喜んだ。彼に附屬する俳優は、古代の俳優の如く、舞臺に於いて、生ける立像とならねばならなかつた。觀客に側面や背を向け、或は

舞臺の背面に向つて物語る事は、彼等に禁じられた。彼はある演劇に於いては、近代式の生き／＼した身振を斥けて、假面を用ひしめたこともあつた。彼は、オイリビデスの戯曲の、不自然なる改作として評判の宜しくなかつた、ヴァルヘルム・シュレーゲルの「*Tou*」をすら上場せしめた。然のみならず彼は、拙劣と不自然とを極めたる、フリードリッヒ・シュレーゲルの「*Alarkos*」の如きものをさへ、たゞ俳優をして詩の朗讀を練習せしめ得るといふ理由で、公演せしめた。それほど彼は、外面的形式のために、一切を犠牲に供するやうになつた。

ゲーテが彼の偏頗なる傾向を以て、浪漫派に於ける同様なる傾向を準備した事は、容易に言はれ得るが、シルレルに於いて同様の事を證示するのは、爾く容易ではない。彼の戯曲は實に、現實的事件の豫言のやうに思はれる。「群盜」に於いては既に、佛蘭西革命の醜態が認められる。この戯曲は人も知る如く、後に「*Monsieur Gillet*」(Herr Schillerを佛人はかく譯者)に佛蘭西共和國の特權ある市民の稱號を得させた。ゴッ(Herr Schillerを佛人はかく譯者)トシャルが言ふ如く、「*フィエスコ*」に於いては、霧月十八日(霧月は佛蘭西の革命暦の第二崩壊せしめた日。譯者)の「*ドン・カルロス*」のポーザに於いては、ジロンド黨員の雄辯

が、*ワルレンシュタイン*に於いては、皇帝的の武人的精神が、*オルレアンの少女*及び、*テ*に於いては、獨立戦争が暗示されてゐる。然しシルレルは、たゞ彼の初期の戯曲に於いてのみ、副的の觀念及び目的からではなく、題材そのものから動かされてゐた。その後の有らゆる戯曲に於いては、具眼者は直に、彼の戯曲の題材が純形式的の立脚地から捕捉せられ、選擇せられたことを感じ得る。現代第一流の詩人イブセンが嘗て、*オルレアンの少女*に就いて、予に物語つた事がある。彼は、この作は詩人に依つて體驗されたものではない、強烈なる詩人自身の印象から生れたものではない、併し組み上げられた者だと言つた。而してヘットネル(Hettner)はこの傾向を、初期以後の、總ての彼の戯曲に於いて證示した。シルレルの希臘悲劇に對する渴仰は、一七九八年以來の多くの作品に、古代的運命觀を含蓄せしむるに至つた。「*ボ*リクラテスの指環」(アルタウシエ)「*潜水夫*」の如き譚詩及び「*ワルレンシュタイン*」は、*ネメデイス*(Nemesisは人間の悪と驕慢とを)といふ觀念に依つて支配されてゐる。「*マリア・シュトゥアルト*」は、*ソ*「*フォクレオスの「オエディプス王*」の原型に従つて作られたもので、その戯曲的發展は、たゞ當初から決定せられてゐる、悲劇運命の分析に過ぎない。「*オルレアンの少女*」は浪

漫的作物のやうに見えるが、作者はその題材をば、神に依つて人間に直接に與へられたる使命とか、神の器具なる人間が、人間的弱點の爲に滅びるといふやうな、古代的觀念を表現せむが爲に、選んだのであつた。

尙彼の非現實的傾向を證するものは、彼は極めて非音樂的であつたにも拘らず、希臘悲劇に於ける齊唱を嘆美し、齊唱は近代悲劇の對話よりも、遙かに大いなる効果を有すると、常に主張してゐた事である。「メッシーナの花嫁」に於いて彼は、ソフォクレスの戯曲の習作とも言ふべき、運命劇を提供した。「テル」の如き作に於いても、詩人の立脚地は、近代的でなく、總ての點に於いて希臘的であつた。この作の題材は、戯曲的ではなく、叙事詩的エピソードに取り扱はれてゐる。個々の人物は、明快なる特質を持つてゐない。テルを群衆から引き上げて、動亂の先導に立たしめた者は、たゞ偶然の事件に過ぎない。テルはゲートの云ふ如く、「*Demos*」（市區、人民の團）の一種である。かくして、この戯曲に表はされてゐるのは、二つの大いなる、調停せられ難き歴史の觀念の葛藤ではない。リネトリの人民は、自由に對する何等の感激を持つてゐない。動亂を惹起せしめた者は、自由の觀念でもなければ、國家的觀念でもない。

のである。動作アクション或は寧ろ事件イベントの動因となれるものは、個人的思想、個人的利害、財産及び家族の侵害である。農民等の切望してゐるのは、明かに新しき自由の獲得ではなく、然し古來の風俗習慣の維持である。この點に關しては、犀利なる批評眼を有する社會民主主義者ラッサール（E. Lassalle）が彼の戯曲「*Franz von Sickingen*」の序言に於いて、詳説してゐる。

吾人は、獨逸の詩人の中にて、最も多く政治的歴史的傾向に富めるシルレルすら、その製作に於いてはやはり、非現實的抽象的理想的である事を認める。かくして吾人は、謂はゆる主觀主義、理想主義、歴史と外的現實とに對する冷淡は、當時の全文學の特徴であると、確言しても差支へあるまい。

乍併、ヘルデル、ゲーテ及びシルレルの精神は、浪漫派の二つの主要なる要素の、たゞ一つである。他の要素は即ち、フヒテの哲學である。浪漫的個性にその特質と活力とを附與したものは、フヒテの自我説である。存在する一切は、吾々の爲に存在する——吾々の爲に存在するものは、たゞ吾々を通して存在し得る——自我の活動の裡に、有らゆる感覺的並びに超感覺的存在が含蓄されてゐる——これらの

公理は、それが形而上學的範圍から心理學的範圍に移される事に依つて、全く新しい解釋を得た。總ての實在は自我そのもの、中に含まれてゐる。それ故に絶對我は、それに對立せしめらるゝ、非我が自己と調和しなければならぬ事と、非我はたゞその限界を突破す可き無限の努力であるべき事とを要求する。當時の青年等の心を燃し立てたものは、彼の知識論キジエシヤフレイのこの結論であつた。人々は、フイヒテ自身も根本に於いてはさうであつたのだが、然し彼とは甚だ異なる方法に於いて、絶對我の下に神の觀念ではなく、思惟する人間を理解した。而して專制君主の專横を以て、一切の外界を撥無する自我の絶對的自由は、馬鹿々々しいほど專横な、そして自嘲的な、空想的な若き天才、二分の一天才及び四分の一天才の集團を陶醉せしめた。狂飈勃起時代に於いては、人々の渴仰せる自由は、十八世紀の啓蒙であつた。かゝる時代が一層純化せられたる抽象的な形式で再現された。而して今や人々の渴仰する自由は、十九世紀の無拘束であつた。

フイヒテの世界創造的の自我の説は、謂はゆる「常識」シヤルコンヴェンション健全なる人間の悟性ウチンと激烈なる戦ひをなした。而してこの事は、浪漫家に依つて最も多く喜ばれた點であつた。

「知識論」は科學的な「パラドックス」であつた。而して「パラドックス」といふ事は、彼等には思想生活の精華と認められた。かつこの哲學の根本思想は「paradox」であると共に急進的フイカイであつた。この哲學は、總ての歴史的因襲的社會制度を、理性的國家ラショナルステイトに變形せしめむと試みたる、佛蘭西革命の印象の下に、形成された者であつた。自我の獨裁は、フイヒテの胸に描かれたる、世界秩序であつた。かくして浪漫家は、この自我の哲學に於いて、古き世界をその樞軸より引き離し得べき、槓杆を認めたのであつた。浪漫派の空想に對する敬仰は、既にフイヒテに於いて始まつてゐた。彼は世界をば、自由であつて同時に拘束されたる自我の無意識的なる、而も思想家には理解され得べき活動に依つて闡明した。この活動は、彼に従へば、創造的想像力である。この力に依つて、吾々が感覺を以て捕捉する世界が、吾々に對して始めて眞實の世界となる。この創造的想像力から、彼に従へば、人間の精神の全活動が發出する。この力こそは、彼が努力的自我の中心力と稱する、衝動なのである。かくして、藝術に於いて極めて有力なる空想活動との比論が起るのも、自明な理である。乍併、フイヒテに於いても、空想は決して創造的能力ではなくして、たゞ變形と變成とを司る

能力に過ぎなかつた。何者、その活動は表象の内容ではなく、單にその形式をのみ、對象として持つてゐるからである。この事を人々は、彼の説に於いて看過した。

フヒテは、彼は「物象を要しもしなければ、それを用ゐもしない。何者、それは、彼の外部に存する一切に對して獨立することを、妨礙するからである」と言つてゐる。この説に極めて近似してゐるのは、眞に哲學的なる人間は、自分の欲するが儘に、哲學的に或は言語學的に、批評的に或は詩的に、歴史的に或は修辭學的に、古典的に或は近代的に、自己を調子づけなければならぬ、丁度人が樂器を鳴らすやうに全く意の儘に、いかなる時に於いても、かついかなる高低に於いても」といふフリードリッヒ・シュレーゲルの言説である。

浪漫派の主張に従へば、自我の藝術的萬能と詩人の放恣とは、いかなる法則にも拘束せらるべきものではない。この思想の中に、藝術に於ける、かの浪漫派のイロニー (die romantische Ironie) の萌芽が存してゐる。このイロニーに對しては、一切が眞面目であると同時に、戯れてある。このイロニーは、絶間なき自嘲として、常にイロニジョンを弄ぶが故に、浪漫家の多くの作品に於いて、純なる藝術的效果を破壊する

のである。

浪漫家の主義及び人生觀は、かくの如く詩及び哲學の混淆から、詩人的空想と哲學的思索との合體から發生する。それは純精神的の力の生産物であつて、それらの力と實人生との關係より生ずる結果ではない。かくして浪漫主義は、極端なる精神的性質を帯びてゐるのである。かくして同主義は、詩に就いての詩、哲學に就いての冥想であつて、より高き世界、即ち自然以外の自然に生きることのみが、重んぜられるのである。而してかくして象徴及び諷刺に對する傾向が、發生したのである。かくして浪漫家の作品は大抵、半ば詩的であり、半ば哲學的なのである。かくして宗教の性質を帯びたる、終には宗教に流入したる文學が起つた。その文學は、精神的創造に生きるよりは、寧ろ情調に生きること、に於いて、その存在を保持したのである。かくして、感情が力強く充實的に表現せられるよりも、寧ろ感情のエーテル的旋律が幽微に奏せられる場合の方が多しと言つた、ヴェルヘルム・シュレーゲルの言葉も、理解せられる。浪漫家は事物それ自身ではなく、事物に對する豫感を、讀者に傳達せむと欲した。それ故に吾人は、浪漫派の形像を、明かなる日光に

於いてはなく、然し夕暮の微光に於いて、或は深秘的にうち顫へる月光に於いて見るのである。かくしてまた浪漫家は、感覺を以て感知され難きものに對する表現を稀薄にし、幽微にする(例へば 'Blitzeln, Aengeln, Hinschlachten' の如く)。その上彼等は種々の感覺印象に對する言葉を交錯せしめる、それ故に總ての形像は夥しく不明瞭になる。テイクの 'Zerhino' に於いては、花に就いて恁う言はれてゐる。

Die Farbe klingt, die Form ertönt, jedwede

Hat nach der Form und Farbe Zung' und Rede,

Sich Farbe, Duft, Gesang Geschwister nennen.

色が鳴り、形が響く。何れの花も、その形と色とに従つて、おのがじゝの聲と言葉とを有す。ゝゝ、色と香と歌とは兄弟姉妹と呼びあへり。

この文學に於ける根本的要素は、狂飈勃起時代に於けるが如く、情熱ではなく、然し空想の自由なる遊戯、想像力の活動であつた。その空想と想像力とは、悟性の法則に依つても、現實に對する感情に依つても、束縛せられないといふ性質を持つてゐる。今や導き入れられたる、多くの高尚にして詩的なる思想は、思惟の法則に戰

を宣し、かつそれらの法則を、俗人主義の結果として嘲笑した。着想鬱憂及び機嫌が、それらの法則の代りになつた。然し空想は現實を不必要とするが故に、輕侮せられたる現實は、復讐的に空想をば、實質なき若しくは血液乏しき者とする。而して空想は悟性に反抗するが、これに依つて奇怪なる矛盾が生ずる。何者、この反抗は充分なる意識を以てなざるゝが故に、悟性が悟性に依つて排拒されるといふ形になるからである。文學上の諸流派の中で、この派のやうに、自己の性質に對する不斷の意識で苦められたものは、稀である。意向に對する意識が、浪漫家の作物の特徴である。

浪漫派の繼承したる遺産は、前にも述べたやうに、非常に大いなる者であつた。この派は、獨逸に於いて文學がその頂點に達した時に、起つた者である。それ故に浪漫家はみな早熟であつた。彼等はエビゴーネン(亞流)であつた。彼等は已に開拓されたる路を、自分等の前に見出した。彼等は夙に、獨逸に於けるいかなる他の流派も有してゐなかつた程の、文學的知識及び藝術的技巧の、大いなる蓄積を持つて居た。彼等は、彼等の精神に對する最初の着衣として、ゲーテ、シルレル及び沙翁

の言語を持つて居た。かくして彼等は、ゲーテの所謂「強ひられたる才能」(forzierte Talente)の時代を作り出した。彼等は、實際の人間性格の研究及び明確なる藝術的想念の形成に心を勞せずして、これらを補ふに、不安なる空想の放恣を以てした。浪漫家の總ての相異なる努力及び製作——藝術及び理想的の美に對する惑溺的の情熱を有するヴッケンローデルの「Klosterbrüder」(庵僧)肉の讚美とも稱すべき「ルチンデ」端睨す可からざる運命が、人間を翻弄する消息を描ける、テイクの憂鬱なる小説及び童話、總ての明確なる形式は失はれて、その代りに放縱にして怪奇なる空想の支配せるテイクの戯曲及びホッフマンの物語——これらの總てに共通なるものは、放逸なる自己主張或は放恣の主張であつた。而してこの主張は、狹隘なる「散文」に對する反抗、詩及び自由に對する要求に於いて、その出發點を持つてゐた。

自我の絶對的獨立は、自我を孤立せしめる。それにも拘らず、彼等浪漫家は直ちに一つの派を形成した。而してこの派が直ちに再び分離した時には、種々の興味深き分派が生起した。これは、彼等が獨逸の偉大なる詩人に依つて獲得されたる世界觀に、充分なる發揮を與へむと決心した事に、その原因を持つてゐる。彼等は

天才者の人生觀を、實際的に人生に導き入れむと欲した、而してその人生觀の意義をば、批評に於いて、詩に於いて、藝術上の議論に於いて、宗教上の講演に於いて、社會的並びに政治的問題の解答に於いて表彰せむと欲した。而してこの活動に對する第一歩は、激烈なる文學上の論戰であつた。彼等は一つには、一つの意志及び一つの精神を、戰友の一團に傳達しないてはゐられない、ある強烈なる性情に依つて動かされたのである、また一つには、淺狹なる而も優勢なる論敵の大群團に對抗せむとの、能才者の傾向に依つて動かされたのである。優秀なる浪漫家の場合に於いては、一派或は一分派の形成は、國家的組織の缺乏の結果であつた。而してその缺乏は同時に、彼等をして孤立的放恣に向はしめた、第一の條件でもあつたのだ。國家的統一と集合的の力とを缺ける、一國民に屬するといふ意識が、新しい鼓舞的な根本觀念をば、精神的貴族主義の主導者に傳達せむとの努力を生起せしめたのである。

ヘルデルリン

ゲーテ及びシルレルの希臘主義から、浪漫主義への過渡を成してゐる集團から孤立して、一つの姿が立つてゐる。それは當時の最も高貴なるかつ繊細なる文學者の一人なる Hölderlin である。浪漫家の同時代人であつたにも拘らず、彼は彼等の先驅者であつた、も一人の希臘愛好者なる André Chénier が、佛蘭西浪漫家の先驅者であつたやうに。彼は、後に浪漫派の哲學者となれるシェリング及び大いなる後浪漫派の哲學者ヘーゲルと共に教育を受け、かつ彼等とは深密なる友情を結んだ。然し彼は本來の浪漫家の何人をも知らなかつた。發狂が文學的創作から、彼を拉し去つたからである。

ヘルデルリンは一七七〇年に、ネッカー河のほとりの Tautenhain で生れて、一八〇二年に發狂し、一八四三年にテュービンゲンで死んだ。彼は四十年の間、精神病であつた。

それ故彼の文學者としての生活は、ゾグーリス及びブッケンローデルのそれより、少し長いだけである。

後に浪漫家の主なる特徴の一つとなれる希臘主義に對する敵對は、元來は決して、彼等の努力に存して居なかつたのである。それ所か、希臘の精神に對して、何等の感興を持つてゐなかつたテイクを除いては、初期の浪漫家は總て、就中シェリング兄弟、シュライエル、マヒエル及びシェリングは、古希臘の崇拜家であつた。彼等の努力は總ての人道的傾向に同感せむとするにあつた。而して彼等は、希臘人がそれを充實的に所有してゐたと云ふ事を、認識するに至つた。彼等は當時の技巧的な社會を脱離して、自然に歸向せむ事を冀求した、而してたゞ希臘人の間にのみ、永久の自然の存した事を、始めて發見した。彼等に對しては、純人道主義は、純希臘思想と同義であつた。かくしてフリードリッヒ・シェーリングは、ヴィンケルマンが美術に對して爲したると同じ事を、文學に對してなさむとの希望を以て、文學的活動を開始した。彼は「デオテイマ」に就いて「及び希臘の詩歌の研究に就いて」といふ論文に於いて、希臘の人文及び詩歌を、無上に讚美してゐる。彼はその後、近代の虚偽なる羞恥

感情を駁して、藝術の與かり知らざる道德律に對する、美の獨立を強調する事によつて、その希臘主義を發揮した。彼はまたアリストテレースには、希臘人の獨特なる自然詩に對する翫賞眼が缺けてゐた事を論證した。

古希臘に對する同様なる、しかもより永續的なる渴仰が、ヘルデルリンの人格の根本要素であつた。而してこの渴仰は、研究及び論文に於いて表現せられずして、詩並びに散文に於いて、純叙情詩的形式を取つて表はれた。ヘルデルリンは非凡なる叙情詩人であつた、戯曲家及び小説家としても叙情詩人に外ならなかつた。^{ハイム} Haym (一八二一—一九〇一、獨逸の哲學者に)の彼の小説に對する次の批評は、肯綮に價する、理想に對する陶醉理想の潰崩潰崩せるものに對する悲哀、これがヒュペリオン(Hyperion)の書翰を、力強きかつ切實なる効果を以て貫いてゐる問題である。……彼は到底回復せられざるものに對して、苦悶してゐる。而して彼の夢想せる理想は、希臘人の生活に於いて體現せられてゐるが故に、彼の全文學的活動は、たゞ失はれたる希臘に對する、永き憧憬的詠嘆である。而もかゝる憧憬ほど、非希臘的にして、頗る浪漫的である者は、外にあるまい。それは、同時代の ^{ゾナック} Zonack ^{シュタフェルト} Stauffeldt の古

スカンデナヴィアに對する渴仰、及びブッケンローデルの古獨逸に對する感溺的追慕と同様なる、異常なる性質を持つてゐる。

ヘルデルリンの描く風景が、非希臘的であるやうに、「ヒュペリオン」に描かれたる希臘人も、非希臘的なる近代人である。彼等はシルレルに依つて影響せられたる、高貴なる獨逸の夢想家である。彼はその詩に於いては、全く熱烈なる愛國者であるし、浪漫的なるハイデルベルグを、古代的の詩節メトロリックに於いて歌つたりしたけれども、而も彼には獨逸と希臘とは、野蠻と文明との對照のやうに考へられてゐた。彼は、彼の兄弟に宛てた書翰に於いて、希臘人に對する彼自身の關係に就いて書いてゐる、「予も總ての予の善意を以てして、たゞ世界に於けるこの比ひなき人間の跡を慕うて、覺束なげに歩むに過ぎない。而して予の言行は益々無様に、不調和になる許りだ。何者、予は鵝鳥の如く平たい足で、近代の水の中に立つて、力なくも希臘の天に向つて翼をうち振つてゐるからである。」而して「ヒュペリオン」の終りに於いては、獨逸人に就いてかう言はれてゐる、「彼等は昔からの野蠻人で、勤勉と學問とによつて、それから宗教によつて、益々野蠻的になつた。彼等は總ての神聖なる感情に對し、

ては全く無能であり、聖なるグライーチエン(美、優雅、愛嬌を司る三女神)の與ふる幸福を享けるには餘りに腐敗してゐる。彼等には、誇張と貧弱とがあるばかりだ。彼等は優れた精神を持つた人には、到底堪へ難い者共だ、投げ出された甕の破片の響きのやうに牙えない、不調和な者共だ。彼はなほ獨逸に於ける詩人、藝術家及び天才と美とを愛する人々の、悲痛なる運命を書いてゐる。優れたる人々は自分の國に於いて、まゝに満ちて、獨逸國民の中に生きてゐる。而も七年もたつて彼等を見ると、彼等は影の如く密やかに冷かにさ迷つて行く。

かくしてヘルデルリンは、佛蘭西人の勝利や、共和黨の巨人の歩みに大いなる歡喜を感じ、政治的にして宗教的なるヴェルテムベルグ、獨逸及び歐羅巴に於ける總ての紛々たる事件を輕蔑し、獨逸人の愚劣なる家庭的傾向を嘲笑し、かつ公共的名譽及び公共的の財産に對する、彼等の無感覺を痛嘆してゐる。彼は憊う言つてゐる、
「予は獨逸人よりもより支離滅裂なる國民を、想像するとは出來ない。職人はゐるが人間がゐない。哲學者はゐるが人間がゐない。僧侶はゐるが人間がゐない。主

君と奴僕少年と大人はゐるが人間がゐない！」

吾人が「ヒペリオン」に於いて認める國家の觀念は、その時代の精神と全く一致してゐるが、全く非希臘的である。國家にあまり多くの權力を委ねてはならない。國家は、自己の力にて強取し得ないものを、要求すべきではない。愛と精神とによつて與へられるものは、強取し得られるものではない。國家はそれに、手を觸れずに居るべきである。然らずんば吾々は、その法律を取つて、それを首手架に箝めるであらう。あゝ、國家を道德の學校になさうと欲するものは、それがいかなる罪惡であるかを知らないのだ。要するに、人間が國家を天國となさうと欲した事が、それを地獄にしてつたのだ！」

ヒペリオンが彼の Diotima に對して抱ける愛も、全く非希臘的である、而して全然浪漫的である。それは、貧しき家庭教師なるヘルデルリンを、彼の生徒の母なる *Contard* 夫人に結びつけた深きかつ悲劇的なる感情と同じものである。而してこの感情こそ、彼の生涯の運命を決定したものである。いかなる希臘人も彼の戀人に就いて、ヘルデルリンが彼の美しき希臘の女に就いてなしたやうに、宗教的

禮拜の心を以て物語らなかつた、親しき友よ、この世にわが精神を、幾千年も繋ぎ留め得る唯一のものがある。そしてその者に信頼する時、わが精神は、吾々の思惟や理解が自然に對しては、いかに幼稚なものであるかといふ事だけを、なほ感じさせられる。ヒュペリオンがディオティマに就いて物語るとき、吾人は伊多利亞の詩人ペトラルカの調子を想ひ起こさせられる。ディオティマは、ヒュペリオンの心霊が求めてゐた唯一のもの、吾等が星の彼方にありと想像する完全である。彼女は美そのもの、理想の體現である。愛は彼に取つては、宗教である。而して彼の宗教は、美に對する愛である。美は最高絶対の理想である。それは概念としては理性の世界に、形像としては空想の世界に屬する。この美學の見解からして、ヘルデルリンは、カントによつて引かれたる、悟性と想像との間の限界を認めない。シルレルの希臘主義及びビッシングの超絶的理想論と相通する彼の説——詩的哲學的なる恍惚忘我——は、浪漫派以前において已に、浪漫的なものであつた。

次に、彼の半ば近代的なる汎神論の上に撒布せられた、基督教的情調の閃光の中にも、浪漫主義の萌芽が認められる。彼は元來僧侶となるべく定められた、そして

僧侶の嚴格な教育の下に、苦まねばならなかつた。而して彼の書翰には到る處に、敬虔なる情操が表はれてゐるにも拘らず、彼はその詩に於いては、異教者であつた。彼は、僧侶をいたく嫌つた、そして僧侶になれといふ家族のものゝ願望に、常に反抗してゐた。彼の「エンペドクレス」(Empedokles)の中に、神官ヘルモクラテスに與へたる、主人公の次の如き注目に價ひある答辯がある。

Du weißt es ja, ich hab' es dir bedeutet,

Ich kenne dich und deine schlimme Zukunft,

Und lange war's ein Kitsel mir, wie euch

In ihrem Kunde duldet die Natur.

Ach, als ich noch ein Knabe war, da mied

Euch Allerleiher schon mein frommes Herz,

Das, unbestechbar, innig liebend hing

An Sonn' und Aether und den Boten allen

Der großen, ferngehenden Natur;

Denn wohl hab ich's gefühlt in meiner Furcht,

Daß ihr des Herzens freie Götterliebe

Bereden mächtet zu gemeinem Dienst,

Und dag ich's traiben sollte, so wie ihr.
Hinweg! ich kann vor mir den Mann nicht sehn,
Der Göttliches wie ein Gewerbe treibt,
Sein Angesicht ist falsch und kalt und tolt,
Wie seine Götter sind.

(大意) 今更のことではない、予は度々汝が言つた筈だ。予は汝をも汝の邪まな仲間をも知つてゐる。それで、何うして自然がその領土に、汝等の存在を許してゐるのか、予には長い間、謎であつた。あゝ、汝等、人類を腐敗せしめる者よ。予が未だ少年であつた時にも、已に予の純なる心は、汝等を嫌忌して居つたのだ。その純なる心は深い愛を以て、太陽やエーテルや、大なる無限なる自然のあらゆる使者等を、慕つてゐたのだ。予は、汝等がわれらの自由なる神々の愛を、汝等の賤劣なる目的に利用し、予をもまた汝等の道に従はしめむとするのを認めて、恐怖を感じない譯には行かなかつた。去れよ！予は予の前に、宗教を職業の如くに取り扱ふ男を、忍ぶことは出来ない。かゝる男の容貌は虚偽で、冷かで、死んでゐる、丁度彼の神々のやうに。

始めはヘルデルリンよりは、遙かに自由思想的であつた浪漫家は、終には似而非信仰に陥つたが、かゝる傾向は彼に於いては少しも認められない。然し彼の希臘主義は、ゲ：テ及びシルレルのその如く異教的ではない。そこには基督教徒

の歸依に類似せる、深厚なる感情が支配してゐる。太陽、地、父なるエーテルに對する彼の詩的祈禱は、信徒の祈禱である。而して彼が「エムベドクレース」の如き純異教的題材を取り扱ふ時には、クライストの「アムフトリオン」に於けるが如く、到る處に、基督教の傳説がその影に潜んでゐる。エムベドクレースの當時のバリサイ人に對する位置は、基督がその國のバリサイ人に對するそれと、丁度同じものである。エムベドクレースは、基督の如く、大いなる豫言者である。而して彼の自由意志から出た犠牲の死と、彼に向つてなされたる禮拜とは、基督教的情調と幽かに似通へる情調を惹起する。

ヘルデルリンは、言はゞ心靈によつて引かれたやうな、幽微な繊細な輪廓を以て、思想と情調とを表現した。而してその思想情調は、浪漫派に於いて、發展せしめられ、誇張せられ、戯畫化せられ、或は簡短に撤回せられるのである。

ヴィルヘルム・シュレーゲル

一七九七年に於いて、當時三十歳のアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルは、彼の沙翁翻譯の第一巻を出版した。この第一巻の二三部のうちに種々の草稿が発見せられた。而してこれらの草稿は、天才的なる翻譯者の一方ならぬ努力の程を、吾々に示し得るものである。この古びたる草稿を、周匝なる注意を以て讀む時には、吾人はヴィルヘルム・シュレーゲルの精神生活ならびに全時代の精神生活を、窺ふ事が出来るのである (M. Bennays 著「シュレーゲル譯沙翁集の成立次第」參照)。

一見無意義なるが如き斷簡零墨が、吾等に多くの事を教へるのである。而してそれらは悉く、シュレーゲルの手書した者ではない。一七九五—九六年に於いてシュレーゲルは、「ロミオとジュリエット」の翻譯に従事した。而して彼の *Karoline Böhmer* との結婚の最初の年——結婚は一七九六年になされた——に於いて、彼の妻は、この

戯曲の最初の草稿を淨寫した。而してこれは後に、彼によつて訂正されたのである。一七九七年九月に於いて彼女は、彼女の書翰に書かれてあるやうに、「御意のまゝ」(„As you like it“)を彼の殆ど讀み難い草稿に依つて淨寫した。而して彼女は、その際、單なる筆耕者よりも、より多くの事をした。彼女はシュレーゲルの「ロミオとジュリエット」に關する論文にも、力を添へた。この論文は「ヴィルヘルム・マイステル」に於けるゲーテのハムレット研究に次いで、當時の沙翁研究の上乗なる者であつた。この論文のある部分は、シュレーゲルに於いて認められないやうな、女性らしい感情の表現と優麗なる文體とを持つてゐる。これは彼女の書いたものに違ひない。彼女は、獨逸に沙翁を眞實の姿に於いて導き入れようとする勞作の意義を、彼女の同時代人よりも、より善く理解してゐた。然しそれらの草稿を見ると、その勞作及び勞作者に對する彼女の關心は、結婚の最初の年に於いては明かに認められるが、その後には餘り認められない。初めには彼女の手書した處は大分多い。一七九七—九八年に於ける、シュレーゲルの翻譯の草稿にも、彼女の手書した處は認められるが、それも前よりは稀になつた。一七九八年の秋に譯された「ヴェニス」の草稿

には、カロリーネの手書が處々に認められるが、この以後には全くない。この年の十月に、シェリングはイェーナに於ける浪漫家の仲間に入つて來た。それでそれからと云ふものは、彼女の手書は、何處にも發見されない。

この草稿の中で特に二つのものが、シェレーゲルの精神的發展の過程を、吾人に明かに觀察せしめる。それは「夏の夜の夢」の二つの異なる草稿である。

シェレーゲル以前には、獨逸に於いても、その他の國に於いても、何人も沙翁の韻文を悉く韻文に譯さうと試みたものはなかつた。それまでは僅かに、ヴィーランド及びエッセンブルグ (Eschenburg) の二つの陳套なる散文譯があつたのみである。ゲッティンゲンに於ける學生時代に、シェレーゲルは始めて、夏の夜の夢に於ける韻文の部分を、獨逸語の韻文に翻すことを試みた。彼は幼時より已に、熱心な韻文家であつた。これは確かに、遺傳的の才能であつた。彼及び彼の弟が名を成した以前に、矢張二人のシェレーゲル兄弟が、文壇に於いて一地步を占めてゐた。それはヨハン・エリアス・シェレーゲルと、ヨハン・アドルフ・シェレーゲルとの二人である。前者は永くコーペンハーゲンに住し、ホルベルグ (Holberg) の友人であつた。彼は戲曲的方面に

於いては、レッシングの前驅であつた。後者は、後のシェレーゲル兄弟の父である。彼は何等の獨創性を持つてゐなかつたが、語學及び文章上において、並々ならぬ才能を持つてゐた。

ヴイルヘルムは學生時代から夙に、語學的文學的天稟を以て、頭角を表はして居たのであるが、當時ゲッティンゲン大學の教授として、不幸な孤獨な生活を送つてゐた、ピルゲル (Birger) に近づかむ事を熱心に冀望してゐた。ピルゲルの詩人としての名譽は、學問のみ重んじられるやうな處に於いては、何の役にも立たなかつた。彼の社會的名譽は、自分の妻の妹に對する彼の情交が知れ渡つた爲に、著しく損はれた。言はゞゲッティンゲンに追放せられてゐたピルゲルは、趣味に於いて、組織的知識に於いて、彼自身よりも勝れてゐた年若き才人を、溫情を以て迎へた。ピルゲルは當時尙、第一流の叙情詩人及び韻文家として認められてゐた。シェレーゲルはその師の語學上、韻文上の技巧を凡て習得し、かつ言語の選擇及び排列、韻律及び韻格の使驅に依つて、藝術的効果を生ぜしめる、總ての手段をも學んだ。而して彼の先天的の模作的才能に依つて、彼はピルゲルの詩的特質を、出来るだけ自家藥籠中のものと

なした。彼の詩「アリアドネ」(Ariadne)は、ビュルゲルの作かと思はれる位である。ビュルゲルは當時獨逸に流行し來れる「ソネット」の妙手であつた。而してシュレーゲルの「ソネット」も、よくその師の遺録を傳へてゐた事は、後年彼の全集が出版された時に、ビュルゲルの二つの「ソネット」が不注意の爲に、その中に編入されたのを見ても分かるであらう。

この師は、若き門人の次の如き行を以て始まる、優れたる「ソネット」を、推稱して已まなかつた。

Junger Aar, Dein Königlichcr Flug

Wird den Druck der Wolken überwinden,

Wird die Bahn zum Sonnentempel finden,

Oder Eubus' Wort in mir ist Lung!

若鷲よ、汝は王の如き威嚴を以て飛び行き、重々しき雲をも凌ぎ、太陽の御堂にまでも馳けらむ。さなくばわが心における「フーアス」神の言葉も偽りなる！

而してこの詩は、次の溫雅なる行を以て終つてゐる。

Dich zum Dienst des Sonnengotts zu krönen

Hielt ich nicht den eignen Kranz zu wert,

Doch—Dir ist ein besserer besohert.
日の神に仕へまつるなれに冠せむには、わが編める花冠も足らばじと思ひしに——なれにはよりよき花冠ぞ興へられぬる。

シュレーゲルはこれに答ふるに、ビュルゲルの麗句に富んではゐるが、然し情熱を缺きた。Das hohe Lied von der Einzigcn の批評を以てした。彼はこの詩を、比ひなき叙事詩として賞讃した。今や彼はビュルゲルと共に、夏の夜の夢の翻譯に着手した。尤も師は彼の譯を訂正したに過ぎない。當時彼は尙、ビュルゲルの技巧に影響されて居つた。而してその草稿によつて察するに、彼は常にビュルゲルの訂正を受納し、響き強い言葉に對する彼の傾向にも従つた。然しビュルゲルは翻譯者として、沙翁の特徴を再現する事には、何等の努力をしなかつた。彼は野鄙な無作法な言葉や、迷妄に陥れる情念を表はせる文章などを強調せしめる事によつて、たゞ自己の特徴を表はしたに過ぎなかつた。かつ彼は下品な諧謔に對する、彼の趣味と調和する部分に力を入れた、そして輕妙なる原文の美をも傷けた。若きシュレーゲルは生れ乍ら、優麗典雅に對する大いなる傾向を持つて居たのであるが、これらの點に於

いては、この師の影響から脱し得なかつた、そして往々粗野にして無味なる辭句を連ねて、自然的な清新なものと思ひなしてゐた。

ビュルゲルよりもヘルデルの方が、若きシュレーゲルに、好き影響を與へ得た事であらう。彼の諸國民の聲に於いて見出さるゝ、沙翁の戯曲の斷片的翻譯に於いて、ヘルデルは久しい以前に已に、いかにして英語の韻文を獨逸語へ翻譯すべきかの、好模範を示した。それ故に、シュレーゲルが沙翁を翻譯する際に、ヘルデルの指導に従つたならば、彼は決して、五脚韻短長格をアレキサンドル句格に改ためたり、或はかの作に於ける妖魔の歌の韻格を變へたりしなかつたであらう。何人もヘルデルほど痛切に、ヴィランドの翻譯の不完全な事を、感じたものはなかつた。而してヘルデルが據つて以て沙翁を獨逸化せむとした精神が、シュレーゲルに復活した。而して彼はその最初の試みに於いては、失敗したにも拘らず、戀てヘルデル自身をも凌駕するに至つたのである。

彼は間もなく、ビュルゲルの影響から脱した。ビュルゲルは、藝術を民庶的たらしめる事を以て、最高の任務としてゐた。シュレーゲルが一七九一年にビュルゲルと別れ

て、アムステルダムに行き、家庭教師をして居つた時には、彼はシルレルの著作に心酔した、そして彼の詩に於いてシルレルの調子を模し、かつシルレルの詩、藝術家に對して、同情ある批評を書いたのみならず、彼の美學上の論文に依つて、藝術の本質に對する一層高い概念を得るに至つた。彼の韻文の様式は、莊重の調子を帯びるに至つた。併しシルレルは、シュレーゲルをして沙翁を眞に充分に理解せしめる事に對しては、ビュルゲルと同じく無能であつた。シルレルは、マクベスの翻譯に於いて、原作の魔女を希臘の復讐女神に換へ、門番の下品な滑稽な獨白を、道徳的な教化的な歌にして了つた。ビュルゲルの寫實主義が、シュレーゲルに對する一の危険であつたならば、シルレルの *Pathos* (崇高なる或は熱烈なる感情、或は譯者) も一の危険であつた。

シルレルが藝術の高尚なる意義を、シュレーゲルに闡明したと同時に、新たに出版せられたるゲーテの著作集は、研究、注釋及び詩的翻譯に對する彼の先天的傾向を刺激した。前にも已に述べたる如く、この著作集の第一版は、頗る冷淡なる歡迎を受けたのであつた。その主因は、この詩人の精神的發展を、少しも理解してゐなかつた讀者が、新たに出されたる作品を、矢張「ゲルテル」及び「ゲッ」の如き様式であらう

と期待してゐた事に存する。乍併、シュレーゲルの批評的精神は、今やゲーテの驚嘆すべき多方面を認識した。彼は、対象を自身を全く活かさむがために、そこに何等の我見を挟まざるゲーテの能力を、理解しかつ尊重した。その能力はゲーテに於いては、決して縦まに選ばれざる、而も常に題材に依つて規定せられたる形式を生み出したのである。彼は、文學的翻譯者たらしむには、ゲーテと同様に自己を否定し、題材の精神的再現に對する、同様な能力を發揮せねばならぬ事を意識した。外國の作物の最も微妙なる特質に對する女性的感受性と、作物に對する全體の印象によつて、それを再現せしむ可き男性的能力とは、翻譯者になくてならぬものである。而してこの二つの能力をゲーテは兼備して居つた。何者、彼の實體は他方面であつた、彼の名は Legion^{レギオン} (彼の名は澤山あるの意。譯者。)、彼の精神は Proteus^{プロテウス} (姿をいかやうにも變へる海神。譯者。) であつたからである。

シュレーゲルには尙、語學上技巧上の困難を切り抜けるといふ、問題が残つてゐた。而してこの點に於いてもゲーテは、一紀元を劃する程の好模範を垂れた。彼は獨逸語を變形せしめた。獨逸語が彼の手を通して書かれた時には、それは軟靱と容積

とを増大せられ、崇高及び優雅に對する言葉を豊富になされた。かくしてその獨逸語はシュレーゲルの丁度要求してゐた樂器を、彼に提供したやうなものであつた。ビュルゲルの影響の下にあつた時代には、彼は技巧上の完璧をば、ある外部的のもの、練磨によつて到達し得られるもの、如くに解釋して居つた。然るに今や彼は、完全なる技巧は内面的に限定せられるもの、即ち根本情調に依つて規定せられる統一的様式に外ならない事を理解した。而して今や彼は、彼の任務を二重なるものと觀察し始めた、即ち異國の傑作を獨逸語に於いて再現する事と、自國及び他國の優れたる作品を批評的に解釋する事とである。

今やまたシュレーゲルは、友人フィヒテに對して、新しき理解を持つやうになつた。この哲學者は、浪漫家には、かくも早く同情されたのである。彼は、フィヒテの自我説は、自己を一切に於いて、かつ一切を自己に於いて見出す可き、人間の精神の無限の能力に對する思想を、全く抽象的に表現したものと認識した。フィヒテのこの強烈なる根本思想に、シュレーゲルの柔軟なる精神は、絡みつくやうに縋り付いた。

この時代に彼は、彼の弟との絶間なき文通に依つて、ある影響を受けた。フリー

ドリッヒは兄によつて、新しき文學的運動の潮流に引き入れられた。而して争闘的なる彼は、兄の言説を理解し得たと信ずるや否や、その爲に奮闘する事を、敢て辭せなかつた。兩兄弟は各々相異なる性格を持つてゐた。兄の方は、文學上の見解に於いて大膽であつたにも拘らず、秩序正しき人であつた。美及び形式に對する感覺は、彼には夙に發達してゐた。彼の主要なる才能は、形成であつた。確實と精巧と節度に對する感覺とは、彼には先天的であつた。彼が非常に興奮せしめられた時を除いては、彼は争論家としても温健な方であつた。彼は彼の意向と能力とを比較的早く認識した而して、不屈なる精神を以て、彼の一旦表白したる思想に、實現の路を開拓した。彼は浪漫派の創立者となつた、而してそれだけの實力をも有してゐたのだ。彼の弟は彼を戯れに評して、「神聖なる小學校長」とか、「宇宙の校長」とか言つてゐたけれども。

フリードリッヒ・シュレーゲルは兄に比しては不安底なる人物であつた、生粹の宗派創立者であつた。彼は、その書翰に言はれてあるやうに、「ルーテルの如く説教し、争論するのみならず、モハメットのやうに、言葉の赤熱せる劍を以て、世界の精神界を風

靡すること、一生を捧げむと欲した。彼は實現せられさうもない程の、多くの立案と計畫とを持つて居つた。彼は支柱なく、中心點なく、絶えず動搖しつゝ、たゞ多くの断片的な事をやつたが、一方に於いては、奇警なる着想と豊富なる機智とに富んで居つた。かくて彼はともすれば「神秘的なる術語學」によつて、論敵を威嚇し、而も平板と無味とに陥りがちであつた。ノヴォリスは彼に宛てた書翰に於いて、極めて適切に彼を評してゐる、「親しきシュレーゲルよ、君の先祖は、トールの王だ、君は亡滅の家から出たのだ。」批評家としては彼は、ヴィルヘルムよりも一層感情的であり、かつ不公平であつた。詩人としては彼は、一生に僅かに、二三の天真なる感情の籠もれる詩を作つたゞけであつた。彼の「*Altkios*」に至つては、實に憫殺すべき劣作であつた。繊細なる官能と健實なる趣味とを有せる彼の兄は、決してこんな詩を作らなかつた。この兄は文學に於いて弟の指導であつた。弟はまた絶えず兄に刺激を與へてゐた、然しその狷介なる性情に依つて、兄とシルレルとの交情及び終にはゲーテとの永き交情をも毀損した。

ヴィルヘルムは一時沙翁の翻譯を放棄して、南歐の詩人に注意を向けた。彼は有

らゆる方面に於いて、試みる所があつた、ホメール、希臘の哀歌詩人、叙情詩人、劇詩家、牧歌詩人、殆ど總ての羅馬の詩人及び伊多利、西班牙の詩人からの斷片を翻譯した、その上印度の詩までも翻譯した。かくして彼は獨逸語を各國語に於ける傑作の、パンテオンとなさうとしたのだ。彼は長い間ダンテに心を向けて居つた、然し三行詩の形式を充分使驅し得なかつた。彼は各聯に於いてたゞ二行のみに韻を踏んだので、詩格は損ぜられ、各聯の融合が没却せられたのである(三行詩は a b c, b a c, c a b, c b a と押韻したのである。譯者。)

その後彼は、「ロミオとジュリエット」及び「ハムレット」に再び着手した。彼はその翻譯の斷片を弟に送り、フリードリッヒは更に、カロリーネにそれを送つた。彼女は全體に於いてそれを賞讃した。然し彼女は言語が餘りに擬古的になつた事を非難し、かつこれを彼のダンテ翻譯の影響であるとした。これより少し前に彼は、ビュルゲルの様式を捨てた後に、専ら用ゐて居た優麗典雅の文體に對して、警戒しなければならぬと考へた。その結果として彼は反對の極端に陥り、拮据な堅苦しい擬古體を用ゐるに至つたのである。

一七九七年に於いて彼はシルレルに「ロミオとジュリエット」の最初の見本を送つた。シルレルはそれを「ホーレン」(Horen)に掲載した。その後間もなくこの雑誌に、シュレーゲルの論文「ヴァルヘルム・マイステルの見たる沙翁に就いて」(Etwas über William Shakespeare bei Gelegenheit W. Meisters)が掲載せられた。「ヴァルヘルム・マイステル」に於いてゲーテは、沙翁をば獨逸の文化に於ける重要な要素として、理解す可き事を力説した。「ハムレット」に關する對話に於いて彼は、沙翁は藝術的意識を缺ける粗放なる自然的天才である、といふ偏見に反對した。この偏見にして至當であらうなら、獨譯に於いて、沙翁の文體を精確に再現するといふ事は、勞して功なき事であつたであらう。「ヴァルヘルム・マイステル」に於いて解釋せられた沙翁のやうな卓越せる藝術家の作品を譯す時に、内容と形式との調和が無視せらるべきでない事は、言ふまでもなからう。而もゲーテは、「ハムレット」の引證をなした時に、無造作にも古き散文譯からした。彼も未だこの作に於いて、題材と形式とが不可離の關係にある事を、意識して居なかつたのである。

シュレーゲルの勞作は、緩漫に進んだ。それに彼がアレキサンドル詩格を放棄し

てはならないと考へてゐたのは、確かに未だ捕はれてゐたのである。彼は、僅かに出来るだけ、「ロミオ」に於いて、五脚短長格を保持してゐる。ローレンス法師とロミオとの場を、彼はアレキサンドル詩格で譯してゐる。彼の辯疏に據れば、この詩格は對話には適しないが、そこに出て来る格言や叙述には、適して居るといふのである。かくの如くにして、「ロミオ」の叙情的氣分は、全く失はれて了つた。

彼は自らこれを意識した。かくして彼は非凡なる努力と不屈なる情熱とを以て、更に始めからやり返した。今やアレキサンドル詩格を放棄して、獨逸語の冗長をも物ともせず、彼が以前には十二或は十三の綴りを要した所を、十或は十一の綴りで言ひ盡す事に腐心した。一行をも加へずに、原詩を翻譯し得るかといふ事は長い間、彼には解き難き疑問であつた。翻譯は、ビュルゲルに於いてもさうであつたが、彼に於いても、原文よりも膨張する。十四行の英語の詩は、獨逸語に翻すと、何しても十九行か二十行になる。それより短かくする事は、彼には不可能と思はれてゐた。然るに彼は終に、沙翁の藝術的形成法を根本的に認識した、而して沙翁の原作にない贅句などを、一切棄て去つた。かくして各行が一行によつて再現せらる

るに至つた。彼は獨逸語の冗漫と不充分とを呪咀し、慨歎せざるを得なかつた。かつ獨逸語は、英語とは全く異なる、制限と轉回とを持つてゐた。彼は沙翁の様式を模倣することは出来なかつた。彼は快音と情熱とを有せざる吃音か、啞辯のやうな言葉を用ゐることを強ひられた。然し彼は自己を抑制し、言語を制御しつゝ、遂に嘆美に餘りある翻譯を、成就する事が出来たのである。

シェーレン (Scheler) は的確に「*シュレール*」の事と言つてゐる。「*シュレール*」の沙翁は、ゲーテとシルレルとが共同的に製作した時代の、作品と並べても差支へがない。元よりそこに創作と模倣と云ふ大いなる距離はある。然しこの模倣の完全は、それらの創作の完全に比して劣るものでない。」

形式の統御は、この時より彼に保證せられた。彼は彼の苦心の實を、今や收穫し始めた。一七九七年から一八〇一年の間に、實に十六篇の沙翁の戯曲が、この名匠の手に依つて獨逸國民に提供せられた。而してそれらの翻譯は、沙翁に比すべき大詩人によつて書かれたかの如く、完全なものであつた。

この事は果して、何を意味してゐるだらうか。それは實に前世紀の中頃に、ゲーテ

及びシルレルの外に、沙翁が獨逸に生れたと同じ事ではなからうか。沙翁は一五六四年に英國に生れた、而して一七六七年に於いて、彼の獨逸の翻譯者に於いて、再生した。一五九七年に彼は「ロミオとジュリエット」を、倫敦に於いて出版した。而して一七九七年にこの悲劇は、新たに作られた著作として、伯林に再現したのだ。

沙翁がかくの如くにして獨逸に再び蘇生した時に、彼は非常なる力を以て、公衆に影響した。この公衆は、彼の米國の公衆の如くには、彼と精神的に近似してゐなかつたが、種々の點に於いて、彼をより、多く理解したのである。彼は英語を少しも知らざる數百萬の人に、精神的滋養物を提供し始めた。今や中部及び北部歐羅巴の人々が、彼を發見し、彼を愛讀するに至つた。

然し予が前に述べたやうに、かゝる餘り見榮えのしない、而もかゝる優れたる精神的勞作には、非常な努力が集注されたのであつた。吾人はその翻譯の立案や草稿に於いて、實に一時代の獨逸の精神生活を辿ることが出来る。この翻譯が出来る迄に、なければならなかつたものは、レッシングの批評とヴィーランド及びエッセンブルグの企圖と、獨逸人の精神に存する感受性を一身に體得し、若きゲーテをその

門人になす事を得たヘルデルとであつた。ゲーテは、グッツに於いて沙翁を模倣したが、それは散文で書かれたものであつた。かくて先天的の形式上の能力を有せるヴェルヘルム・シュレーゲルの如き、獨特の能才が生れて來なければならなかつた。而して彼は、その時代の藝術的技巧の最頂點に、到達しなければならなかつた、それから更にビルゲルの野鄙に對する傾向から、脱離する事を要した。彼はその上、シルレルの藝術に對する高尚なる概念によつて動かされたが、而もシルレルの *Pathos* に對する傾向及び滑稽の嫌忌を、警戒しなければならなかつた。彼は更にゲーテによつて發展せしめられたる言語を受納したが、沙翁に於ける形式及び内容の一致に就いては、ゲーテよりも深遠なる洞察をなさねばならなかつた。その上、彼と親似せる才人の暗示及び刺激、一婦人の犀利なる批評も、彼にはなくてはならぬ者であつた。要之、二百年前に死んだ劇詩家の翻譯といふ、一見榮えのしない、而も幾百萬の人々の精神の糧となり、獨逸の文學に深きかつ永續的の感化を及ぼせる勞作が成立する迄には、かゝる幾多の原因、事情、人物、精神的傾向が必要がつかつたのである。

テイク及びジャン・パウエル

幻覺を起し得るやうな陰暗な性情、狂氣に近き先天的憂鬱、絶えず理性の要求を主張するやうな明晰なる、冷かなる判断力、及び情調に於いて生活し、かつそを惹き起しうべき異常なる能力——これがルードヴィヒ・テイク (Ludwig Tieck) の根本性質であつた。彼は浪漫派のうちにあつて、最も多産なる作家であつた。同派の分裂の後にも、彼は幾多の小説を製作した。それらの小説は、過去ならびに現代を、本派の來の浪漫の詩人よりも、より、寫實的に描寫したものである。

彼は一七七三年に伯林に於いて、製繩者の子息として生れた。彼は小學校時代に已にゲーテ、沙翁及びホルベルグから深い印象を受け、長じては沙翁の妖魔の歌及びオシアン^{Osian}の憂鬱なる詩調を模倣することが出来た。然し彼は青年時代に於いては、文學上の先輩から餘りに利用されたが爲めに、猥りに多作するといふ弊に

陥つた。かつかゝる場合には、彼の著作の精神及び傾向は、彼に豫め限定せられたにしる、それらの價値なき初期の作物に於いても、彼の個人的特質は明かに認められる。彼の師 ^{フランク} Rambach の指導の下に、彼は啓蒙時代の精神に於いて、感傷的なる義賊の物語を書き、或はフランツ・モリア ^{シルレルの「群盜」の譯者} (中の人物) の死の場を模倣して、物凄しい場面を描いた。然し彼は若干の皮肉なる傍白などで、折々彼自身の一層進歩せる思想を仄めかしてゐる。稍々遅れて彼は、啓蒙時代の開拓者なる、老いたるニコライによつて出版されてゐた雑誌の爲に、未來の浪漫家を忍ばしめる大人びた物語を書いた。それらの物語に置いて、彼は迷信を非難し、魯鈍なる一老人をして、愚劣なる中世^{中世}或は沙翁の幽靈に對する、輕蔑の言を吐かしめる事に依つて、彼の皮肉な批評を示してゐる。彼はかゝる小説を、たゞ生活のたつきの爲に書いたのである。然しそれらの作の中にも、人生に疲れたる憂鬱家の面影は、それと窺はれる。彼は長い間、各種の陰鬱なる問題及び疑惑に悩まされてゐたが、遂に天才を輕侮して、理智的市民的中庸を謳歌する人々から、大した苦悶もなく脱離して了つた。彼のそれまでの峻巡低回^{峻巡低回}は、九十年代の始めに出來た小説及び戯曲(これらに彼の人格が

能く顯れてゐるに於ける迷信、殘酷に對する快感、冷かなる犬儒主義にも認められるし、またそれらの作に於けると同じく、明かに注文に應じて書かれた理智的な物語にも表はれてゐる。

テイクの最初の價値ある作は「William Lovell」である。この複裨の第一部は彼の二十一歳のとき書かれたものであるが、一七九五年に出版せられた。この書に於いて已に、後に浪漫派によつて強調された藝術的趣味が、處々に説かれてゐる。

ウィリアム・ローヴェルは巴里(テイクは當時なほこの市を見なかつた)に来て、彼の見聞する總てのものに對して、不快を感ずる(一卷、四九―五二頁)この市は殺風景な、不規律な石の堆積である。吾々は牢獄にても居るやうな感じに打たれる。……人々は終日喋舌つてゐる、然したゞの一遍でも、自分の考へてる事を言ふのぢやない。……私は退屈の餘りに、二三度劇場に行つた。悲劇は警句、澤山の長白(ながしろ)ばかりで、動作も感情をも持つてゐない。……俳優は自然から遠ざかれば遠ざかる程、愈々大いなる藝術家と考へられる。……大きな世界的に有名な巴里の樂劇場で、私は寢込んで了つた。これがこの書では英國人になつてゐる、ローヴェルの革命時代の巴

里から受けた印象である。それは佛蘭西の國民性及藝術に對する、遺傳的の獨逸人の輕侮より外のものではない。而もこの輕侮は、實見からではなく、書籍から學ばれた者であるから、いと滑稽に思はれる。「テートル・フランセ」に於いては、ローヴェルは然しかう叫んでゐる、「お、ソフクレース！及び神々しき沙翁！尙次の彼の言には、作者の特質が躍如としてゐる、私は、模作された小さな太陽(即ち理性)を以て、あらゆる奥床しい薄明を照らし、そして木の葉で蔽はれた園亭の下に、安らかに住まつてゐた、なつかしき幻影をば追ひやる人間を嫌惡する。現代には確かに、日光のやうなものはある。併し浪漫的なる夜と薄明との光りは、雲多き空の灰色の光よりも、遙かに美しいものであつた。」

これらの個々の點を除いて見ると、この書は浪漫派の文學に特有だとせられる性質の、何ものをも持つてゐないやうに思はれる。併し實際に於いてこの書ほど、浪漫的傾向を明瞭に表はしてゐる書はない。「ウィリアム・ローヴェル」はその根本觀念と書翰體とを、佛國の唯物論的の文學者なる「Fétil de la Bretonne」の小説「邪まな百姓」(「Le paysan pervers」)から借り來つたものである。吾人が一の浪漫的なる作物を、佛

蘭西の唯物論に歸着せしめることが出来るといふのは、無意味な事ではない。實にこの唯物論からして、憂鬱なる浪漫的運命論が出て來たのである。「ローヴェル」は今日においては、讀むには餘りに冗漫なる作である。形式には少しも緊張した所がなく、總ての人物は、霧中に立つてゐるやうに描かれてゐる。例へば忠實なる老僕の如き副人物は、リチャードソンの單なる模倣に過ぎない。かつこの作には劇烈なる個處もなければ、戯曲的の場面もない。その缺點と同じく獨逸的なるその美點は、心理的觀察の行き渡つて居る事である。この書の主人公は、段々因襲的道德律とか權威とかから離れて、執拗な利己主義者になるのみならず、立派な犯罪者に陥つた青年である。

テイクが青年時代に、かゝる描寫を爲したといふ事を怪むのは、當を得ないやうに考へれる。青春時代には誰でも、觀察が未だ外面に向はないので、自分自身の心情に顯れる奇異なるものに、心を集注しないであらうか。青年は絶えず自己を分解し、自己の状態を探究し、自己の意識が提出する鏡面の中に、自己を見ずにはゐられないのではなからうか。吾々の生涯の中で二十歳前後ほど、自己批評をやる時

代はあるまい。前途はなほ遠遠であつて、自己の事を省察する時間がある。彼等は、これから一生の間、彈ずべき樂器を學ぶ事で一日を消費する、そしてその弦を弾いては、それがどんな調子を出すかに耳を傾ける。無造作に自己を樂器として利用する時代は、なほ遠くにある。そして周圍の世界は未だ彼等に、任務をも滋養物をも提供しない。かくて自我は、それ自身の血を吸つて生きなければならぬ。かくして瞑想的傾向が盛んになつて、個性が分解せられ、剔抉せられるやうになるのは、避く可からざる結果である。

自己批評的瞑想が感情的感溺に變つて行く——これはこの時代の浪漫派の文學者に固有なる特徴である。個人は、因襲的に尊敬を強ひられる一切の事を、破壊したる偶然的直接的自己を、頗る眞面目に萬象の規範、一切法則の根源となさうとする。これは確かにフヒテの根本思想を歪曲したものである。こゝに參考として「ローヴェル」の中の詩と、それに續ける考察第一卷、一七八頁とを掲げる。

Willkommen erhabenster Gedanke,

Der hoch zum Gotte mich erhebt!

Die Wesen sind, weil wir sie dachten,
In trüber Ferne liegt die Welt,
Es fällt in ihre dunkeln Schachten
Ein Schimmer, den wir mit uns brachten.
Warum sie nicht in wilder Trümmern fällt?
Wir sind das Schicksal, das sie aufrecht hält!

Den bangen Ketten froh entronnen,
Geh' ich nun kühn durchs Leben hin,
Den harten Pflichten abgewonnen,
Von feigen Thoren nur erschonen.
Die Tugend ist nur, weil ich selber bin,
Ein Widerschein in meinem innern Sinn.

Was kümmern mich Gestalten, deren matten
Lichtglanz ich selbst hervorgebracht?
Mag Tugend sich und Laster gatten!
Sie sind nur Dunst und Nebelschatten!

Das Licht aus mir fällt in die finstre Nacht.
Die Tugend ist nur, weil ich sie gedacht.

よくこそ来ぬれ、われを神に高むる崇高なる思想！」
物象は吾等がそれらを考ふるが故に存するなり。世界は暗きかなたに横はる。吾等が齎せる閃光は、そのほの暗き峡間に落つ。何故にこの世界は壊たれて荒涼たる巖址とならざるか。吾等が世界を保持すればなり！」
煩はしき鎖より遁れ、歡喜を以て、臆することなく、吾等は人生を進み行く、卑怯なる愚人の發明なる、こちたき義務より離たれたる人生を。徳はわれの存するが故に存するなり。そはわが心に於ける反照に外ならず。」
その弱々しき光りを我より借りゐる形像に、なごてわれ心を煩はさむや。徳を罪とめあはさしめよ！それらはたゞ、霧の中のもの影に過ぎざるなり！暗き夜を照らす光明は、我より出づ。徳はわれがそを考へたるが故にのみ存するなり。」

「予が外部的感覺は物質界を、予が内部の心は精神界を統宰する。一切が予の放恣に屈服する。予は總ての現象、總ての行爲を、予の欲するやうに命名し得る。生物界も無生物界も、予の精神が左右する鎖にたよつてゐる。予の全生涯はたゞ一場の夢で、その夢に顯はるゝ様々の形像は、予の意志に従つて何うにもなる。予自身は全自然に於ける唯一の法則である。この法則に一切が服従する。」

フリードリッヒ・シュレーゲルは、フィヒテに對する抗論に於いて「フィヒテは未だ充分に絶對的觀念論者ではない。……予及びハルデンベルグ（ノヴォリス）の方が、觀念論者としては、より、以上である」と言つてゐるが、それより十年も以前に、未だ浪漫主義とか浪漫派とかいふ者がなかつた時に已に、テイクはこの新しき派の取るべき路を認めたと。即ち彼は個人的放恣と、この放恣を、空想の名の下に、人生及び藝術の根源として、祭り上げることを主張したのである。ローヴェルはこの傾向の大膽なる體現者である。丁扶文學に於ける、かゝる典型の完全にしてかつ最後のものなる、キアケゴールの誘惑者ヨハンネスは、ある制限の内に止つてゐる。彼は倫理法則を煩はしきものと思ひ乍ら、それを直接に攻撃する事をしない。然るに一層多方向的なる精緻ではないが、一層放膽なるローヴェルは、欺瞞でも殺害でも毒殺でも、敢えて辭せないのである。そはシルレルのフランツ・モールを加味せる、ドンホアン・ファウストの典型の一の變形である。自己考察の飽厭は、彼の場合に於いては、人間に對する限りなき輕侮と、總てのイリュージョンの忌憚なき追放とを惹起した。かくして偽善が曝露せられ、醜惡なる眞實が顯はるゝといふより外に、何等の慰藉もな

くなつた。次に掲ぐる表白第一卷、二二二頁と、其後浪漫家が提出した説との間には、いかなる深い關聯が存するかを見よ、勿論色慾は、われわれ人類の大いなる深秘である。最も純なる最も切なる戀愛すらも、この噴泉に浸ることによつて、満足せしめられる。……ひとり無顧慮と、イリュージョンの明かなる認識とのみが、われらを救済し得る。……肉感性こそは、人間といふ機械の、第一の促進力である。……肉感性と色慾とは、音樂、繪畫及び總ての藝術の精神である。……かくしてボッカチオとアリオストオとは最も大いなる詩人である。……テイチアンと放逸なるコレッヂオとは、ドミニチノ及び敬虔なるラファエルよりも拔んでゐる。予は宗教的歸依をも、要するに、複雑なる色彩を織り出す肉感的衝動の一分枝と考へる。人々は肉感性をかくも驅歌するローヴェルをば定めしその本能のまゝに、邪路に踏み迷ふ人物と想像するであらう。所がその正反對である！彼は氷の如く冷かである、彼の後身ともいふべき、キアケゴールの誘惑者の影の如く冷かである。彼は放蕩を、その血と肉とを以てするのではない、然し空想的に興奮せる頭腦を以てするのである。彼は純粹なる頭腦の人である、清純なる水によつて育てられた北部獨逸人である。

かつ彼は同時に、ある點に於いて、豫想以上に浪漫派の先例をなしてゐる。彼が言はゞ、焼き盡された時に、確信の有らゆる閃光が彼に於いて消滅した時に、而して總ての彼の感情が、虐殺せられて了つた時に、彼は深秘に遁れて行つた、そして深秘的啓示に信頼するやうになつた。彼はある年老いたる欺瞞者の爲に、迷はされたのである。かゝる傾向は、前に述べたこの小説の模型なる、佛蘭西の小説にも見出されざる、極めて獨特なものである。

ローヴェルは個性を深く省察し、剔抉すればする程、愈々それを尊重しないやうになる。個性は、それ自身に、いかなる場合に、あつても眞であると同時に、虚偽であると思はれる。個性は、自分自身に疎ましくなつた、そしてあらゆる外部の力に對すると等しく、自己に對しても信頼を拂はうとしない。個性は、自己の經驗を傍觀する。個性は、自分がある行動をする時には、役割を演じてでもゐるやうに考へる。ローヴェルはエミリー・バートンといふ少女を、何ういふ風に誘惑したかを、次のやうに物語つてゐる(第二卷、一一〇頁)。「予は急に彼女の足下に跪いて了つた、そしてこの館に予を逗留せしめたのは、たゞ彼女に對する戀に外ならないことを、彼女に告

白した。これは、なほも予を受け容れ、予の生活と運命とに、善き轉回を與へて呉れる人があるかを見るべき、最後の試みてなければならなかつた。彼女は美しくあつた、そして予は不思議なる靈感を感じつゝ、演劇に於ける如く、予の役割を演じた。予の言つた一語一語は、大出来であつた。予は情火を以て、而も少しも矯飾することなくものを言つた。それからまた次のやうな個處がある。彼女が一時家庭の幸福を失つた事は、彼女自身の所爲だ。彼女が因襲的觀念に捕はれて、多くの人々に對して羞恥を感じなければならぬのも、予が悪いのではない。予は彼女に對して、彼女は予に對して各々役割を演じたのだ。二人は大眞面目で、平凡な詩人の書いた作を演じたのだ。そして今は吾々は、時間をかくも下ならず浪費した事を悔むばかりである。かくの如く總てが遊戯であり、役割であつた。

吾々はこれらの人物に於いて已に、のちにフリードリッヒ・シュレーゲル及びゲンツ(Geats)の如き人物に於いて實現されたる性質を發見するのである、それからそれに描かれたる人物の心理に於いて、後に藝術上に移されて、浪漫家の所謂「イロニー」(Ironie)となつたものを發見するのである。この人物の性格には、生活を役割の

如くに考へしめる、露骨な自己中心主義が横はり、藝術に於いては、藝術的活動は遊戯即ち外的目的なき活動であるといふ、シルレルの根本思想の誤解及び誇張が存する。かくして眞の藝術は、絶えず藝術自身の建設したものを破壊するもの、イリジョンを不可能になすもの、テイクの喜劇に於けるが如く、自己嘲弄に終るもの、あるといふやうに考へられて來た。主人公の行爲の方法と、戯曲家が喜劇を書く時の態度とは、極めて密接なる類似を持つやうになつた。即ち兩者は、共に「イロニ」を以てなされるのである。すべてが自己中心主義と非現實とに歸せられるのである。

「ローヴェル」に於いて描かれたる心理状態を充分理解せむが爲には、吾々はその究竟的結果を見る許りでは足りない。吾人は進んで、ルネの場合に於けるが如く（移民文學「ルネ」の條参照）、その心理状態がいかにして生起し、いかにして發展したかを觀察しなければならぬ。そは、その時代に醜酔した放恣、無法則の精神によつて、影響せられたものである。かくして種々の作家が、同様なる典型を形成した。生活飽滿の巨人^{テイク}として、ローヴェルは、巨人族に屬するものである。

ジャン・パウル (Jean Paul) は、テイクよりは十歳の年長者で、シルレルよりは四歳の年少者であるが、「ローヴェル」が考案された二年前に、彼の「ファウスト族」(「Fausindler」)及び「巨人」に於いて、かゝる典型を描き始めた。ジャン・パウルは多くの點に於いて、浪漫派の先驅者である。浪漫家のうちで、テイクがゲーテを模倣したやうに、ホッフマンが彼を模倣した。彼は、創作の際に於ける不羈奔放の態度に於いて、純然たる浪漫家である。アウエルバハ (Auerbach) の言ふが如く、彼は「人物情調、性格、心理的葛藤及び種々の形像を豫め用意して居つて、それを任意に連絡し、或は與へられたる人物及び情景に移入するのである。」彼は、いかなる放縱なる着想をも、彼の物語の伸縮自在なる匡の中に押し込んだ。彼は更に、その極端なる自己發揮に於いて、浪漫家である。即ち彼は、彼の描ける人物の口を藉りて、常に自己を語るのである。彼は更に總ての作を貫ける、藝術的形式にも無頓着なる諧謔に於いて、終りに古典的修養の極端なる反對者である點に於いて、浪漫家を發揮してゐる。乍併、彼は藝術に於いては何であらうとも、實生活に於いては、單純なる放恣の人ではなかつた、これに反して眞の自由の唱道者であり、その熱烈なる感激に於いては、フイヒテにも比す

べき人であつた。彼は啓蒙思潮をも、宗教改革をも、革命をも非認しなかつた。彼は十八世紀の生みなした思想の、歴史的價值及び充分なる妥當性に對して、確信を持つて居つた。かくして彼は、浪漫家の空疎なる、かつ道德を撥無する空想に對して、警戒を與へずにはゐられなかつた。

「巨人」に於いて、吾人はジャン・パウルの理想人物中の最も力ある人物、Fouquierolを見する。彼は一體、諸種の人物を寫實的に描寫する點に於いて優れてゐたが、理想的人物をも描いたのである。ロクアイロルは、同時代の情熱と絶望とを體現した人物の前型である。彼は熱烈なる深く意識せられたる、欲望その者である。而してその欲望は極端なる空想に變化する。何者、それは境遇に無頓着であると共に、現實を保持し、それを統御し若しくは變化せしめる能力を持つてゐないからである。かくしてその欲望は、内面に轉回して、自己蔑視及び自殺を惹起せしめる病氣となつた。ロクアイロルはある書翰に於いて自己を叙述してゐる「巨人」。第三卷、第八章、予が予の假面を脱ぐ時に予を注意せよ。予の顔は、毒を嚙んだ人の顔のやうに瘰癧してゐる。予は實際毒を嚙んだ、毒を仕込んだ球、地球といふ球をも嚙下した。

予は、空想的情火によつて空洞になされ、炭となされた木だ。憤怒、歡喜、戀愛などといふ蟲が、自我の腹中に這ひ出して噛み合ひを殆めると、予は自我の高みから彼等を瞰下する。そして彼等を水蟻か何ぞのやうに切斷したり、逆さにしたり、結びつけたりする。然る時、予はその瞰下する自我を、更に瞰下する。そしてそれを無限にやつてゐたら、何うだらう？ 何の効もありやしない。世間の人間が普通の理想主義、信仰の理想主義を持つるならば、予は心情の理想主義を持つてゐる。これは舞臺に於いて、著述に於いて、或は實人生に於いて、有らゆる感情を屢々體驗した人々に特有なるものである。然しそれが何の役に立つのだらうか。……予は屢々山や河や地面を眺めて、それらのものは、予自身も共に、今にも分解し、消滅し、しないかといふやうな、感じに打たれる事がある。……人間には一切に風馬牛なる、徳をも何とも思はない、冷かなる、大膽なる精神が存する。何者、彼は徳を意の儘に選び得る、即ち彼が徳の創造者であつて、徳によつて創造された者ではないからである。予は嘗て大洋において、暴風雨に遭遇した事がある。その時、海水は荒れ狂ひ、泡立ち、底深く分裂した。かくこそ有りたけれ！ 心情は暴風雨で、自我は天空

である。……汝は總ての事を、神聖なる事をも、人界の事をも、屢々物真似したる小説、悲劇の作者、特に彼等の中の天才が、予と違つたものであると信ずるか。彼等及び其他の世間の人間を、事實支持してゐるものは、黄金と賞讃とに對する彼等の飢餓である。……猿は畜生中の天才である、そして天才は、彼等の美的な物真似、無情意地惡るさ、嗤笑、性欲及び、戯談好きに於いて猿である。彼は、倦怠の情に驅られて、彼の友人の姉妹を誘惑した巔末を物語つてゐる、予は何物をも失はなかつた。予の心には、無邪な點は少しもないからだ。予は何物をも得なかつた。何者、予は肉慾を嫌惡するからである。或人が悔いと稱する黒い影が、幻燈の色さま／＼の晝の消えゆくなべに、廣くたゞよつた。然し黒色は、青や赤や紫よりも、眼に惡るいといふことがあらうか。

ジャン・パウルの浩瀚なる四卷の複裨から、これらの短い引用文だけでも注意して讀む人は、こゝにもまた人生及び藝術の間に、一つの連結線が引かれてゐる事を認め得るだらう。ロクアイロルが、創作する藝術家の性情を、自己の性情の象徴と見做してゐる所は、不用意のうち深い興味がある。而して、空想的情火から空洞に

されたとか、心情の理想主義「予が主觀主義」と命名したのと同じものとかいふ表現は、科學的定義でゝもあるかのやうに、精確明快である。ロクアイロルは彼の最後のいとも恐ろしき犯罪を行つたあとで、アルバノの如く装つて、アルバノの戀人のリンドを夜において訪れ、それから舞臺に出て、終ひに、自殺をする役割を演じながら、實際短銃を以て自殺するのである。かくの如く彼は、最後の斷末魔までも、假象と遊戯との世界に生きてゐる、そして現實と空想とを變換せしめ、或は交錯せしめてゐる。

現實を空想的或は詩的に形成するといふ事が、その次の時代の流行とはならなかつたらうか。それこそは、その時代の文學者が、彼等の製作に於いて、解かむと欲した問題であつた。この解釋に對する努力を了解すれば、例へばシュレーゲルの「ルチンデ」に於いて見出される如き、現實の變改に對する計畫の爲に生ずる、迷惑昏亂も、明かにされるであらう。詩と人生との關係と云ふ大いなる問題、兩者の深き、不愉快なる不調和に對する絶望、その妥協に對する小止みなき努力、これらが魔興勃起時代から浪漫派の最後までの、全獨逸文學の背景に横はつてゐるものである。

かくして「ローヴェル」ならびに「ルチンデ」を理解する爲には、吾人は回顧する必要がある。吾人は兩者を、ジャンバウルの「巨人」によつて、より善く理解し得る。ローヴェルの先驅は巨人ロクアイロルで、ルチンデのそれは女巨人ディグニヤなるリンデである。

五

浪漫家の社會的努力

シュレーゲルの「ルチンデ」

一八〇一年、イエーナ大學に於いて、ある青年が「ドクトル」候補者として、講壇に立つた。人々は彼に嘲罵のあらむ限りを浴びせた。かつこれまでにない事であるが、彼に對する抗論者が現れ出た。この中の一人、而も凡庸なる青年は彼を痛罵して自らの名を成さむものと思ひ、「*In tractatu tuo erotico Invidiā dixisti etc, etc.*」(君の色情的な「ルチンデ」に就いての論文に於いて、君はかう言つた、云々とやり出した。これに對してかのドクトル候補者は、冷かに、自分は今の抗論者を愚人と呼ぶとやり返した。それで非常な騷擾が始まつた。教授の一人は憤然として、この哲學の講堂がかゝる騷擾に依つて潰されたことは、三十年このかたないことだと言つた。これに對してドクトル候補者は、三十年このかた、何人も予の如き取扱ひを受けたも

のはあるまいと答へた。この候補者こそは、フリードリッヒ・シュレーゲルであつた。彼は當時、彼の恐ろしい言説の爲に、一夜を過ごすために一都市に入ることすら禁じられたくらゐ、世間の恐怖の標的となつてゐた。一八〇〇年九月二十六日の、ゲッテンゲンの副市長に宛てられたる、ハンノーフェルの大學管理部からの命令書には、かう書いてある、教授の弟、フリードリッヒ・シュレーゲルは風俗壞亂の恐れある著述によつて知られたる者なるが、彼がもし暫く逗留の目的を以て市に入り込むことあらば、堅くそれを禁止してゲッテンゲンを去るべきことを、彼に命令すべし。

これは可なり過酷な審判である——而して總てのこれらの騒ぎは、ルチンデのために惹き起こされたのだ！

「ルチンデ」を浪漫家の主要なる著作の一つとなす所以のものは、その詩的の力でもない。何者、この書には、肉の感覺が大いに力説されてあるけれども、吾人はそこに肉をも血をも、眞實の肉體をも認めないからであらう。それは更に思想の深遠でもない。何者、この自負に満ちたる作よりも、ショーペンハウエルが「戀愛の形而上學」の題目の下に書いた、バラドックスな小論文の方が、より多くの哲理を含んでゐる

からである。それは更に、天才的な陶酔的な生に對する歡喜でもない。何者、この書を南方的の生の喜びに満ちたるハインゼ（英譯にハイネとしてある。譯者。）の「アルディンゲロー」(Ardinghello)と比較するとき、吾人は前者がいかに貧血的にしてかつ理論的であるかを認め得るからである。

乍併、この書は主義宣傳書として、價値を有するものである。この書の主要想念は、人生の統一及び調和を唱道する點に存する。而してその統一及び調和は、精神的感情に官能的表現を與へ、かつその反對に官能的快樂を精神的にする熱烈なる戀愛に於いて、最も明白に啓示されるのである。この書が説かむとするところは、實人生を詩に、藝術に、シルレルの所謂力の遊戯に、夢想的な憧憬の喜びに満ちたる生活に變化せしめることである。而してかゝる生活においては人間は、いかなる目的をも有せず、また目的に従つて行動もしない、然し自然の深秘に導き入れられる、そして「ナハチガルの悲嘆をも、赤兒の微笑をも、また深秘な象形文字なる、星や花に啓示されたる深い意味をも理解し得る。」

この書は、キアケゴールの如く、教義的立脚地から、この書の目的とする處は、精神

的要素を全く排拒する露骨なる肉感である。この書の反対せむとする所は、肉感的要素を含蓄せる精神的なるものであると絶叫する人々には、到底理解せられない。かゝる議論を主唱するのは、いかに説者の盲目を示してゐる事であらう。尤も正統的信仰ほど、人の眼を眩ますに適したものはない。それからこの書に於いてグツコウ (Gutzkow) のやうに自由戀愛の是認を認める人々、或はシュライエルマッヒェルのやうな、無形體なる精神に對する反抗と、血及び肉を否定する矯飾的態度の排拒とを認める人々にも、この書は理解され得ない。この書の根本思想は、實に人生と詩との同一性を主張する、浪漫的傾向に外ならない。而してこの眞摯なる思想は、明かに世上の物議を醸す事を目的としたやうな形式において、表白されてゐるのである。元よりこの作に表はされてゐる大膽な、反抗的な、挑戦的な調子と、有らゆる攻撃、嘲罵、誹毀をも覺悟せる著者の勇氣とは、大いに嘆賞に價ひしてゐる。かつこの小なる小説の中に、浪漫派の總ての見解と標語とを集め來つた、作者の手腕も、凡手の企及し得ない處である。吾人はこの一卷に於いて、同派の多くの文學者によつてそれ／＼代表せられた、多くの傾向を、容易に發見する事が出来る。然し

小説と言はうよりも寧ろスケッチとでもいふべき、この書の藝術的無氣力を見ては、吾人は甚しき失望を感ずる。そこには色々の事が持ち出されるが、それは要するに不得要領に終つてゐる。かつ弱々しい自己崇拜が、全篇に滿ち渡つてゐる。その自己は、腐卵を孵化せしめむが爲に、不自然な不健全な熱を起すことによつて、その貧弱を隠蔽しようとしてゐるのである。カロリーネ・シュレーゲルはこの書が現れた時に、次のやうな辛辣な短詩を書いた。

Der Pedantismus hat die Phantasie

Um einen Kuß ; sie wies ihn an die Sünde ;

Erech, ohne Kraft, umarmt er die,

Und sie genas von einem toten Kinde,

Genannt Incubide.

街學主義が空想に接吻を願つた。空想は彼に罪へ行けと命じた。厚かましくも、然し力なく彼は罪を抱いた。すると罪はルチンデといふ彼の死兒を生んだ。

こゝには不適當な罪といふ言葉を除けば——何者、ルチンデはたゞ善良なる趣味と、眞正なる詩とに對して、罪を犯してゐる許りであるから——予はこの苛辣な

る諷刺に全然同意する者である。

「ルチンデ」の根柢に横はるものは、主観主義である。革命、破廉恥、獨斷論、反動等ありとあらゆるものに發展しうべき、放恣なる自己中心主義である。何故にそは反動的傾向を持つてるかといふに、この自我は、徹底徹尾何等の力にも結び付いてゐない、この自我は、その努力に根柢と價值とを與へる何等かの觀念の爲に、即ち進歩のためにも、自由のためにも活動しないからである。この放恣は、藝術の範圍に於いては、フリードリッヒ・シレーゲルによつて發明された「イロニー」即ち題材に對する作家の不決定なる態度と、題材に對する自由なる戯れとなり、詩の方面に於いては、絶えず自分自身の内容を戯弄し、自分自身の「イロニー」を破壊する、純粹形式の尊重となる。またこの放恣は、實生活に於いては、天才ある少數者、精神的貴族の性格及び生活に特有なる「イロニー」となる。この「イロニー」は、それに對する官能を有せざる「俗人」に對する、一つの謎である。この「イロニー」は、無拘束の中の最も自由なるものである。何者、その力に依つて人々は、彼等自身を自己以外に置き換へ得るからである。ところが「イロニー」は夥しく法則に制縛された者である。それは浪漫家

に言はせれば、對絶的にして必然的なものだからである。この「イロニー」はまた小さき調和に安住せる所謂調和的な俗人輩に理解せられざる自己嘲弄である。何者、これらの俗人は、浪漫家の眞面目を戯談と考へ、戯談を眞面目と考へてゐるからである。

かくしてこの「イロニー」は、矢張貴族的に「世間」から誤解されることを目的とせる「キアケゴール」の所謂「イロニー」と、單に名稱だけではなく、近似してゐるのである。天才的自我の直接性、主観性^{サブイェクティヴナート}は眞理である。そは、キアケゴールが吾人に理解せしめようとした意味でなくとも、而も尙、主観は外面的に妥當なる一切の規定を掌中に握つてゐて、世人の驚嘆と凌辱とをものともせず、常に「バラドックス」の形式に於いて、自己を表現するといふ意味に於いてである。「イロニー」は「神聖なる厚顔」^{ゴットライヒエラウレヒ}である。かく解釋せられたる厚顔は、無限の可能性を把持してゐる。それは、偏見から自由になることである。而もそれは、純形式的ではあるが、あらゆる偏見の最も厚顔なる主張にある可能を與へてゐる。それは、「ルチンデ」に據れば、男子よりも女子によつて容易に到達される。「女の衣服が男のそれよりも勝つてゐるやうに、女の

精神も男のそれに對して、かういふ特長をもつてゐる。即ち女といふものは、大膽にして獨特なる綜合力によつて、文明及び世俗的因襲を擺脫し得る、そして一躍して無邪氣の状態と自然の胎内とに入ることが出来るのである。自然の胎！吾人はルソアの聲を、再びこの放肆な文句のうちに、聴くのである。それは革命の喇叭のやうに響く、然し實際においては、反動の鐘が鳴らされたに過ぎない。ルソアは、人々が裸體で原生林の中をさ迷ひ、櫛の實を食べてゐた自然状態に復歸せむことを主唱した。シェリングは人類の未だ墮落しなかつた太古に、發展を引き戻さうと欲した。シェレーゲルは大いなる浪漫的な魔術角笛で、革命的な調子を吹き鳴らした。然し、*Des Knaben Wunderhorn* (獨逸民謠集)に於ける、獵師が角笛を吹いた——そしてその音は風のまに／＼消え失せたといふ歌のやうに。

その結果は、精神的解放ではなく、たゞ享樂の纖細化に過ぎなかつた。一切が、色慾すらも、藝術の領土に移された。浪漫派の詩は、詩の自乗、即ち詩についての詩、纖細化された詩であるやうに、浪漫家の戀愛は、纖細化された戀愛、戀愛藝術である。高尚なる肉感性の種々の程度が、ルチンデに於いて記載せられ、一つの系統に編み

込まれてゐる。この書は、アルディングゲローに於けるが如く、豊婉なる描寫をもつてゐないが、しかし枯淡なる術學的なる理論を與へてゐる。それでこの理論の空疎なる枠匡を満たすことは、讀者の經驗及び空想に一任されてある。更に厚顏の一面は、懶惰である、天才的懶惰である。懶惰は無邪氣と靈感との生活雰圍氣と名づけられてゐる。その極度は、植物の如く成長することである。「最高の完全なる生活は、純粹なる植物的成長より外の何者でもない。」植物は、自然の總ての形式のうちにて最善最美の者と思はれた。浪漫家は植物に化すといふ目的を以て、自然に歸つた。永久に繼續する瞬間を、植物の如く受動的に享樂することが、彼等の理想であつたのだらう。ユリウスはルチンデに、私は永久的抱擁の可能性について、眞面目に考へたといつてゐる。さて、苦しい努力などを要しない天才性と、それ自身に於いて幸福である色慾とは、目的とか行爲とか功利とかを、少しも眼中に置いてゐない。かくして所謂 *dolce far niente* (たのしき無爲) は人生の最頂點となる。而して意味ある行爲をなさうといふ目的は、笑ふ可きかつ俗人的の事として侮蔑せられる。この問題に關して、ルチンデの作者は、かう言つてゐる、勤勉と功利とは、樂

園へ歸ることを人間に禁ずる、燃えたる劍を持つてゐる、死の天使である。然り確かにそれは死の天使である！勤勉と功利とは、吾々の背後に横はれる總ての樂園への歸路を塞いでゐるものだ。それでこそ、その二つのものは吾々に神聖なのだ！功利は善の主要形式の一つである、而して勤勉とは、放逸なる享樂の斷念、善を實行し成就すべき情熱及び力てなくして何であらう！

完全への復歸は、藝術に於いては、天才の不羈奔放への復歸である、彼がある一つの事と、それとは全く正反對の事を行つて、差支へない境地へ復歸することである。それは實人生に於いては、懶惰への復歸である。何者懶惰なる者はあと戻りする、受動的享樂へあと戻りするからである。哲學に於いては、それは直觀的信仰への復歸である。その信仰はシュレーゲルによつて更に宗教になされた、而してその宗教は更に加特力教へ、あと戻りするものである。自然及び歴史に關しては、それは太古の樂園的狀態へのあと戻りである（*Diego* 全集。第一卷、三二八頁以下參照）。かくして、狂魔的の「ルチンデ」ですら浪漫家の總ての狂魔の如く、寸毫の實際的効果を齎さなかつたことは、浪漫派の根本想念、即ち「あと戻り」といふことに起因してゐるの

である。「今や吾等をして根本的に惡を芟除せしめよ」と、イブセンは歌つてゐる。

予は寧ろ穩かにかつ冷かにかう言はう、吾人をして以上の問題を更に新しき形式に包容せしめ、彼等とは異なる方法に於いて處置せしめよ。吾人は決してあと戻りはしない、しかし斷乎として前進する！」

浪漫派の無目的

吾人は、ルチンデに於いて、その後浪漫派の歴史に於いて發展せられ、例證せられたすべての理論を、言はゞ造作もなく發見し得る。キアケゴールの“Enten-Eller”に於ける美的觀照家の變化活動（エンタエンエッラ）に關する論文のやうな一論文に、懶惰が組織化されてゐる、決してある職業を持つこと勿れ。さうすると、人は群衆の一人になる、國家といふ機械の中の微小なる栓になる、人々は事務監督にすらなれなくなる。尤も、たとへ吾人は定職業から離れても、無活動になつてはならない、然し懶惰と同一義である總ての活動に重きを置かなければいけない。……放恣において、總ての深秘が籠もつてゐる。吾人は放逸に行動する上に、何等の術も要しなと思ひがちである。ところがその際少しも迷ふことなしに、それを享樂し得るのは、非常な努力が要るのである。

懶惰、放恣、享樂！これこそは、浪漫家の野原に到る處に見出さるゝ、三葉の首着である。アイヒェンドルフの「なまけもの」（タウゲニヒツ）の如き小説において、懶惰は主人公の人物において、理想化せられ讚美せられてゐる。それから無目的といふことは、この場合見通すことの出来ない、主要なる要素である。無目的とは、言ひ換へれば浪漫的天才性である。ユリウスはルチンデにかう言つてゐる、目的を持つたり、目的に従つて行動したり、目的と目的とを技巧的に結合せしめて、更に新しい目的を作つたりすることは、神に似た人間の、愚かな性質に深く根ざしてゐる悪い習慣なのだ。この習慣は、彼が何うかして何の目的もなく、永久に流動する影像と感情との奔流に自由に動きたいと思ふ時でも、ある定まつた目的を置かずにはゐられなくなるほど、深く人間の性質にこびりついてゐるのだ。……これは確かな事だ、人間は生れながら眞面目な動物なのだ。

この見解に關して、正統的基督教徒たるキアケゴールすら、かう言つてゐる、シュレィゲルを非認しない爲には、吾人は、さまざまの生活境遇に忍び込んで來た、多くの轉倒的傾向を想ひ起こす事を要する。この傾向たるや、戀愛をば、家畜か何ぞのや

うに人馴れた、よく藝を教へ込まれた、怠慢な、かつ有益なものにしようとする、即ち出来るだけ非色情的にし、ようとする者である。……世間には極めて偏狭な道徳と、便宜主義と、無意義な目的論とがある。これらを多くの人々は、偶像のやうに禮拜する。而してこの偶像は無限の努力を、自己の正當に得べき犠牲として要求するのである。戀愛はかくしてそれ自身に於いては無と考へられてゐる。然しそれが家庭といふ舞臺で演ぜられる尋常茶飯劇に役立つと云ふ譯で、始めてあるものと認められて来るのだ。この人馴れた、怠慢な、かつ有益な家畜的戀愛といふ言葉は、當時に於いては確かに古風な女性の故郷であつた獨逸に、最もよく當て筈と推論しても差支へあるまい。ティルクはその喜劇に於いて折々、如上の傾向に對する諷刺を書いてゐる。彼の「一寸法師」(„Däumling“)に於いては、一人の夫は、自分の妻が絶えず編物ばかりやつてゐるので、それが始終氣になつて仕方がないと嘆じてゐる。この悲嘆は恐らく、獨逸に於いてのみ眞に理解され得るものかも知れない。何者、今日に於いても獨逸の婦人は、公會の席などへも、編物を持つて出かけてゆくからである。その喜劇におけるゼムメルナーゲ氏は、その妻が音樂會へ行つても、

一生懸命に編物をやつてゐるのに業を費やし、夜寝てからも床の中で編物をやつてゐるのに驚いてゐる。後の條は讀者をして、ゲーテの「羅馬哀歌」に於ける、主人公が夜の床に於いて戀人の脊を指して軽く打ち乍ら—— „leise mit fingernder Hand“ —— 六脚韻詩の拍子をとるところを想起せしめる、或はその換意かも知れない。

「有益」の尊重が、かくまで極端であることを見るとき、吾人は、無目的の辯護をば、是認し得ないでもない。

乍併、無目的は懶惰と離る可からざるものである。こんな事が言はれてゐる、たゞ伊太利人のみが歩行することを知つてゐる、そしてたゞ東洋人のみが横になることを知つてゐる。それでいづこの國において、精神が印度におけるよりも、より微妙に、より繊細に發達したであらうか。而して何處の地帯においても、高貴と卑俗とを區別するものは、懶惰である。これこそは貴族の根本要素である。

この最後の斷言は元より無法である。然しこの禮節蔑視は浪漫派の特徴を物語つてゐる者である。彼等は群衆に對して常にこの態度を以てするのである。無爲に對する手段を所有する事が、彼等に取つては、眞の叙爵書なのである。生活の

たつきを求めず、他人から扶養されてゐる人、即ちフリーケイやインゲマンの小説に
おける王及び騎士、ノヴァリスやテイクの作に於ける美術家及び詩人が、彼等の尊
崇する人物である。浪漫家は群衆より隔離し、彼等の爲に何事をなすことをも欲
しない、たゞ自ら選ばれたる少数者をのみ眼中に置いてゐる。ルチンデに於ける主
人公及び女主人公は、天才的藝術家及び天才的の女である。こゝに讚美されてゐ
るのは、普通の結婚ではなくして、たゞ二人の間の自然結婚或は藝術結婚である。
ユリウスは彼の戀人に、彼女の子供がもし娘であつたなら、肖像畫家にしようか、風
景畫家にしようかと問うてゐる。即ちこの兩親は、美術家仲間の一部員と見做し
て、彼等の子供に興味をもち得る丈けなのである。たゞ文學者と美術家とが、人生
の詩に對して關與し得るのである。

かくていかにして、ルチンデが、何等の社會的効果を與へ得なかつたか、容易に
了解され得やう。然し、この書は何等實際的の萌芽をも有せず、かつある一種の改
革を惹き起すは餘りに力弱きものであつたにも拘らず、この書の根柢には、ある實
際的傾向が横はつてゐるのである。

吾人をして先づこの書に於ける人物を、次に彼等に適應する實際の人物を檢覈
せしめよ。

この書の主要人物の背景となつてゐるものは、散文的なる現實及び因襲的なる
社會に對する烈しい輕蔑である。この書は、恥づるところもなく、色情に關する理
論を説いてゐる、そして自己の純潔さに依つて、群衆の批判を超絶してゐると思つ
てゐる。「群鳥の鳴き聲を輕蔑し得るのは、ひとり王の如き驚ばかりではない。白
鳥もまた高い矜持をもつてゐる、そしてそんな鳴き聲を氣にも留めない。白鳥は、
たゞその白き羽翼が、純白を失はざらむことをのみ氣遣つてゐる。この鳥の唯一
の願望は、翼を汚すことなしに Ieda の膝に寄り添ふことである、かつ自分の果敢な
い生命を、歌の中に吐き盡すことである。」

この畫圖は、優美にしてかつ奔放たる趣きを持つてゐる。然しそれは眞實の畫
圖であらうか。レダと白鳥の物語(ユピテル神は白鳥の姿をなして、美しき)は、昔から
いろ／＼に取扱はれるものだ。

ユリウスは厭世的 (zerrissener) な青年である、そして美術家である、彼は青年時代

に已に骨牌戯^{フアラ}をいかにも熱心相にやり乍ら、而も茫然自失の境にゐる事が出来た。彼はある瞬間には情熱を以て何事をも敢行し、而してこの事が旨く行かないと、直ちに冷然としてそれを放棄する事が出来た。(これはフローベルの所謂「感傷的教育」Education sentimentale」といふやうな事を論じた「Lehrjahre der Männlichkeit」の條にある言葉だ。)かゝる性癖は、決して吾々の嘆美を誘ふものではないが、而も強烈なる行爲衝動もなく、たゞ放肆なる、絶望的な懶惰において興奮を求め、享樂に飢えたる、糜爛せる人物を可なりよく表してゐる。彼の過去の歴史は、女に對する關係で満たされてゐる。そこへ出てくる女は、寫生帳における鉛筆畫のやうに、簡略にスケッチされてゐる。たゞ一人の女の事は、稍詳しく書かれてある。それは東洋的懶惰の生活に沈める椿姫娼婦の姿である。彼女は眞實なる愛情に依つてその周圍から超脱したが、而も自分は少しも理解されず、或は信用されないのて死んで了ふのである。彼女は自殺に依つて華かに、この人生の舞臺を去る。そして假粧室の中に大きな鏡に圍まれ、手を膝に置いたまゝ、死んでゐる彼女の姿は、浪漫主義の極致なる美的喪神と、自己喪失と、自己觀照とを、さながらに示してゐるやうに

思はれる。

ユリウスは、かくいづれも不快であつた色情的經驗を通過した後、遂に彼の女性の好對手、ルチンデを見出した。彼女の印象は、彼から何うしても消えなかつた。彼は、彼女に於いて言ふまでもなく、若い閨秀美術家を見出した。彼女は美を、彼と等しく情熱的に崇拜した、そして孤獨と自然とを、彼と同じやうに愛するやうに見えた。彼女の風景畫を見れば、誰でも眞の空氣の活々とした呼吸を感じた。：彼女は繪畫を職業或は技術として書きはしなかつた(無目的及び功利反對!)、然したゞ氣の向くまゝに、樂みのために(享樂主義及び「イロニー」)。彼女が折に觸れ、興にそゝられて書くのは、たゞ水彩畫であつた。油畫を學ぶ丈の忍耐と勤勉とを、彼女は持つてゐなかつた(勤勉反對!)。：ルチンデは截然たる浪漫的傾向を持つて居つた(いふまでもない!)、彼女は浪漫主義の體現である!。また彼女は、普通平凡の世界に生活せず、自分で創造した世界に生活して居る人間の一人であつた。：：また彼女は、斷乎として一切の因襲、一切の制縛から離脱した、そして全く自由に獨立的に生きて居つた。ユリウスが彼女と知つた瞬間から、彼の藝術もま

た、一層の情熱と心靈とを得て來た。彼は、靈氣ある光りの流れに立てる裸體を描いた。而してその裸形は、人間の姿をなせる生ある植物のやうに見えた。

ユリウスとルチンデとの生活は、輕やかに音樂的に、不斷の憧憬の満足に於いて、美しい歌曲のやうに流れて行つた。動作は言はゞ、小寢室の側に畫架の立つてゐる畫室で、演じられてゐる。ルチンデは母となる、かくして二人は自然結婚をなしたのである。「以前に吾々を結合してゐたものはだゞ愛と情熱とであつた。今や自然が二人を、より密接に結合した。」子供の出生によつて兩親は、自然の國に於ける市民權(恐らくルソーの謂はゆる)即ち彼等の尊重し得た唯一のものを得た。浪漫家はキアケゴールの主人公の如く、社會的及び政治的權利に對して無頓着である。その主人公は、吾々は吾々が自由であり得るために、國を支配する人がゐるのを喜ばねばならぬと言つてゐる。

七

「ルチンデ」に相應する現實

この不明確なる作物の背後には、併し、遙かに明快なる輪廓を有せる現實が横はつてゐた。主人公の青春時代は、フリードリッヒ・シュレーゲルの書翰が證示してゐるやうに、著者のそれと可なり精確に一致して居つた。伯林は當時は未だ虔信的ではなかつた、然し、その時代に書かれた物に従へば、人が一度足を踏み入れれば必ず罰せられる、ヴェーヌス山であつた。國君の模範によつて、風俗習慣に於ける總ての放縱も聖化せられた。美術及び文學に對する渴仰が、少し以前まで非常に優勢であつた官定的道徳を排斥するに至つた。人々はその道徳を棄却せむ事を努めた。一七九九年即ち、ルチンデの現れた年の秋に、フリードリッヒ・シュレーゲルはシュライテル、マッピヒェルに慫慂書いてゐる、こゝの人々は、非常に過激な放肆な行動をやつた。かくしてシェリングは無宗教に對する彼の從來の熱情を、更に新たに刺激せられた。

予は全力を以て、彼がこの熱情を保持することを助けてゐたのである。かくして彼はハンス・ザックスとゲーテとの詩風において、快樂主義的の信仰告白を書き綴つた。「この詩は即ち、Widerpost」（「反抗者」——Pille著「シェリング傳」。第一卷、二八二頁）参照であつた。

Kann es fürwahr nicht länger ertragen.
Muß wieder einmal um mich schlagen,
Wieder mich rühren mit allen Sinnen,
So mir dachten zu entinnen
Von den hohen, überkirchlichen Lehren,
Dazu sie mich wollten mit Gewalt bekehren.
Darrur, so will auch ich bekennen,
Wie ich in mir es fühle brennen,
Wie mir's in allen Adern schwillt,
Mein Wort so viel wie anderes gilt.
Da ich in bö's und guten Stunden,
Mich habe gar trefflich befunden,
Seit ich gekommen ins Klare,

Die Materie sei das einzig Wahre,
Halte nichts vom Unsichtbaren,
Halt' mich allein am Offenbaren,
Was ich kann riechen, schmecken, fühlen,
Mit allen Sinnen drinnen wühlen,
Mein' einzig' Religion ist die,
Daß ich liebe ein schönes Knie,
Volle Brust und schlanke Hüften,
Dazu Blumen mit süßen Düften,
Aller Lust volle Nahrung.
Aller Liebe süße^z Gewährung.
Drum soll's eine Religion noch geben
(Ob ich gleich kann ohne solche leben),
Könnte mir vor den andern allen
Nur die katholische gefallen,
Wie sie war in den alten Zeiten,
Da es gab weder Zanken noch Streiten,
Waren alle ein Mus und Kuchen,

Thakten's nicht in der Ferne suchen,
Thakten nicht nach dem Himmel gaffen,
Hatten von Gott nen lebend'gen Affen,
Hielten die Erde für's Centrum der Welt,
Zum Centrum der Erde Rom bestellt,
Darin der Statthalter residirt
Und der Welttheile Scepter führt,
Und lebten die Laien und die Pfaffen,
Zusammen wie im Land der Schlaraffen,
Dazu sie im hohen Himmelsbaus,
Selber leben in Saus und Braus.
War ein täglich Hochzeitbanen
Zwischen der Jungfrau und dem Alten.

「予はほんとにもう忍んでゐられない、予は再び生きなければならぬ、予の官能を自由に遊ばせなければならぬ。それらの官能をば予は無理にも予を改宗せしめやうとした、高尚な超世間的な定理の爲にも、少しで棄てる所であつたのだ。かくして予も予の心の中に感ずるがまゝに、總ての血管に血が漲るがまゝに告白しよう。予の言葉は他の人の言葉と同じやうに、取られなければならぬ。快活な日に於いても、いぶせき時において

も、予は快活であつた、物質の外に眞なるものなしと、明かに認めた以來は。予は不可見の者を信じない、併し嗅ぎ、味ひ、觸れ得るものあたりのものをのみ信ずる。予の唯一つの宗教はかういふものである。即ち予は美しき膝、ふくよかな胸、弱かな腰、香もなつかしき千草の花、あらゆる快慾の満足、甘き愛の享受を愛するのだ。かくて予が宗教を持たねばならぬなら、予はそんなものがなくても生きられるけれども、總ての宗教のうちで一番昔の加特力教が予に氣に入つてゐる。その時代には争論も喧嘩もなかつた。總てが菓子か何ぞのやうに取扱はれた。人々は自分等に遠いものを求めもせず、天國を羨ましげに仰ぎみもしなかつた。彼等は神の活々とした畫像をもつてゐた、そして地球を宇宙の中心と考へ、地球の中心を羅馬にした。そこには偉い代官が住んでゐて、世界の笏を握つてゐた。そして僧侶も俗人も極樂郷にでもゐるやうに仲よく暮してゐた。そして崇嚴な神の家にて、彼等は饗宴を催した。處女と神との間に、毎日結婚が行はれた。」

かゝる人の手に成れるかゝる詩は、時代精神の眞實なる證券である。而してヴィルヘルム・シュレーゲルはゲーテの忠言に依つて、この詩を「*Athenäum*」(兩シュレーゲルアテネウムによつて發刊された浪漫派の)に掲載することを反對したのに、この衝に當れるノヴァーリスはかう言つてゐる、何うして「*der Widerpost*」が印刷されてはならないのか、予はよく理解出來ない。これは無神論であると云ふ理由なのか。然し希臘の神々(シルレの詩)。

譯)の事を考へて見るが宜し。

當時の流行は革命的であつた。胸部はいたく露出せられ、衣服は東洋流の寛かなものであつた。傑出せる若き婦人連の調子は最も自由であつた。當時にあつて若き Kranke Pauline Wiesel Kranke ほど容姿の美を賞讃されたものはない。彼女はある學識優れたる唯物論者の妻であつた。この學者の懷疑論と皮肉な機智とは、若きタイクに深いかつ激しい印象を與へたものである。彼の描ける Abdallah Abdallah と Roger Roger とは、この學者をモデルとした者だ。而して彼女は元氣なルイ・フルディナンド皇子の多くの戀人の中の一人であつた。彼は彼女に對しては眞の熱情をもつて居つた。そのことは彼の書翰から認められる。この時代のある人は彼女に就いて、予は彼女を全く希臘神話中の現象として眺めると言つてゐる。アレキサンデル・フォン・ムボルトの如きは、彼女を見むが爲に、十二哩の路を徒歩で行つた位である。而してその時代の精神を明かに示してゐる事は、この婦人の結びたる色々の關係が、彼女の才媛仲間の中に於いてすら、少しも非難されなかつたといふことである。徳操比ひな Rahel Rahel (富裕なる猶太人 Levin Levin・マルカスの妻となる 譯者 譯者)すらも、それに對して何ら

の非難を發しないどころか、パウリーネを羨望してゐたとさへ想察される。ラーエルがまだ少女の時分に、次のやうな悲觀的な事を言つてゐる、生きるための手段と準備とだけあつても、人は生きる譯には行かない。私も生きられない、敢へて生きようとすれば、淺ましい社會全社會を、自分の敵としなければならぬ。

さてルチンデのモデルは、確かに小説中の人物よりも、優れた偉い女性であつた。彼女はラーヘル等の仲間、即ち當時の最も高い、最も自由な教養を代表してゐた、若き才ある猶太女の結社に屬してゐた。この仲間が當時尙、ゲーテを深く崇拜してゐた唯一の集團であつたことは、歴史的意味のある事だ。而して今問題になつてゐる女性は、モーゼス・メンデルスゾーンの娘ドロテアであつた。彼女は伶俐にかつ獨立心に富んでゐた、それで兩親の意を容れて銀行家の Freitag Freitag と結婚したけれども、それは精神的には不満足な結婚であつた。彼女がフリードリッヒ・シュレーゲルの心を牽き付けたのは、彼の容姿によつてのみでなく、その機智と鋭敏なる精神とによつてである。彼は當時二十五歳、彼女は三十五歳であつた。彼女の風貌と態度とには、肉感的な輕佻な點は少しもなかつた。彼女は大きな輝ける眼をもつ

てゐた。その顔立には、男性的の確固したところがあつた。彼は兄ヴィルヘルムへの書翰に於いて、彼女の「純正なる價値」を賞讃してゐる。「彼女は、彼の言ふ所に従へば、非常に直截であつた、そして戀愛、音樂、機智及び哲學以外の事には少しも心を傾けなかつた。」一七九八年に於いてドロテアは夫と離別して、シレーゲルに従つてイエーナへ行つた。彼女は、その時代のある書翰に於いて、恚う言つてゐる、市民的結婚に依つて結合するといふ事は、實際私達の目的ではなかつた、死より外の何物も私達二人を引き離すことは出来ないと、大分前から考へてゐたけれど。現在と未來とを打算して、それを調停せしめる事は、全く私の感情に逆行することである。然し若しも忌まはしき儀式が、不可離といふ事の唯一の條件とあるならば、それは瞬間の要求に服従して行動し、私に取つて最も大切な思想を、犠牲にせよといふ事なのだらう。

フリードリッヒとドロテアとの結合を調停することに對しては、二人の友人なる牧師、シュライエルマツヒェルより外の何人も、助力しなかつた。フリードリッヒの友人中にて、この牧師ほど、ルチンデに依つて強い印象を受けた者はない。彼は當時伯

林の Charité-Kirche (仁愛教會)の牧師であつた。大分前から彼は、フリードリッヒの解放に對する努力を、同情と歎美との念を以て眺めてゐたのである。「ディオティマに就いての論文と、シルレルの詩、婦人の品位」の犀利なる批評に於いて、フリードリッヒは社會に於ける婦人の地位の、因襲的見解を攻撃した。彼は、夫婦が互ひに輕蔑し合ひ乍ら共棲するやうな結婚、夫は妻に於いてたゞ彼女の性を、妻は夫に於いてたゞ彼の社會的地位を認め、而して兩者は彼等の子供等に於いて、彼自身の製作物と財産とを認めるやうな結婚、即ち世間一般の結婚を痛罵した。彼が冀求して居た事は、婦人の道德的及び精神的解放であつた。情熱と結合せられたる智力と教養とが、彼に婦人を愛す可き者となした性質であつた。「女らしさ」に對する平俗の見解を、彼は輕蔑した。彼は、婦人から無邪氣と教養の缺乏とを要求する、男子の愚劣さを、辛辣に罵つてゐる。かゝる要求に依つて婦人は、内氣になる事を強制せられる、而して内氣とは、無邪氣なき無邪氣の、虚偽なる口實に過ぎないのである。婦人の眞の無邪氣は、彼に従へば、精神的教養と充分に調和し得るものである。無邪氣は、宗教即ち情熱に對する能力の、存在する處に、存在するものである。高貴なる

自由思惟が男子に適して、女子には適しないといふ考へは、たゞルソーに依つて普遍的になされたる、平俗なる思想の一つに過ぎない。「婦人の奴隷視は、人類の病毒の一つである。彼の究極の願望は、彼が卒直に言つてゐるやうに、一つの道徳を建設することである。彼は、現行法及び因襲的正義に對する反抗をば、人間に於ける最初の道徳的衝動と稱してゐる。

シュライエルマッヒェルは、「アテネノウム」に發表したる斷片「高尚なる婦人の爲の理性問答示教」に於いて、シュレーゲルと全く同様に、婦人の解放を力説してゐる。この論文には四部結婚 (Ehe a quatre, 夫は妻に満足せずして一人の戀人に情を) に對する反對を是認しない、シュレーゲルの議論が引用されてあるが、これは、Haym が論證したやうに、シュライエルマッヒェル自身の作に外ならぬやうに想はれる。その引用せられたる斷片に於いては、幾多の平俗な虚偽な官定的の結婚が攻撃されてゐる、そしてこれらの結婚はたゞ真正なる結婚に對する遠き準備に過ぎないと言ふのである。シュライエルマッヒェルも、斯かる多くの試みは必要なものである、若し三組か四組の夫婦を持つて來て、これを適宜に交換する時には、屹度真正な結婚が實現されるに

違ひない」と言つてゐる。

シュライエルマッヒェルがフリードリッヒ及びドロテアに對して、個人的にも熱烈なる同情を持つてゐたが、それは確かに、當時の彼自身の境遇に原因してゐる。當時彼は、伯林のある牧師の妻で、子供もなくかつ非常に不幸に暮らしてゐた Eleonore Grunow という婦人と、熱烈に愛し合つてゐたのである。

彼は、ルチンデに對する世人の憤慨の底には、憫れむ可き無智と俗人的偽善的觀念との潜んでゐる事を發見した。この書を非難した人々は一方に於いては、ヴィーランドやクレヴィン (Grubbe, 佛蘭西の小説家。譯者) の淫靡なる小説に隨喜の涙を零してゐたのである。「これは予に、惡意が告訴をなし、敬虔なる暗愚が判決を與へる魔法審問を想ひ起こさせると彼は言つてゐる。併し彼をして特に、この迫害せられたる二人に對して、深切なる同情を懷かしめるに至つたものは、彼自身の言ふ所に據れば、彼等を以て風俗紊亂者とする非難は、概ねシュレーゲルに對する私的個人的攻撃の口實に過ぎなかつた、といふ事情である。

ドロテアは蒲柳の質であつたが、強烈なる精神を持つてゐた。彼女は、社會的因

襲に對する背離に依つて世間から與へられたる、陰險なる迫害や、ルチンデ」にかこつけての嘲罵やらを、斷乎たる態度を以て堪へ忍んだ。彼女は自分の選んだ男に對して、深厚なる歸依と信實とを示した。彼女は獨り彼の努力と關心とを分つた許りでなく、非常に氣の變り易い情人の機嫌をも忍び、かつ彼の愚かしい行動に對しても不平を言はなかつた。それ許りではなく、彼女の蟠りのない、快活な性質は、自分やその周囲の人々を襲ひ來る憂鬱の影を、追ひ拂ふことが出來た。彼女の樂しげな笑聲は、シュライエルマッヒェルの餘りに纖細な議論と、フリードリッヒの超越的「イロニー」との間から響いてるやうに感じられる。彼女は女々しい感傷性などは、少しも持つてゐないが、その情人に對しては、いぢらしい程の崇敬を拂つてゐた。彼女の小説「Florentin」は、多くの缺點を有つてゐるにも拘らず、フリードリッヒの作品よりも一層獨創的なものであるが、彼女がこれを出版した時には、出版者として彼の名が表題頁に載つてゐることを、何よりも誇りとした。恥づかしさと鼓動する心臓とを以て、彼女はこの小説の第一卷をシュライマッヒェルに送り、その草稿に筆を入れて貰つたのである。彼女は、總ての浪漫家が、シュライエルマッヒェルやシェリングス

ら、壯んに文學的活動をなした時代に、即ち一八〇〇年頃に、詩を作つたり、小説を書いたりした。斯くして彼女も浪漫派の一人と稱せらるべきである。實際に於いても彼女の小説は、「ウィルヘルム・マイステル」及び「タイク」の「フランツ・シュテルンバルド」の模倣であつて、總ての浪漫的傾向を表はしてゐる者である。才能ある少數者、自由なる放浪生活、懶惰及び無目的等が、この書に於いて讚美されてゐる。

ドロテアはこの小説の主人公に確かに、彼女の歎美の眼に映れるフリードリッヒの性格を附與した。彼女は彼に就いて恚う言つてゐる、彼は一風違つた、かつ狷介な性格を持つてゐる。それにも拘らず彼は無造作に人々の心を牽き付ける事が出来る。人が彼に矜持を以て反對しても、何の役にも立たない。その人は矢張彼に占有せられて了ふのである。或る時には彼は、自分の言葉を、その本來の意味でなしに用ゐるやうな事がある。或ひはまた人に賞められたりした時に、それは當り前だといふ風に、冷淡な顔をする事がある。さうかと思へば、他人の偶發した苟且の言葉が意外にも彼を嬉しがらせる事がある。彼はかゝる言葉の中に、ある特別な意義を發見したり、附加したりするのであらう。併しかゝる性質の爲

に、彼は時々交際社會などで、反感を買ふのである。

フロレンティンの告白、特に彼が青年時代にヴェネチヤにて送れる放縱なる生活の告白はまた萊府に於けるフリードリッヒの青年時代を想ひ起こさせる。フロレンティンは伊太利人であるが、彼は獨逸の美術と美術家とに、心を牽き付けられてゐる。彼は圖書や繪畫を獨修し、そして或は天才的浪漫的な素人畫家として、或は村から村へさ迷ひ行く浪漫的な樂人として、世を過ごしてゐる。彼の生れは、一つの秘密に屬してゐる。彼は、彼自ら言つてゐるやうに、貧しき孤獨なるもの、追放された不運兒である、ある不可思議なものが私を促進させる、そのあるものは言はゞ私の運命である。彼は愛情の絆に制縛される事を避けてゐる、予はたつた一人で、予の上に懸けられた呪咀を荷はうと思つてゐる。(フロレンティン。六五、八〇、一七〇、一九五、二三〇、三一〇頁)

これらの特質が、いかに素朴てかつ非常に浪漫的であるかは、一々細説するにも及ぶまい。併し斯かる小説を書いたにも拘らず、この婦人は多くの點に於いて、浪漫家の仲間を超越してゐる。流石に彼女は、伶俐にして生真面目なメンデルスゾ

ーンの娘であつた。

彼女は、自分でも言つてゐるやうに、フリードリッヒの藝術家たることを愛してゐたもの、彼が正當なる國家に於ける有爲なる市民たらむ事を、一層冀求してゐた。

而のみならず彼女には、文學上の創作とか批評とかは、彼女の革命的なる友人等には全く適してゐない者のやうに思はれた。彼女の理想は、劍の疲れを休養せむが爲にのみ筆を握つたゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲンであつた。(ハイム著「浪漫派」。五〇九、五二五、六六三頁)

吾人は茲に再び、フォン・カルブ夫人の場合に於けるが如く、この時代の婦人は、男子よりも一層勇敢なる集注的の力を有し、男子が單に文學的形式に於いてのみ取り扱はうとした諸問題を、社會的立脚地から觀察した事を發見する。彼女は、その周圍の男子等よりも、因襲的なる社會の壓迫を一層痛切に感じてゐる、彼等のやうに過度の教養に依つて神經を弱められてゐない、彼等よりも、多くの實際的眼光を持つてゐる。

この二人の相愛者の生活に於ける、最初の意味深き事件は、フィヒテが彼等に近づ

いたといふ事である。此哲學者は、大學教授として無神論を講義するといふので、攻撃されてゐた。カロリーネ・シュレーゲルは、ある女友に宛て、慙う書いてゐる、御尋ねのフヒテ教授に關する事柄に就いては、私は悲しい御返事を貴女に書かなければならない。その事は、公明にして自由なる態度を愛する者に取つては、非常な苦痛である。頑迷な君主と、一部分は加特力教徒であり、一部分はヘルンフォート派の教徒である彼の宰相達に依つて與へられた最初の非難が、何んな意味のものだか、貴女も大抵御分かりの事と考へる。：フヒテはグイマールよりの種々の報道を聞いて、非常に憤慨してゐる。彼は人々が彼を貶謫しようとするならば、彼の教授上の自由を制限するならば、辭職しようと言言した。：今や總ての朝臣、フヒテの學識に依つてけをされた總ての教授達は、口を揃へて彼の大膽と無考慮とを攻撃してゐる。彼の四面はみな敵である。

スリッドリッヒ、シュライエルマッヒェル及びドロテアの三人で書かれた一書翰に於いて、彼女は慙う書いてゐる、此處ではフヒテは安穩に暮らしてゐる。誰も彼の平和を妨害しない。ニコライ(著述家。一七八一—一七三三)は、彼は公開の講演をしない限りは、

少しも干渉されまいといふ事を、それとなく告げ知らした。講演をしたなら、また彼此いふ者が出て来るだらうといふのである。：私は幸ひにして、フヒテと親交を結ぶ事が出来た。哲學者達の會合に於いても、私は少しも窮屈を感じない。たゞ私は未だフヒテに對して、ある不安を持つてゐるが、それは彼の所爲ではなくて、世間及フリードリッヒに對する私の關係に原因してゐるのであらう——私はある杞憂を抱いてゐる——尤もそれは、ほんとの杞憂に過ぎないかも知れない。私はもう一語を書く事が出来ない。愛する友よ、私の哲學者達がこの室を絶間なくあちこち歩るいてゐる。私は眩暈でも起こし相である。

此處に吾人は、伯林に於けるドロテアの生活に於ける家庭の小情景を想像し得る。彼女とフリードリッヒとフヒテとは、その共同生活に於いて、非常に幸福に暮らした。かくてフヒテは、フリードリッヒを永くこの地に留らしめ、かつヴェルヘルム・シュレーゲル夫妻やシェリングをも此處に招き、廣い家を借りて料理人を一人使ひ、共同生活を營まむと畫策した。彼はこの事を妻にも書き送つた。然しこれは計畫だけに止つた。兩シュレーゲルの夫人の仲が、餘り善くなかつたのも、その原因であ

つた。併しドロテアが、當時不當な非難を受けてゐたフィヒテに對して、いかに深い同情を持つてゐたかは、その頃の彼女の書翰からも認め得られる。次の彼女が彼に宛てた書翰には、いかにも優しい感情が籠もつてゐる。貴方のお母様が私に、聖者を描いた優美な繪を送つて下さつた事を、心から感謝いたします。私はその繪を始終見える處に置いときます。私自身もこれより外の聖者の繪を選ばなかつたらうと思ひます。お母様は私と全く氣が合つてゐるのです。かういふ繪や加特力教の音楽は、私を非常に感動させます。私が基督教徒になるなら、必ず加特力教徒にならうと決心した位です。(G. Waiz, Karoline. 第一卷二五三、二五九、二六一、二九二頁参照。)

浪漫主義の宗教的混亂は、この書翰に極めて明白に表はれてゐる。併しドロテアのみが、ルチンデに於ける唯一の女性の原型ではない。ユリウスは彼の修養時代にある優れたる婦人を知つた。その婦人に就いては、慙う書かれてある。彼の精神的疾病は、ある婦人の最初の瞥見に依つて、たちどころに愈され、驅逐された。その婦人は比ひ稀なる女性で、彼の精神に深い感化を與へた第一の人であつた。……彼女はある男を選んで、それに身を委した。その男は亦彼の友人

で、彼女に愛される丈けの人物であつた。ユリウスは彼女の親友であつた。彼は自分を不幸にした總ての事を能く知つて居た、そして自分の無價値を峻烈に批判した。……斯くて彼は彼の愛情を心の奥へ追ひ込んだ、そして情念を内部で荒れしめ、燃やさしめ、弱らしめて居た。然し彼の外面は全く一變した。彼は感傷的な戀愛に陥らないやうに、子供らしい無經驗と、兄弟の情に見られるやうな淡泊さとの外觀を装うた。斯くて彼女は彼を、全く爾ういふ人物だと、思ひ込んで了つた。彼女は幸福に暮らしてゐた、いかにも快活で、爽かな性質を持つてゐた。彼女は何事をも咎責せず、かつ何事をも憚らなかつた、彼が無愛想な顔でもして居る時には、戯談や洒落を縦まにやつた。一體彼女には、高貴と優美と神聖と放縱とが具つて居た。それらが微妙な女らしい表現をなして居た。色々の特質が彼女に於いて、自由に、力強く、超越的に發展して居た。種々の異なる性質が、思ひ切つた混淆をなしてゐたが、少しも不統一といふ感じを與へなかつた。調和と愛との生き／＼とした靈氣が、それらを活かしてゐたからである。彼女は演劇の滑稽な場面などを、優れたる女優の臆面なさど巧妙とを以て、模倣することが出来た。さうかと思

ふと崇高な詩を、いかにも自然に、人の心を緊張せしめるやうに、朗讀することが出来た。時には彼女は、交際社會に出て羽振を利かせたり、嬉戲することを好んだ。時には彼女は、全く熱烈になつた。時には彼女は、優しい母のやうに眞面目に、淑やかに、かつ親切に、忠告やら助力やらをした。極く些細な出来事も、彼女の口から語り出されると、面白い美しい童話のやうに聽かれた。彼女は總ての事を、感情と機智とを以て抱擁した、總ての事に對して趣味と理解とを持つてゐた、彼女に觸れ來る總ての事を、優美に上品になした。彼女の熱烈なる同情は、いかなる崇高なること、いかなる普汎的なることに對しても注がれた。彼女はいかなる暗示をも直覺し、問はれなかつた問ひに對しても返答した。彼女に長い話しを聽かせることは、不可能だつた。それは自ら對話になつて了つた。話しに興味が出來て來ると、才氣と愛らしい表情との絶えず新たなる音楽が、彼女の繊細な顔面に漂つた。彼女の書翰を讀んでも、さういふ表情の變化が文字の間に、浮き出て來るやうに想はれた。それほど明徹に天才的に、彼女は自分の考を書いた、恰も人と對話でもするかの如く。かかる方面からのみ彼女を知つた人は、彼女はたゞ愛す可き女で、女優として

最も適當してゐると想像するかも知れぬ、彼女の慣用語は、優美な詩であつて、たゞ音律と韻格とを缺いてる丈けだと想像するかも知れぬ。ところがこの婦人は、あらゆる機會に際して、驚く可き勇氣と力とを示した。而してこれが實に、彼女が依つて以て人間の價値を評價した、最高の標準であつた。

この肖像畫には、描寫よりも寧ろ讚美の方が勝つてゐる。セント・ブウヅ (Saint-Bouve) として描かしたなら、別様の畫像が出來たであらう。而してこの畫像の原物は、「カロリーネ」といふ表題を以てその書翰集を出版して以來、恰も女王のやうにたゞこの名を以て呼ばれてゐる婦人である。彼女は幾多の異名を持つてゐるが、この名に依つて、能く人に知られてゐる。彼女は著名なるゲッティンゲンの神學者ミヒエリスの娘で、初めは醫學博士ベームルの妻となり、彼の死の後に、ヴァルヘルム・シュレーゲルと、最後にシェリングと結婚した。この最後の二人との結婚に依つて、彼女は浪漫家の集團の中心となつた。彼等は自然と、彼女の周圍に集合するやうに見えた。彼女はその集團のミューズの神となつた。カルデロン及びアリオストオの翻譯を以て知られたグリース (Grise) は、彼女は自分の知つてゐる最も優れたる才媛で

ある、と言つてゐる。シュテッフェンスとヴィルヘルムフォン・フムボルトも同じやうな事を言つてゐる。ヴィルヘルム・シュレーゲルは、自分の論文の若干篇の、一部分は、文學者としての總ての才能を持つてゐたが、その方面に野心を向けなかつた一人の才女に依つて書かれた者だと言つてゐる。シェリングは彼女の死に際して、慙う言つてゐる、假令彼女が私の妻でなくつても、予は人間として、この傑出せる女性、男らしい精神と、明敏なる智力と、最も女らしい、優しい、愛らしい心情とを兼ね備へて居つたこの稀代の婦人の、もうこの世にゐないことを、悲みかつ悼まざるにはゐられない。彼女は靈妙な、引力のある、繊細な、豪放な、而もいかにも優しい女性であつた、恰もレオナルド・ダ・ヴィンチの描ける婦人畫像の趣きを持つてゐた。ドロテアは、彼女に比すれば餘程單純である。

カロリーネは一七六三年に生れ、二十一歳の時に初めての結婚をなした。ヴィルヘルム・シュレーゲルはゲッティンゲンに於ける學生時代に、彼女と知つて彼女を戀した。然し彼女は彼の求婚を拒んだ。彼は一七九一年に、家庭教師としてアムステルダムに行つた。かくて二人の交際は一時杜絶されたが、手紙の往復はなされて

ゐた。彼は同市に於いて、大分艶間を流した、尤もその中に一つの眞面目な戀愛事件があつた。そんな譯で彼のカロリーネに對する感情も、自然薄らいてゐた。その間に彼女は、奇妙な境遇の網の中に陥つた。一七九二年に彼女はマインツへ赴いて、Georg Forsterゲオルク・フォアスターの家に寄寓して居つた。フムボルトの師であり、文學者としても自然科學者としても傑出せる、この天才的なる、而も餘りに多血質なゲオルグが、革命的計畫を思ひ立ち、ライン河邊に佛蘭西的自由を擴げむと企てた時に、カロリーネもこの努力に熱烈なる同情を寄せ、マインツに於ける共和黨員の俱樂部に出入した。而も彼女は、Custineキュスティン（佛蘭西の將軍。一七九三。譯者）の秘書官なる彼女の義兄弟、G. Böhmerグーテホルム・ボーマーを通して敵に内通してゐるといふ不當な嫌疑を受けた。獨逸の軍隊がマインツを征服したときに、彼女は捕へられて獄に投ぜられ、かくて數ヶ月の間、七人の捕虜と一緒に、苦まねばならなかつた。獄中より彼女は、シュレーゲルに手紙を書いて、救助を乞うた。マインツに於いて彼女は、自分の熱烈なる願望、彼女は男らしく、元氣のある Tatterタッターといふ男が、自分に求婚するだらうと冀望してゐたのだが、欺かれた絶望から、彼女の景慕者なる佛國人に偶然身を任した。而して若し

も彼女が丁度好い時機に出獄し得なかつたなら、その關係の結果は一生彼女に累したてあらうに。偶、ヴィルヘルム・シュレーゲルと彼女の兄弟との熱心なる盡力に依つて、彼女は保釋を得る事が出来た。ヴィルヘルムは騎士的義侠心を以て、總ての友人から見捨てられたカロリーネを、弟のフリードリッヒの保護の下に置いた。フリードリッヒは、斯かる不幸なる境遇に於ける、彼女を知つたのである。彼はいきなり彼女に牽き付けられたのではない、始めは寧ろ輕んずるやうな眼を以て、彼女を見てゐたやうだ。斯くて彼は次のやうに書いてゐる (Waltz 著「カロリーネ」第一卷、三四七、三四八頁)。「彼女の單純と、眞理に對する眞に神聖なる愛とは、予の全く豫期してゐなかつた處である。……彼女は予に深い印象を與へた。予は彼女の信頼と友情とを熱心に冀つた。然し彼女が予に對してある感情を示すやうに見えた時に、予は單なる試みは最も烈しい葛藤を惹き起こすであらう、そして吾々の間に一つの友情が成立するならば、それはたゞ多くの是認す可からざる努力の結果に過ぎなからうといふ事を明かに認め得た。……それからといふものは、有らゆる利己的の要求は放擲せられた。……予は彼女に對して、最も單純な無邪氣な態度を

以て對するやうになつた。予の態度には、息子の尊敬心、兄弟の淡泊さ、子供の卒直他人の恬淡より外の何物もなかつた。」

一七九六年にヴィルヘルム・シュレーゲルは、可なり多くの男と關係した彼の女友と結婚した。彼女の周圍には、當時の名流大家が集つた。彼女は始終、ゲーテ、ヘルデル、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、ティーク、シュライエル、マッヒエル及びハルデンベルクと交際した。當時は丁度、ゲーテが若々しい浪漫派の人々と、親交を結んでゐた時代である。この派はその頃結束されかゝつてゐた。仲間のもものはイエーナに於いて、その最初の會合をなした。カロリーネは、朝はゲーテの許にて朝飯の饗應に與かり、晝にはフィヒテの許に呼ばれるといふ風だつた、そして間もなくシェリングと親交を結ぶやうになつた。

彼女の批評力の強みと繊細とを示す爲に、予は次ぎにシェリングに宛てた彼女の書翰(一八〇一年三月一日)を抜萃しよう。私には、フィヒテは無比な思考力、確實なる演繹、明透精確、自我の直觀、發見者の熱烈を持つてゐるに拘らず、何うも何處か限られた處があるやうに、思はれます。それは神的靈感が彼に缺けてゐる處から來